

アメリカの人類学者デヴィッド・グレーバーは、自動化による生産性の向上は、労働時間の短縮に結びつかず、代わりにブルシット・ジョブを生み出したと主張した。ブルシット・ジョブとは「被雇用者本人でさえ、その存在を正当化しがたいほど完璧に無意味で、不必要で、有害でもある有償の雇用の形態」のことである。グレーバーは、無意味な仕事に就いている労働者は、自分の役割が自分の知っているほど無意味でも有害でもないふりをしているだけだと主張した。この説を知ったとき、獣害やナラ枯れの対応をしている役所や試験所の業務はブルシット・ジョブだと思えた。獣害やナラ枯れは、日本が抱える難問だが、このままでは、すまず深刻になる。とくに、現場を見ずに素人考えを並べた本は、ブルシット・ジョブの典型例であり、ナラ枯れは、そのような本のせいで拡大している。

自称“日本唯一の森林ジャーナリスト”の 田中淳夫氏は、ナラ枯れについても情報発信しているが、その内容は「素人考え」である。田中淳夫氏が著した【「獣害列島」増えすぎた日本の野生動物たち】にコメントすることで、獣害の本質を示し、都会で暮らす人達が森林・林業について理解していない現実を浮き彫りにする。獣害に苦しむ栗栽培者は、是非、読んで欲しい。

【16～17 頁】オオカミがなぜ犬になったのか。おそらく人間がオオカミの子供を手に入れて飼育したのだろう。そして徐々に人間に馴らしていった。それは単にカワイイからではなく、役に立つからだ。狩りに協力させたのかもしれないし、敵の来襲にいち早く気付く能力を買ったのかもしれない。これこそ家畜の始まりでもある。オオカミは簡単には人間にはなつかないが、世代を重ねて性質を変えていった。そして犬になると、人間社会に溶け込んだ。イヌ科動物は、基本的に群を作り、リーダーに服従する習性を持つ。だから人間をリーダーと認めれば、忠実なしもべとなるのだ。

【コメント】人間がオオカミに近づいたと推察しているが、オオカミが人間に近づいた可能性のほうが高い。オオカミの群れの中には優劣順位から獲物にありつけない個体がいる。立場の弱いオオカミが人間に近づき、人間が哀れみからオオカミを助け、助けられたオオカミが世代を重ねて、オオカミとは習性が異なるイヌになったと考えられる。

2000 年 11 月 7 日、和知町仏主のナラ枯れ現場に行く道中で、車の前を犬が走った。3 km くらい進むと分岐点があり、犬は左に進んだが、我々は現場に行くために右に進んだ。すると、その犬は分岐点まで引き返し、こっちを見てしきりに吠えた。現場作業中、「あの犬は何かを伝えたかったのでは？」と思った。夕方、職場に戻る帰途、その犬は、朝別れた分岐点にいた。分岐点を通過すると、犬は車の後を追いかけてきた。「やはり、なにかを伝えたいのだ」と確信し、車を反転させた。すると、犬は、朝と同じように車の前を走った。そして、分岐点で、朝と同じように左に進んだので、今度は、犬についていった。すると、分岐点から数 km ほどの場所に、シカ避けネットにからまった別の犬がいた。衰弱していたが、噛もうとしたので、居合わせた同僚達のタオルを集めて腕に巻き、犬に腕を噛ませている隙にネットをほどいて自由にしてやった。車の前を走った犬は、ネットにからまった仲間を見捨てることができず、人間が来るのを何日も待っていたのだろう。犬の賢さ、忍耐強さに驚いた。その場にいた同僚の女性職員 N さんは動物好きで「小林さんは犬の気持ちを察して助けた」と大勢に言っていた。それ以降、N さんは、目の色を変えてナラ枯れ研究に励み、大きな成果をあげた。オオカミも、仲間を助けるために人間に

救助を求め、救助を求められた人間がオオカミを助け、そのようにしてオオカミと人間との間に信頼関係が構築されて犬へと変化したのだろう。

【17 頁】DNA 分析によると、イエネコとヤマネコはほぼ同じで、オオカミとイヌよりも差異が少ない。つまりネコは身体的変化を経ないまま、人間と一緒に暮らすようになった。このため、人間がネコを家畜化したのではなく、ネコ自らが人と暮らす道を選んだといわれる。逆に言えば、イエネコも野生を捨ててはいないことになる。

【18 項】2018 年には全国で飼われているイヌは約 890 万 3000 頭、ネコは約 964 万 9000 頭である。...略...イヌの飼育数は 2012 年から 5 年連続で前年割れしているが、ネコは横ばい傾向だという。一方でペット産業の市場規模は拡大を続けており、近年は 1 兆 5000 億円前後にもなる。

【コメント】自分で集めたデータではなく、役所が公表したデータが散りばめられている。役人によるデータ改竄が社会問題になっているが、ナラ枯れや獣害に関する公的なデータはデタラメである。森林ジャーナリストなら、自分でデータを集めるべきだし、せめて、「現場で働く役人が削減された結果、データ収集ができなくなっている」という現実を公表して欲しい。

【22 頁】そもそも飼いネコは放し飼いが多い。飼い主の家から出入り自由で、ときに遠くまで放浪する。数週間帰らないネコもいるし、複数の“飼い主”を持つネコもいる。さらに特定の飼い主がおらず、町全体で世話されている「地域ネコ」と呼ばれる存在もある。

【コメント】子供の頃はノラネコが多かった。その頃のノラネコは、人を見ると逃げた。今、ノラネコは少なくなり、人を見ても逃げない地域ネコが増えた。ネコを追っ払う人が多いと、ネコは警戒するが、ネコを追っ払う人が減ると、ネコの警戒心は薄れて地域ネコになるのだろう。過疎化で里が安全になったことは、ネコの行動を変えたように、獣（シカ、イノシシ、サル、クマなど）の行動も変えた。そのことを著者は理解していない。

宝ヶ池公園は地域ネコが多く、2005 年頃からシカが出始め、2015 年には日中でもシカに触れることができた。Youtube に、宝ヶ池公園のシカの様子をアップしたが、再生回数は 200 回以下で、獣に対する世間の関心が低いことが浮き彫りになった。

<https://www.youtube.com/watch?v=4ORFMW8UdWM>

【24 頁】「奈良のシカ」は奈良公園内に棲むシカのこと、天然記念物に指定されている。歴史的に保護されてきたため人を恐れない。あくまで野生なのだが、鹿せんべい目当てに人に寄ってくる。身体の一部を触っても、あまり怒らない。時折、商店街や住宅街を闊歩する。これほどの大型動物を街の中で間近に見られるのは世界的も珍しい。

【コメント】過疎化で人が減った上に、農林業を辞めてサラリーマンになる人が増え、獣を追っ払う行為が減った。そこで、「獣害が増えたのは、日本列島全域が奈良公園のように、獣にとって安全な場所になったからだ」と訴えてきた。筆者も「奈良公園のシカは、あくまで野生なのだ」と書いているのだから、野生動物に対する人の干渉の低下（＝農山村が獣にとって安全になったこと）が獣害の根本原因であることに気付くべきだ。

私が暮らす集落は、半世紀前には 200 人以上がいて大半が農林業に従事していたが、今

は人口 50 人以下で、大半が農林業に従事していない限界集落だ。過疎が、獣害、ナラ枯れ、竹の拡大だけでなく、少子高齢化、自殺の増加など、日本が抱える問題の根本原因である。

2000 年頃、「過疎がナラ枯れの要因だ」と新聞記者に説明したが、理解してもらえなかったもので、以下のように説明した。記者はナラ枯れを理解し、重要な記事を書いた。

**ここから

実家は築 200 年以上の重要文化財。この家に、集落全体を撮影するカメラが 100 年前から設置されていたとする。その映像を、1 日を 1 秒に短縮して早送りで見た場合を想像して欲しい。1 年は 365 秒（≒6 分）なので、100 年は 10 時間の映像になる。前半 5 時間は燃料革命以前で、大勢の子供が外で遊び、大人も農作業や薪炭林施業、山菜採り、狩猟などで山に入る。集落周辺に点在する薪炭林では、2 時間に 1 回も皆伐され、株から萌芽した芽がニョロニョロと大きくなる。とにかく変化の大きい映像で見飽きない。一方、後半 5 時間は燃料革命以降で、人間活動は無に等しく、老人が、たまに山菜を採りに山に入るくらいで、木の成長もなく、変化のないつまらぬ映像である。燃料革命以前は、野良犬やキツネ、ウサギがたくさんいたが、燃料革命以降は、マツ枯れ、ナラ枯れ、台風などで倒木が発生し、竹藪が増え、シカがうろつく映像になる。燃料革命を境に映像は劇的に変化する。その変化がナラ枯れや獣害、竹の拡大などをもたらした。

***ここまで

【24～25 頁】環境省の調査では、2013 年の個体数は北海道を除く地域で、中央値で 305 万頭となっている。2020 年には、捕獲率が現状と変わらなければ 400 万頭以上に増えている計算で、2023 年に 453 万頭になると試算している。なお統計上の 90%信頼区間の上限数値は、646 万頭にもなる。中央値の 2 倍以上いる可能性もあるのだ。この数字には、北海道のエゾジカが含まれていない。北海道庁によるエゾジカ生息数は 2010 年に 68 万頭とされたが、2016 年度は 45 万頭と推定されている。駆除が進んだからだ。合わせると全国で中央値 350 万頭、上限で 700 万頭以上のシカが日本列島には生息することになる。

【25～26 頁】シカやカモシカのように、森林地域に点在している野生動物の生息数を推定するには、区画法と呼ばれる方法がよく行われる。調査地をいくつかの区画に分け、それぞれに調査員を配置し、一斉に同方向に歩いて、目撃した時間と数、個体の姿形や去った方向などをチェックする。そして各人の記録から重なる個体は除いて生息数を推定する。山中で区画を決めて、発見できたシカの糞を数え、生息密度を計算して割り出す糞粒法もある。さらに距離標本法とかカメラトラップ法も編み出されている、それぞれ地形や環境条件に合わせて実施されるが、どれほど実態をつかんでいるかははっきりしない。シカではなくニホンカモシカのケースだが、1983～84 年に環境庁が区画法で生息数調査を行った後で、群馬県ではヘリコプターで空から目視する方法で生息数を調べた。落葉樹林の山は、冬になると葉が落ちて地表部がよく見える。結果は、区画法推定値の 2 倍近くに達した。調査で見逃した個体は想像以上に多いようだ。

【コメント】車によるライトセンサスでシカの生息数が調査された結果、「京都府には 2 万 8000 頭のシカがいる」と推定された。これは過小評価だと考え、ハイブリッド車を購入した 2013 年、電気走行（ガソリン車よりも静かでシカに気付かれない）でライトセンサスを行った。その結果、数時間で 100 頭以上のシカを目撃した。美山町だけでも 1 万頭近く

のシカがいることになる。日本のシカ推定数の最大値は 700 万頭だが、もっと多いと思われる。ハイブリッド車でのライトセンサスの様子を Youtube にアップしたところ「まるでシカの惑星ですね」とのコメントがあったので、タイトルを「シカの惑星」に変更した。この動画の再生回数も伸びない。<https://www.youtube.com/watch?v=YRRVU-K4PZo&t=21s>

日本国民一人当たりの肉（牛、豚、鶏）の年間消費量は 2016 年には 31.6kg で、人口 1 億 2 千 7 百万人とする と 400 万 t を消費していることになる。日本にシカが 500 万頭いて 1 頭から得られる肉の量を 20kg と仮定すると、日本国民が全ての肉をシカだけでまかなった場合、わずか 9.3 日でシカを食い尽くすことになる。この試算も、シカの推定数が過小であることを示唆している。

日本の家畜数をネットで検索してみると、ニワトリは 2015 年に 8 億 1533 万羽、ウシは 2019 年に約 382 万頭（世界で約 15 億頭で日本は世界 64 位）、ブタは 2019 年に 900 万頭以上が飼育されている。日本の国土の 70% 近くは森林であるが、これらの家畜は、森林に比べて狭い草原や建物の中で飼われている。森林を主な生息地とする野生動物（シカ、イノシシ、クマ、タヌキ、ウサギ）の総数は、家畜の数よりも少ない。本気になれば、獣害は減らせるはずだ。

【26～27 頁】さて、ここでニホンジカがどんな動物なのかを押さえておきたい。分類は、偶蹄目シカ科シカ属。原産は日本のほかロシアも含む東アジア一帯だが、ベトナムや朝鮮半島では絶滅したようだ。もっとも欧米に移入したものが野生化した地域もあるから、現状では世界中にいる動物だ。12 の亜種に分類されるが、日本ではホンシュウジカ（本州）とエゾシカ（北海道）のほか、キュウシュウジカ（九州と四国）、ヤクシカ（屋久島）、ケラマジカ（慶良間諸島）、マゲシカ（馬毛島）、ツシマジカ（対馬）に分けられている。統計では、ホンシュウジカとキュウシュウジカを合わせてニホンジカとする。エゾシカはホンシュウジカと比べて体格や生態の違いが大きいから統計では別扱いするのだろう。一方でヤクシカは小型で形態も少し違う。いずれも増加傾向だ。なお島嶼部に分布するケラマジカやマゲシカ、ツシマジカも体格は小さい。ツシマジカは近年増えてきたが、ほかは希少種扱いだ。なお日本列島には、ほかに外来種のタイワンジカ（ニホンジカの亜種）やキョン（ホエジカ的一种）などのシカ類が野生化している。こちらも同じく獣害発生源だ。

【コメント】日本列島にいるシカ科を列挙しているが、北に分布するほど大型になる理由を説明した「ベルクマンの法則」を紹介すべきだ。恒温動物は体温を保つために体内で熱を生み出し、その熱生産量は体重に比例して増える。一方、体表面からの放熱量は体表面積に比例して増える。つまり放熱量は体長の 2 乗に、熱生産量は体長の 3 乗に比例する。寒冷地ほど放熱を抑える必要があるため、体重当たりの体表面積を小さくするほうが有利になる。だから、恒温動物の近縁種では、寒冷地に生息する種ほど大型になる。シカ科の場合、最も北に分布するヘラジカの体重は最大 700kg、やや南に分布するトナカイは 300kg、エゾシカやニホンジカは 200kg、ヤクシカは 40kg。台湾にも生息するキョン（シカ科ではないが）は 20kg 以下である。寒冷な地域に生息する種ほど、耳、吻、首、足、尾などの突出部も小さくなるのは「アレンの法則」である。

【28～29 頁】シカは草原性の動物とされるが、だっ広い草原というよりは、森林の周辺

や森林内にある草原といった環境を好む。多くは夜を林内で過ごし、昼間は餌を求めて草原など開けたところに出てくる。問題となるのは、その食性だ。通常は草の葉や茎、実、そして樹木の葉、実などを採食するが、食べられる植物は 1000 種を超えるという。農作物では、葉もの野菜はもちろんだが、果樹の果実に枝葉も食べる。シイタケなども大好物だ。餌が乏しくなると樹皮や落ち葉も食べる。もはや「セルロースなら何でも OK」と言わんばかりの状態だ。もっともアセビやシキミ、ナギ、それにシダ類は食べないとされている。たしかにこれらの植物は臭いがきつく、毒となる成分を含んでいるのもある。ところが、食べるものが少なくなると、アセビだろうがシダ類だろうが食べることが観察されている。臭いも慣れてしまうようだ。毒を含む植物も、少量ならよいのだろう。ちなみトウガラシのような香辛系植物も忌避するというが、ワサビの葉は食べるという。なお、たまに昆虫を食べた報告もある。アメリカの例では、口元に近づけた小鳥にかぶりついて食べたそう。ヤクシカが仲間の死骸をかじる姿も目撃されている。これらは事例としては珍しい行為だろうが、シカは植物しか食べられないというわけではない。奈良のシカでも、ゴミ箱にある弁当の残りの鶏のから揚げを食べていた報告がある。動物性タンパク質もちゃんと消化できるのだ（奈良公園からは、ゴミ箱が撤去された）。

【コメント】動物は植物と違って動く。動く動機は「食うため」「繁殖するため」「逃げるため」に大別できる。シカは、1000 種類の植物を煮炊きせずに食えるのだから、人間に比べたら「食うため」に使う時間ははるかに少ない。獣は多くの時間を「逃げるため」に費やしているが、筆者は「食うため」に着目しているので、間違った考察が多い。

【29～30 頁】シカの繁殖には「シカ算」があると（冗談まじりに）いわれる。ネズミやイノシシは、1 度の出産で 5～10 匹も産む。だから「ネズミ算」といわれる。一方シカの出産はたいい 1 頭。ならばそんなに増えないように思える。だが初産年齢は生後 16 ヶ月、つまり約 1 歳で発情して 2 年目から毎年子供を産む。そして、2 歳以上のメスジカの 9 割が妊娠するそう。寿命はオスが 10～12 年、メスが 15～20 年とされるが、仮に 20 年生きるメスの場合、単純計算では 18 頭の子どもを産むことになる。その半分がメスと仮定すると 9 頭が 2 年目から子どもを産む。その孫シカの半分が 2 年経つとまた出産する。子、孫、曾孫、ヤシヤ孫...が産む数を計算していくと、1 頭のメスが生きている間に何頭の子孫をつくるだろうか。実際の観察では、年間増加率は 15～20%に達し、4～5 年で個体数が倍増する計算になる。

【コメント】2005 年 12 月 19～20 日、京都大学で実施された数理モデル研修会に参加した。知り合いの野生動物研究者は「難解だ」と言って姿が見えなくなったが、最後まで受講して数理モデルを会得した。さっそく、シカに適用してみた。メスの平均寿命（12 歳）、メスが子供を生み始める年齢（16 ヶ月）、メス 1 回あたり産子数（1.1）、上限の生息密度（2000 頭/ha）、生息面積（京都府の山岳部と市街地を除く 37 万 ha）などの数値を使って個体数を推定した。その結果、京都府のシカ生息数は 10 万頭と推定され、京都府行政の推定値の 4 倍になった。こうした結果を他府県にも伝えたことが影響したのか、兵庫、福井、滋賀では、それまでの推定値を 4 倍程度に引き上げた。兵庫県では「スーパーコンピュータを導入して解析しなおした」と公表したが、私は、パソコンにインストールした Lotus123 という表計算ソフトで試算した。

京都府林業試験場に赴任してきた A 君（シカ研究で博士号取得）は「大台ヶ原のシカ害は、台風で木が倒れ、裸地化した場所が草原になり、その草を食ってシカが増えたせいだ」と主張した。私は「動物の増減は餌の量では決まらない」と反論したが、聞く耳を持ってくれなかった。獣の研究者は、動物の増減の要因として「餌の多寡」に注目するが、虫の研究者はそうではない。葉虫にとって餌は無尽蔵であるが、一方的に増えたりしない。虫は増えすぎると「疫病」や「天敵」によって激減する。獣も、餌の多寡だけでなく天敵も大きく影響する。大台ヶ原のシカが増えた時期は、全国でシカが増えた時期と一致しており、大台ヶ原でのシカ増加原因は、全国と共通していると考えられる。しかし、A 君は「大台ヶ原の個体群は近隣の個体群との交流がほとんどない」と主張した。大台ヶ原は洋上の孤島ではないので、私が開発していた数理モデルで「大台ヶ原に近隣個体群の 2%が侵入する」との条件を与えてみた。すると、見事に、大台ヶ原の個体群も増えた。驚いた A 君は「この数理モデルは論文にすべきだ」と言った。そして、私の言うことにも耳を傾けるようになった。シカは多くの植物を食べることができるので、餌を探す必要は少ない。メスは幼くして全て妊娠するので繁殖相手を探すためのコストも低い。つまり、シカは、行動の大半を「逃げるため」に費やしていると考えられる。奈良公園はシカにとって安全で「逃げる必要がない」から「食べる」と「繁殖」に専念でき、数が多い。「大台ヶ原でもシカを食う野良犬がいたのに、その野良犬を排除したので、シカが増えたのだろう」と A 君に指摘した。A 君は、現地で聞き取り調査をしたらしく「大台ヶ原では野良犬を駆除して以降にシカが増えた」と現地の人も言っている」と教えてくれた。数年後、A 君は「獣害を減らすためには訓練した犬を使うのがよい」とメールしてきた。これに関して山林（2013）に以下のように記述した。

***ここから

私が暮らす集落では、40 年前には獣害は無かった。その頃は野良犬がいたし、野良仕事で発生したゴミを燃やしたり、風呂や炊事で火を使う家が多く、夕方には集落周辺に煙が棚引いていた。しかし、今は、獣の脅威となる存在は集落から姿を消し、獣にとって安全な場所となった。鹿は千種類以上の植物を食べるため、餌を探し回る必要がない。また、2 歳になれば雌のほとんどが妊娠するため、人間のように交尾相手を吟味しているとは思えない。つまり、鹿が動く動機は大半は「食べるため」や「繁殖するため」ではなく、「逃げるため」だと考えられる。かつての日本列島には、ゾウ、トナカイ、バッファロー、牛の原種であるオーロックスなど鹿の競争相手になる大型草食動物が闊歩していた。オオカミやトラのような天敵も多かったに違いない。現在のように、競争相手も天敵もない状況は鹿にとっても想定外で、逃げる必要がないため、食べることに専念できるようになった。鹿が安全な場所に居れば、どうなるかは奈良公園を見れば一目瞭然であり、数が増えて悪さをするのは当然である。

***ここまで

【31～32 頁】神戸では、夜になるとコンビニにイノシシが買い物に来る。…冗談ばく語られるが、あながち嘘ではない。コンビニの周りにイノシシが普通にいるのだ。夜間、住宅街をイノシシが走ることも珍しくないそうだ。異人館通りで知られる繁華街にも出没している。また川岸を伝って海岸まで進出した例もある。そんな話を神戸の友人としていたのは

何年前だったか。すぐに他人事ではなくなった。私の住む町にも出たのだ。夕方、同じ町に住む友人から電話があり「今、家の前にイノシシがいる！」と悲鳴に近い報告を受けた。私はすぐにカメラを持って家を飛び出して駆けつけた。残念ながら(?) イノシシは既に去っていた。我が家は大阪と奈良との県境にある生駒山の麓にあるが、一応駅前には百貨店もあり、人通りもそこそこある街である。そして私の住むのはニュータウンの一角。しかし、イノシシの出没は珍しい話ではない。今では生駒市全域でイノシシが見られるようになった。…略…学生時代、山道を歩いていて、イノシシの足跡を発見して興奮したことがなつかしい。今では興奮するどころか「またあった」とイヤな気分になる有様だ。夜行性だとはいうものの、昼間に山林内を走る姿を目撃したこともある。ちょっと山の中腹に住んでいる人に言わせれば「夜、車で走ったら必ず出会う」そうである。

【コメント】 獣研に関わる役人や学者と同様、筆者も、都会で暮らしてきたので、獣害が理解できないのだろう。筆者は、森に接したことによって体験した話を綴っているが、誰でも体験できる軽薄な内容である。山村で林業関係の仕事をしていれば、イノシシは見るだけでなく、接触することにもなる。私なら、以下の体験談を書くことになる。

***ここから

高校3生(1983年)の時、登山競技で国体予選を戦っていたので、10月下旬から受験勉強を本格的に始めた。家の周りでイノシシがウロウロするので気になって勉強に集中できなかった。私は、子供の遊び(お手玉、けん玉、縄跳びなど)は得意だった。縄跳びの二重跳びで501回跳んだが、この北桑田高校記録は塗り替えられることはなかった。しかし、最も得意だったのは「モリを使った漁」である。鮎をモリで仕留めることができた。だから、イノシシを仕留めてやろうと、勉強机の横にモリを置いた。イノシシの気配を感じると、モリを持って外に出た。2mくらいまで接近できたこともあった。そんなことをしている時、美山町内でイノシシによる死亡事故が発生した。飼育中のイノシシに急所をえぐられたことによる失血死だった。そそくさとモリを片付け、ミカン缶を半分に切って蠟を流し込んで作った蠟燭の火でイノシシを追い払った。

就農者が減り、火でイノシシを追い払うことが減った。私が暮らす集落でもイノシシによる被害が増え、困り果てた住民は総出で、大きな罾を建設した。最初は獲れなかったが、サツマイモを餌にしたら、すぐにイノシシが2頭も入った。イノシシの息の根を止めるためにやってきた猟師は、イノシシが落ち着くまで待って、目に弾があたるように射撃した。獲物は上等の肉として高く売れ、その資金(50万円以上)でバスを借り上げ、集落の大半の人達と、1990年に大阪市で開催された花博を見に行った。

就職1年目(1988年)、社員旅行で温泉に行った。臨時職員のA氏と温泉に入り、その方の尻を見て驚き「なんの傷ですか？」と尋ねてしまった。すると「若い頃、イノシシを撃ったが、まだ息があったので、銃床で頭を殴ったら、イノシシが立ち上がって牙で尻をえぐられた。仲間の猟師に運んでもらった。一人だったら死んでいた」と言われた。帰途、出石で蕎麦を食ったが、その店で展示されているイノシシの牙に触ってビックリした。注意して触らないと深手を負うほどイノシシの牙は鋭い。

32歳の頃(1998年)、舞鶴大浦森林公園で、ぬた場(イノシシの風呂)を発見した。あまりにも広いので、車を降りて「ぬた場」を歩いた。すると、数頭のウリボウが横切った。ヨチヨチ歩きだったので追いかけたら、大きなイノシシの突進を受けた。とっさにかわせ

たが、当たっていたら大怪我だった。同じ頃、大浦森林公園でアケビを食べようと木に近寄ったら、木の上にツキノワグマがいて、静かに後ずさりして逃げたこともあった。また、近くの大江山で、東大の Y 博士を車に乗せて走っていたら、ツキノワグマが横切った。その直後、数十人の小学生の遠足の行列に出くわしたので、引率の先生に「クマが近くにいましたよ。大騒ぎしながら歩いてくださいね」と伝えた。

33 歳の頃（1999 年）、美山町宮脇で大きなイノシシと車で併走した。消防詰所で、その話をすると「車で挟んで捕まえたら高く売れたのに」と消防団員から言われた。実際に、車をイノシシにぶつけて捕獲する人はいる。「次のチャンスがあればイノシシを車で挟んでやろう」と考えた。すると、そのチャンスは直ぐに訪れた。実家から 200m ほどの地点で、大きなイノシシと併走した。道の脇は高さ 2m 程の石垣なので絶好のチャンスだった。考える間もなくハンドルを右に切ってイノシシを車と石垣の間に挟んだ。バックミラーで確認したら、イノシシと目が合った。イノシシは「なんでこんなことをするのだ」という目で見つめた（ように感じた）。可哀想になり、すぐにハンドルを左に切った。イノシシは、後ずさりして逃げ去った。家に戻って車を確認したら、車体が大きく凹んでいた。深夜 12 時を過ぎていたが、傷を負ったイノシシがうろついていたため、集落内の飼い犬が一斉に吠えた。車の修理代を賄うため、父を叩き起こして、2 人で農用フォークを持ってイノシシを探したが見つからなかった。翌朝、現場にイノシシの血痕が残っていた。職場で、同僚に顛末を話したが、信じてもらえなかったので、車を確認したら、車体の凹みにイノシシの毛が残っていた。あのイノシシは多数の肋骨を骨折したはずだ。

2011 年 11 月 3 日（45 歳の時）、偽札偽造犯と出くわして口論となり、車のバンパーで挟まれて両側肋骨多発骨折・両肺血気胸という重篤な状況に陥った。車で挟まれた時、相手の車（クラウン）と私の車（インスパイア）のナンバープレートの位置が一致し、その空間に頭部を入れることができ即死は免れた。犯人の 1 人は、同じ手口で殺人を犯した人物で、クラウンのアクセルを 1 分以上も踏んで私の息の根を止めようとしたので、殺意があったことは間違いない。車に挟まれる寸前、胸にあてていた両手を降ろすことができたので九死に一生を得た。裁判員裁判で、医師や事故再現テストしたトヨタ社員の証言から、両手を降ろしていなければ、胸に当てた手が心臓を圧迫して死んでいた。とっさに最適な行動が選択できたのだ。私に本の執筆を依頼していた新潮社の I 氏に、殺人未遂事件の顛末を話したところ「奇跡の生還を科学する」という本が送られてきた。その本には、人間が危機的状況を脱した事例が列挙してあった。人間は、危機的状況になると脳が活発に動き、奇跡のような行動をする。危機的状況の中で走馬燈のように記憶が蘇るのは、過去の経験を参考にするためだ。犯人達は、2t ほどある車を勢いよくぶつけただけでなく、1 分以上もアクセルを踏んだ。だから、私が死んだと確信してその場を立ち去った。実際、呼吸ができなかったので長くは持たないと思った。しばらくジッとしていたが体温が下がってきたので、苦痛に耐えながら車に乗り込み暖をとった。すると呼吸が楽になり、目も見えるようになった。午後 8 時以降で、車が頻繁に通る峠道ではないので、シートを倒したまま車を走らせた。すると、500m ほどの所にある神社で祭事をやっていて、その場にいた警官に助けられた。刑事は私の身を案じたのか、初動が悪く犯人を取り逃がしたことが表沙汰になるのが嫌だったのか、「被害届を出すな」と言った。「するな」と言われると「したくなる」、「しろ」と言われると「したくなくなる」のがカリギュラ効果だ。手

口からして凶悪犯であることは明白だった。これほどの凶悪犯を野放しにしたら、また罪を犯し、その犯行で亡くなった方は、私が殺したことになると考え、被害届を出してしまった。犯人達は逮捕され、裁判員裁判の結果、2人とも有罪（7年以上の服役）になった。病院への搬送から裁判員裁判で勝訴を勝ち取るまでのエピソードは、書いても信じてもらえないことばかりなので割愛するが、あのような状況で死ななかつたのは、石垣に挟んだイノシシを助けたからに違いない。まさに「情けは人のためならず」である。

2016年10月27日、ナラ枯れ防除資材であるカシナガトラップを撤収するため、軽トラックで浄瑠璃寺の境内林に入った。すると、罠にかかったイノシシが逃げようとして暴れていた。足がちぎれそうなほど暴れ、半径3mほどの溝ができていた。あまりにも可哀想なので猟師に来てもらって射殺してもらった。猟師は「猟期ではないので、ここに埋める」と言った。その年、スタジイが豊作であった。そこで私は「このイノシシはドングリをたらふく食っているのだから美味しいはず。持って帰って食べる」と言ってしまった。猟師は「先に言ってくれば、肉に弾丸を当てなかったのに」と言いながら、内蔵などを取り外してくれた。その猟師は「これは良い肉だ」と言っていた。内蔵などを除去しても40kgはあった。苦勞して軽トラックに乗せ、職場まで運んだ。道中、肉が腐らぬようにコンビニで氷を買って内蔵が有った場所に詰めた。職場に戻って、同僚達に荷下ろしを手伝ってもらった。「イノシシが腐るので手伝って欲しい」と正直に言えば、手伝ってもらえない可能性があった。実際、トラップの下に隠していたイノシシの死体が現れると、同僚達は、蜘蛛の子を散らすようにいなくなった。イノシシの美味しさを知っている職員はいなかったのだろう。そもそも「美味しいジビエを食べたい」と思っている日本人は少ない。都会で暮らしている人の5割以上はジビエ未体験だ。都会で暮らしているのにジビエに深い関心を持つのは、文化度が高い人（≒金持ち）くらいである。獣の死体を見て逃げるのは当然である。職場でのカシナガトラップの荷下ろしが後終わると、実家に戻って、イノシシを由良川に浸けた。近所の猟師が「3万円で買ってやる」と言ったが、「美味しいはず。親にも食べたい」と断った。すると近所の猟師は「俺にも少し譲ってくれ」と言って、イノシシを解体してくれた。近所にも配ったが、残り15kgほどを家に持ち帰った。母は57歳の時に、父は70歳の時に、ガンで胃を摘出しているため、たくさんの肉は食えない。持ち帰ったイノシシ肉を見て「こんな脂っこい肉は食えない」と怒った。しかし、両親も、その美味しさに直ぐに気付いた。ぼたん鍋、焼き肉、トンカツ、カレーやシチューなどにして毎日のように食べた。2ヶ月ほどで完食し、両親は「薬食いするから、もっともらってこい」と言った。「薬食い」とは、滋養や保温のために冬に獣肉を食べることをさす。獣肉は、卑しいものとみなされ、一般には食べなかったが、病人の薬になるという口実を設けて食べてきた。このイノシシは、両親の健康寿命を延ばしたはずなので「薬食い」とは言葉どおりであった。

魯山人が美食家になったのはイノシシのせいである。魯山人の幼少期は、獣を食うことが奨励されていた時期で、京都市内にはサル専門店もあったようで、魯山人は「サルが一番美味しい」と言ったらしい。魯山人は、子供の頃、食材の買い出しをしていた。精肉店で肉を吟味するようになり、イノシシは、捕獲場所、捕獲時期、性別、年齢、部位によって味が異なることを知った。とくに、丹波栗を食っているイノシシが美味しいことを知り、美食家になった。魯山人が「不味い」と評したのは、イノシシを改良した豚であった。当

時の豚はトイレ掃除の役割を担っており、お金持ちの屎尿や残飯を食っていたので不味かったのだろう。イベリコ豚（イベリコ豚は 3500 年の歴史がある。丹波栗やボルドーワインでも 2 千年の歴史なので世界最古のブランド品だろう）が美味しいのはドングリを食べさせているからである。

京都市内の料亭を貸し切って美食家を集め、栗、山菜、鮎、獣肉をふるまってきた。2018 年 11 月 14 日の栗の会では、嵐山吉兆の T 会長に、魯山人について調べた上記の内容を話した。すると、T 会長は「魯山人本人から聞いた。嵐山吉兆では、生きたイノシシを仕入れてドングリを食わせて客に出している」と話された。そして、どこにも書いてない情報も教えてくれた。京都には「白足袋に逆らうな」という言葉がある。京都市は、文化財の保存整備推進のため、拝観料を払う際に 1 人につき 50 円の古都保存協力税を徴収した。しかし、清水寺などの有名寺院は拝観停止などして抵抗したため、1985～1988 年の 3 年間で古都保存協力税は廃止に追い込まれている。京都では、お坊さんに逆らうと、なににもできないのである。しかし、魯山人は坊さんと喧嘩したそうである。仲をとりもつため、料理の席に、魯山人と高僧（東山本願寺の和尚）を招いたが、遅参した魯山人は玄関をくぐると「線香臭い。坊主がおるなら帰る」と言って、和解の場を台無しにしたそうだ。あまりにも面白い話なので「本に書くべきだ」と言った。その場に出版社の方がいて、実際に「最後の料理人」という本が出版された。その本には、魯山人やイノシシのことは書いてあったが、面白い話（魯山人と和尚との喧嘩）は書いてなかった。本当のことを書けば面白いが、名誉毀損になるので、全ては書けない。名誉毀損罪は、悪人を守っている。

【37 頁】江戸時代には、藩を上げてイノシシを駆除した地域が各地にある。農民を総動員して勢子として地域一帯のイノシシを追い出し、狩りをしたのだ。1 日で数百から 1000 頭以上仕留めた記録もある。これらは、農作物被害に苦しむ農民の要請で行われるが、武士にとっては軍事演習を兼ねていた。対馬藩のように完全に駆除してイノシシが生息しなくなった島もある。実は、私が住む町の近くの生駒山でも、以前はイノシシが生息していなかったらしい。1960 年に編纂された『生駒市史』に、イノシシは生息しないと記されている。ただ山腹の棚田地帯には江戸時代からシシ垣が多く築かれていた。イノシシが農地に侵入しないように石垣を築いたのだろう。集落ごとに農地を囲むように 2 メートル近くの高さがあったらしい。つまり、過去にイノシシが生息していたのは間違いない。それがあつた時期から姿を消すのである。シシ垣も現在は見られない。戦後、ほとんどが取り壊された。高度成長時代に、庭石としてシシ垣に積んだ石が高く売れたからだそうだ。

【コメント】私が暮らす集落にもシシ垣の形跡がある。石垣ではなく、土を深く掘ったシシ垣で、とくに深い場所はゴミ捨場になっていた。そこは、子供の遊び場で、家電製品を分解してスピーカーの磁石を集めたり、蛍光灯に石をぶつけて割ったり、今の子供なら叱られることをして楽しんだ。そもそも、今は、大型ゴミの投棄は違法である。獣害が深刻なこともあり、集落に「シシ垣を復活しよう」と提案した。しかし、シシ垣の復活には 1 億円ほどが必要なので却下された。集落には 50 戸ほどの家があるので、200 万円ずつ出せば、シシ垣は復活できたが、そのような金を出すメリットがあるのは、専業農家である私の家だけになっていた。

日本の獣害研究者は、現代人が書いた論文は読むが、古文書はあまり読まない。しかし、

そもそも、獣害やナラ枯れは江戸時代以前からあったし、日本人は、うまく対応していたのだから、論文よりも古文書のほうが参考になる。著者が、この本で古文書を紹介していることは評価できる。

実家を建てたご先祖様は筆まめで、東北まで巡礼した際の旅日記に、各地の物価（草鞋の価格、散髪代など）を記した。歴史学者が、その旅日記を現代語訳してくれた。泥棒に柳行李（キャリーバッグ）を盗まれた際、トラベラーズチェック（京都に銀を預けて旅した）とパスポート（関所を超える際に必要な身分証）が枕元に残されたことが書いてあった。歴史学者は「この旅日記から当時の風情がわかる。当時の泥棒には人情があったことがうかがえる」と言っていた。この旅日記を残したご先祖様は、他にも多数の書物を書き残している。実家は、30年以上かけて建築されたが、大工が、どこの木を、どのように使ったかを記録した。その古文書と建物が共に現存しているので、母屋、小屋、土蔵、庭まで重要文化財に指定された。実家には古文書が多く、父は、それを読み、荏戸善政を尊敬し、その直系に求婚、私が産まれた。母は荏戸善政の直系である。荏戸善政は、ケネディ大統領が尊敬した上杉鷹山を育てたと評されるほどの大人物で、天明の飢饉で多くの民が命を落としたことを憂い、救荒食物を列挙した「かてもの」を世に残した。この本は、大勢の民を救ったのだから、まさに、政治家の鏡である。当然、私も、獣害を知るために古文書を読んだ。そして、山林（2013）に次のように記述した。

***ここから

美山町の『知井村史』には、「獣が里に出てくることは今も脅威であるが、この現象を、山林を針葉樹一色にしてしまったことに原因があるとして都市の識者から叱られることも多い。...略...それなら昔は獣に悩まされることはなかったかということ、そうでもない」という書き出しで、江戸時代の獣害のすさまじさが紹介されている。庄屋が村人を動員して行う庄屋狩りで、50頭近い猪鹿が捕獲されたことや、水稻の収穫が皆無になった事例があることを知った鹿の研究者は驚いていた。英語の論文で海外の情報を知るのも重要だが、古文書で過去の日本の情報を知ることも重要である。

「人が森林を利用しなくなり、獣にとって安全な場所が増えたことが獣害の誘因になっている」との説も、データで証明しなければ憶測に過ぎない。そこで、美山町全体に60ヵ所ほどの調査地を設定し、下草の食害程度を把握した（食害がない場合を0とし、下草の被覆度が10%未満を4とする5段階評価）。その結果、就農者数が多く、鹿が危険を感じる集落に近いほど食害程度が低いことが確かめられた。

先人達は、シシ垣を設けて集落を獣から守っていた。試算では、シシ垣が高さ2m×幅1mの土塁であったとすると、その土木工事量は、万里の長城を上回った。明治になって鉄砲の所持が自由になり、獣は絶滅の危機に瀕した。100年以上も獣害に悩まされることがなかったため、シシ垣の消滅と共に、過去の獣害も忘れ去られた。重機がない江戸時代に、シシ垣を建設した人達が、柵で囲まれた現在の集落を見れば、「こんな小手先の対策では集落は守れない」と嘆くであろう。獣害を減らすためには、人と獣が暮らす場所をシシ垣などで分離することが先決であり、それでも侵入する獣は捕って利用すべきだ。獣の絶滅は回避せねばならない。しかし、このままでは希少植物が絶滅するだけでなく、農山村での暮らしが崩壊し、日本文化が喪失してしまう。

***ここまで

庄屋狩りで多数のシカやイノシシが捕獲されていたことを知った同僚の A 氏は「江戸時代のほうが獣害は深刻だったのか」と驚いた。筆者も、古文書で過去の状況を把握しているが、獣害の原因は理解していない。筆者が暮らす生駒山の山麓で、ナラ枯れと獣害について講演したことがある。その時、講演を聴いた方達は「目から鱗が落ちた」と言って、講演後も、たくさんの質問をされた。筆者も、私の講演を聴いて勉強すべきだ。

映画評論家は、映画監督経験者や俳優ではない。たくさんの映画を見て、自分の見解を述べる仕事だが、その情報は多数の映画を見ることができない一般の方の役に立つ。野球評論家は、野球をたくさん見て、自分の見解を述べる仕事ではない。そんな見解は役に立たないから、野球で実績のある人物が野球評論家になり、技術や作戦、心理状態を説明する。筆者は、森林ジャーナリストと自称しているが、大学の林学科を卒業したに過ぎず、林業に従事したことはなく、研究もしていない。映画評論家のように、あちこちの森林を見聞きしただけで意見を述べている。私は、幼少期から林業に従事し、研究実績も多く、いろいろなものを開発してきた。役人として 30 年以上も努め、大学教員も 10 年ほど併任し、限界集落の区長もやった。日本で唯一の「一人産官学」かもしれない。その私ですら「森林ジャーナリスト」と自称することは憚られる。素人が、森林について軽率なことを書いて発信するのは「百害あって一利なし」であり、弊害を与える。ナラ枯れを抑えることに成功した現場は、私が関与した現場の他は少ない。それなのに間違っただけの防除法が普及しているのも、筆者などが「素人考え」を述べるからだ。

カシノナガキクイムシ（以下、カシナガと略記）の生態を解明し、多数の防除法を開発した。ナラ類の幹をシート被覆する方法は、韓国では主流で、韓国ではナラ枯れはかなり抑えられている。また、カシナガトラップも考案し、多くの現場で採用され、ナラ枯れを抑えている。しかし、筆者は、2017 年 8 月 2 日、「ナラ枯れ防止装置？」というタイトルで、シート被覆とカシナガトラップを批判し「試行錯誤もいいたろうが、こうした方策では徒労感を感じるのだが」と締めくくった。

<http://ikoma.cocolog-nifty.com/moritoinaka/2017/08/post-2ac0.html>

カシナガトラップは、カシナガの攻撃を受けても枯れない穿入生存木を増やして害を抑える装置である。しかし、筆者も、カシナガトラップはカシナガ捕獲装置だと勘違いしている。日本では、健康なナラ類の幹に穴を開けて殺菌剤を注入している。この樹幹注入に最初に取り組んだのも私だが、うまく行かなかった。そもそも、カシナガが木に穴を開けて枯れるのがナラ枯れだから、人が健康な木に穴を開ける樹幹注入は被害を助長する。筆者は「唯一の森林ジャーナリスト」と自称しているだから、防除成功例があるシート被覆やカシナガトラップを批判するのではなく、被害を拡大している樹幹注入を批判すべきだ。多数の木に樹幹注入した大阪万博公園では、数千本の木が大被害になり、多数の枯れ木が放置され、倒れた枯れ木が通行人の頭を直撃する深刻な人身事故が発生した。ジャーナリストなら、そうした事実を書くべきだ。私が書いた本や論文を読み、講演を聴講すれば、少しは森林のことを理解できる。そうすれば、ナラ枯れで間違っただけのことを書くこともなくなるし、獣害が拡大している理由もわかる。Youtube にアップしている「樹幹注入の問題点」の動画くらいは見ておくべきだ。<https://www.youtube.com/watch?v=zZuXnC6lhGk>

筆者は、2017 年 1 月 6 日、「農業するカシナガ」というタイトルで、「ナラ枯れ木の伐採をしたからというわけではないが、ナラ枯れの原因であるカシノナガキクイムシについて

て少し調べた」との書き出しで、カシナガの生態について書いているが、その内容は、私
が応用動物昆虫学会のHPに記載した内容のコピペに等しい。

http://column.odokon.org/2007/0327_180100.php

カシナガが、アリやシロアリのような真社会性の暮らしをしていることを解明するため
に、10年以上を費やしている。ジャーナリストでも、コピペする場合は、情報源を明示す
ることは最低限のマナーだ。

【42 頁】 ツキノワグマの生息数は、1992 年には 8400～12600 頭と推定されていた。しか
し、2010 年の推定は 13000～30000 頭（環境省生物多様性センター）になっている。ヒグ
マの推定数は 1990 年代で 2000～3000 頭。それが 2014 年には 16000±6700 頭（北海道ヒグ
マ管理計画）という数字になっている。20 年間で 2 倍以上になったと想像できる。

【44～45 頁】 最近はカメラトラップ法の導入も増えている。少し高いところにハチミツな
どの餌を仕掛け、それを取ろうと立ち上がったクマをセンターで捉えて自動撮影するのだ。
ツキノワグマの場合は、胸の月輪の形で個体識別できる。こうしたトラップを数多く設置
して生息数を割り出すのだ。これはわりと精度が高い。ちなみにカメラトラップを導入し
た秋田県では、毎年確認されるクマの数が増え続けている。2017 年の生息推定数は 1015
頭だったが、2020 年には 4400 頭という数字を出している。しかも、その 3 年間で約 1800
頭を捕獲しているのだ。同じような調査を行った京都府でも、2002 年の 300 頭から 2018
年の 1400 頭まで増えていた。それまで「絶滅危惧種」指定だったが、もはや外された。ツ
キノワグマは毎年 1000 頭以上、多い年では 5000 頭以上も捕獲され、その大半が殺処分さ
れている。ヒグマの駆除数も毎年 500～800 頭に達している。2019 年はツキノワグマは 5398
頭捕獲され、5153 頭が殺処分された。いずれも人里に出てくるからやむなく退治したクマ
の数だ。「クマを殺したくない」と、箱罠で捕獲して人家のない遠くの奥山まで運んで放
す「奥山放獣」という手段が取られたこともある。これはクマを殺さず、人的被害を減ら
すための策でもある。しかし、檻の扉を開けてクマを外に出す行為は危険なうえ、日本の
山は奥山と言っても人家からさほど距離がない。奥山で放した個体が再び里に出てくるケ
ースも報告されている。実際、私は、山間部の“ポツンと一軒家”に住んでいる人が「自分
の住んでいる近くに放された」と怒った声を聞いている。そこで最近では、あまり行われ
ないようだ。一部の団体や個人は、「奥山の天然林が伐採されてドングリのなる木が減っ
たことで、飢えてクマは人里に出るのだ」と主張し、「ツキノワグマもヒグマも数を減ら
している」と断言する。そして駆除に反対するだけでなく、野山にドングりを大量に撒い
ている。また、一部の森林組合が、山にドングリのなる広葉樹を植林する計画を立てた。
「奥山で餌が得られたら、里に下りてこないだろう」との発想だろう。だが、それらの活
動は餌付けと同じであり、よりクマを誘引しかねない。どう考えても逆効果である。

【コメント】 「クマが増えている」と断定すべきでない。世界中で大型哺乳類は減ってい
る。特にクマ科は減っている種が多い。日本だけで「クマが増えている」ならば、その理
由を説明する必要がある。

マタギをやっていた方達に話を聞いて回った。美山で料理旅館を経営する I 氏は以下の
ことを言ったが、300 頭以上のクマを仕留めた人物の主張は腑に落ちた。

***ここから

- ・マタギはクマ肉ではなく、胆（胆嚢）を売る仕事。クマの胆は、金持ちがバイアグラとして使うために高く買った。年に3頭のクマを仕留めれば暮らせた。
- ・マタギが減ったのは、クマが減ったからだ。尾根に林道を設置してクマのねぐらを奪った。奥山造林はクマの餌を奪った。哺乳類も、数が減ると近親交配するため、近交弱性によって性器に異常が起こる。クマの金玉が1個だけだったのを見てマタギをやめた。学者が「クマが増えている」と言っているようだが、里に出るクマが増えているだけだ。
- ・クマが人を恐れなくなったから里に出てくるようになった。クマの嗅覚は犬よりも優れ、数 km 先から人間の気配を察知する。聴覚も鋭い。美山で捕獲したクマを六甲山で放獣したが、美山に戻ってきた。自分の気配を消さないと、先にクマに気付かれ、クマを仕留めることはできない。昭和50年代になると、マツ枯れ木を運び出すためにヘリが飛ぶようになった。ヘリの爆音を聞くようになったクマは、音を怖がらなくなったので里に出やすくなった。箱罠による捕獲もクマを里に惹きつけた。現代人は、ハチミツやリンゴ、ヌカのようなクマの好物で誘引捕獲する。餌には人間の臭いがついているから、クマは「人間の臭い=美味しい食べ物」と考えるようになり、里に出るようになった。マタギが、奥山に入る際、里の臭いを持ち込まぬようにしていたのは、クマを里に惹きつけないためだ。餌でクマを誘因捕獲するのは愚行だ。

***ここまで

2005年、全国各地でクマが出没し、人身事故が多発した。その時、私は「クマが増えたと決めつけてはいけない」とメーリングリストで指摘した。すると、都会生まれの学者や役人から集中砲火を浴びた。東大のI博士が「クマは増えている」と主張していたので、役人がそれに賛同し、私のような公立林試の研究員の意見を否定するのは当然である。そこで、I博士と直接議論した。その頃「ナラ枯れによってドングリのなる木が減ったこともクマ出没を助長した」と多くの人が考えていた。しかし、I博士は、ナラ枯れが発生していない地域でもクマは出没しているので、ナラ枯れの影響は小さいことを理解していた。私が「里が安全になったからクマが里に出てくるようになった。学者が調べている範囲は、奥山ではなく里山だ。里山に出没するクマが多いからといって、クマの数が増えていると決めつけるのは早計だ。マタギの話聞くべきだ」と主張した。I博士は、丹沢山系（ほぼ里山）を調査した結果から「クマが増えている」と判断されていたが、マタギの話聞かれた。そして「小林さんの意見が正しい可能性もある」とメールされた。ちょうどその頃、ナラ枯れの研究をまとめた総説が日本森林学会誌に記載された。メーリングリストのメンバーの中には「公立林試の研究員が、何をほざいとる」と思っていた人もあったようだが、私が書いた総説が記載されて、状況は一変した。I博士らとの共同で、2006年4月の日本森林学会において、ナラ枯れとクマをテーマにしたシンポジウムを開催できた。百人以上が参加する盛大なシンポジウムになった。I博士を囲んだ打ち上げは楽しかった。異なる意見をぶつけ合って、わかり合えるのは楽しいことだが、昨今は、SNSによって意見が分断され、わかり合えることが難しくなった。

スイスでは、26州を都市州と森林州に大別している。価値観が違うことを前提に議論し、中央集権国家なのに、地方のことは地方が考えて実行する仕組みができています。一方、日本では、中央（東京）で決めたことが、地方に押しつけられている。そのため、地方は崩壊の一途を辿り、獣害やナラ枯れが増えている。日本では、都市人口率が93%近くに達し、

都会しか知らない人が増えた。都会しか知らない人間と、私のように山村でも暮らしてきた人間とでは、知識量や価値観が違いすぎて、議論しても噛み合わない。I 博士のように現場の声に耳を傾けようとする人は減ってしまった。筆者は「ドングリを撒いたり、ドングリのなる広葉樹を植えることは、クマを誘引する。逆効果だ」と批判している。一方で「ハチミツを餌とするカメラトラップは精度がいい」と肯定している。筆者は、ハチミツを餌にしてクマを捕獲することが、ドングリを撒くこと以上にクマを里に誘引することに気付いていない。しかし、それを指摘したところで、聞く耳を持たないだろう。

筆者が「一部の団体」と書いたのは「熊森協会」のことである。2006年1月26日、亀岡市で開催されたシンポジウムで、熊森協会と初めて会った。熊森協会は、学者や役人をこっぴどく批判する団体として有名であったが、その日は、役人である私が熊森協会を叱った。私は「『可愛いクマを殺すな』との主張が、クマ被害者を怒らせて『クマを殺せ』との主張を増やしている。役人は異なる意見の間を選択するから、熊森協会の主張がクマを殺していることになる。クマを守りたいなら被害者に寄り添って議論し、解決策を共に考えるべきだ」と叱った。林業従事者を悪者扱いする熊森協会に腹が立ち、喧嘩腰で叱った。もちろん、熊森協会のメンバーは怒った。しかし、熊森協会京都支部長の K さんは、関西岩峰会に同期で入った知り合いだった。

私は、学生の頃、関西岩峰会で本格的な登山をした。大学2回生の夏、八ヶ岳の山行に参加した。1985年8月12日、テントを張って寝ようとしたが、上空をヘリが旋回して寝られなかった。誰も、ラジオを持ってきておらず、数日後の下山日まで、それが日航ジャンボ機の捜索であったことを知らなかった。日航ジャンボ機は、群馬県の御巢鷹山に墜落したが、当初は長野県に墜落したと目され、広範囲を捜索していたのだ。それまでの人生で最も大きな事件が、近くで起こったことに驚いた。その後、登山の訓練を重ね、新田次郎の「孤高の人」という小説の舞台になった槍ヶ岳北鎌尾根を厳冬期に踏破した。その直後、比良山に大雪が積もったとの情報が入ると、調子に乗って比良山でのラッセル訓練に行き、雪崩に巻き込まれて生き埋めになった。標高差400mも流され、半年以上も普通に歩けないほどの重傷を負った。雪に埋まって身動きがとれなくなったとき「なぜ意識を失わないのか、早く死にたい」と願った。それほど苦しく、親のことを想う余裕もなかった。雪の中に埋もれて、どんどん雪が重なり、意識を失いかけたとき、再び雪崩が発生し、私の上半身が地表に出た。喉に詰まった雪を手で掻き出し、自力で雪を掘って助かった。鮎漁で心肺機能を鍛えてきたので3分は呼吸を止められた。中学1年から駅伝のレギュラーで、美山町で実施された京都府大会でも、中3の時、トップ争いをしてスポーツ賞をいただいた。踏み台昇降テスト（踏み台を昇降した後の心拍数の回復の程度によって持久力を評価するテスト）では、踏み台昇降後の心拍数が、踏み台昇降前よりも少ないほど持久力があつた。ラッセルという過酷な運動中に、一瞬で呼吸を止められても意識を喪失せずに絶命しなかったのは、鮎漁と駅伝で訓練していたためだった。その年の夏、穂高の屏風岩にチャレンジしたが、降雨のために体力の限界を超え、登り切ったときには歩けなかった。仲間に担がれてテントにたどり着いたが、免疫機能低下によって溶血性連鎖球菌に感染してリュウマチ熱を発症、何度も入退院を繰り返した。このような恐怖体験のせいで、大学卒業と同時に本格登山とは縁を切った。

熊森協会京都支部長の K さんは、関西岩峰会の先輩である K 氏（私にもロッククライミ

ングを教えてくれた人物)と恋に落ちて結婚された。しかし、大学を卒業した年、関西岩峰会で遭難事故が発生した。K氏は、奥さん(支部長)が身ごもり「これが最後」と言って出かけた長谷川だけで亡くなった。壁面に2人が宙づりになるという壮絶な事故で、連日、大きく報道された。K氏の葬儀に参列し、追悼文も書いた。亀岡でのシンポジウムでの支部長との再開は、葬儀以来、約20年ぶりであった。支部長は「小林さんですか、立派になりましたね」と囁いた後、会場に向かって「この方は信頼できる。この方の意見には耳を傾けるべきだ」と言ってくださった。そのせいで、喧嘩にはならず、熊森協会から「顧問になって欲しい」と要請された。その要請は断ったが、熊森協会との交流は続いた。しかし、残念なことに、その支部長も、数年後にガンで若くして他界された。

このシンポジウムの主催者は府立大学のI博士で、I博士を慕うS君も参加していた。翌2007年4月、I博士とS君が所属する京都府立大学の研究室に「特別講師」として赴任した。その時、S君は「小林先生の亀岡市での演説には驚いた。熊森協会と喧嘩する人がいるとは思わなかった」と言っていた。S君は、優秀で、博士課程ではクマの研究にも関わっていた。しかし、2008年4月、I博士と共に山で遭難死してしまった。この遭難事故は、登山部顧問であるI博士、登山部部長のYさん、S君の3人が離れた位置で落命するという壮絶なものであった。今でも、不可解な遭難としてネット上に、いろんなコメントがある。「山岳気象遭難の真実」という本では、この遭難事故について「二つ玉低気圧による急激な気温低下によって思考力が失われた」と記載された。これも真相を知らない人物による戯言である。I博士は、上司であるT教授からパワハラを受けて精神的におかしくなっていた。この遭難事故の前にも、メンバーを置き去りにして登山を継続するという奇行があった。私は、その事実を追悼文に書いたが削除された。私も、保身のため、大学の名誉のため、遺族のことも考え、強くは主張せず、真相は闇に葬られた。S君の遺族は「大学に息子を殺された」と言っておられたが、「S君はI博士を尊敬していた。京都府立大学が好きだった。大学を訴えても真相はわからないし、S君は戻らない」と言って、学生達を「夜とぎ」(丹波地方では葬儀の前に、故人の遺体の側で、夜通し故人を偲ぶ風習がある)に参加させ、S君の大学での活躍を話してもらうことで、遺族の落胆を、少しだけ鎮めることもできた。

私は「いいことをした」と自身を納得させたが、保身のための行動は身を滅ぼす。T教授は、私にパワハラを繰り返すようになり、心労が祟って、2015年3月7日、気付けば、新幹線の線路内を歩き、2時間ほど新幹線を止めて2万人ほどに迷惑をかける事件を起こしてまった。その日、京都駅に対して「スペイン人によるテロがある」との予告があり、警察は厳戒態勢を敷いていた。そんな中、ラッシュ時の7時頃、私は大きな黒いカバンを2つ持ち(1つはパソコンと着替え、1つはカシナガトラップ)、ホームの最南端に呆然と立ち尽くした。不条理な人事異動命令で研究が継続できない状況に陥り、精神的に追い詰められた状態の中で、無理な業務命令が重なって、一ヶ月間、まともに寝ていなかった。上司と深夜まで口論する中で、同じ目に遭って自殺した人がいたことも知った。新幹線のホームで「また京都に戻ってきた。上司との口論の再開が待っている」と思って10分以上、突っ立っていたのだろう。すると、ホームから人の姿が消え、新幹線が一斉に止まった。それを見て、I博士やS君、自殺した同僚から「なぜ、真相を伝えないのだ」と叱られているようにも感じた。夢だろうと考え、停車した新幹線に「動いてくれ」と伝えるために

線路内に入った。すると、一斉にカメラが自分に向けられ、シャッター音で現実だとわかった。「なぜ、誰も私を止めないのだ。えらいことをしてしまった」と思った。すぐに引き返せば、たいしたことはなかったが「今、大地震が起こって新幹線を止めたことを褒められるのかも」とか「線路内にシカが入ってきて、新幹線を止めたことを褒められるのかも」とか「これは大事件になるが、真相が表沙汰にできるかも」などと考えて歩いているうちに、2km先に停車していた新幹線に到達した。運転手に「なぜ止まったのか」と尋ねると、窓をあけて「そのカバンはなにか？」と運転手が問うたので、カバンの中身を見せた。運転手が電話で「テロリストではありません」と言った次の瞬間、大勢の鉄道公安官がタックルしてきて私は取り押さえられた。線路には、管理のために50mごとくらいに出口があり、最寄りの出口で警官に引き渡された。そこで見た光景は、とんでもないものであった。装甲車、救急車、パトカーなど、多数の車両が確認できた。消防団詰所で、みんなから聞かれたとき、「西部警察というドラマでも見たことない光景だった。パトカーは50台はいた」と言ったら、消防団員の1人が「姉が京都駅近くで働いていたが、200台以上だった」と言っていた。警官は「スペイン人なのに、なぜ、日本語が上手なのか」と私に聞いた。留置場では、テロリストとしての扱いを受けたが、それは筆舌できないものであった。テロリストでない事が分かると、知能犯担当の刑事が対応した。知能犯でない事が分かると、軽犯罪を扱う刑事が担当した。その刑事は以下のようなことを言った。

***ここから

- ・俺はもうすぐ退職する。大勢の犯罪者と対峙してきたが、犯罪者を許さなかったのは被害者がいるからだ。今回の被害者は1万6千人と多い。君のパソコンを調べるまでは、許せないと思った。しかし、君は、農山村を元気にしようとして努力している。
- ・俺は、隠岐の島の出身。盆と正月にしか帰れないが、帰る度に寂れていくので悲しい。君は、不条理に対しては、相手が大組織であっても闘っている。
- ・2月28日、大勢に「死にたい」と打ち明けるメールを送っているが、他に、自殺をほめかした証拠は無いのか。

***ここまで

その刑事は24時間以内に留置場から出してくれた。刑事は「奥さんに感謝しなさい」と言った。妻が「夫が迷惑をおかけしました」と深々と礼をしたことで、警察署員が「このような人が妻なら、本人も立派な人物だろう」と考えたことが、テロリストではないと判断したことにつながり、短時間で留置場から出られた原因だった。その後のことは書いても信じてもらえない内容だし、あまりにもいろんなことがあったので詳しくは書かないが、私を京都府組織から追放しようという人達と、私のことを助けたいと懸命になる人達との間で、いろんな事件が起こった。最も辛かったのは、自宅謹慎処分を申し渡しながら、研究継続は認められたことだった。そのせいで、寒い雨の中でも伐倒作業を行い、白蟻病が悪化し、B2診断になった。白蟻病にはA、B1、B2、Cの段階があり、B2になると、基本的にチェーンソーは使えない（が今も使わざるを得ない）。4月1日から京都府立大学との併任が解かれることになっていたのに、併任は継続された。人事に関する不条理な命令が新幹線を止めた原因だと、府立大学や京都府組織の関係者は認識していたので、そのような人事の話はなかったことにされた。訴訟で明らかになったが、私が新幹線を止めた原因については報告書にまとめられていて、そこには、人事の事も、度重なる業務命令のこ

とも一切書かれていなかった。私は、見舞いに来たという同期の職員に「人事の問題で、行方不明になりたいと思うくらいの心労を受けていたが、上司や家族が心配するので京都に戻った」と話した。しかし、その報告書には、前半だけを採用して「無断」の言葉を加え「無断で東京に行って、行方不明になって困らせるつもりだったと本人が証言した」との嘘をでっち上げられていた。精神病院の医師は、「京都府職員と会うときは、会話を録音しておきなさい」と言われていた。友人の京都府職員だったが、万が一を考えて録音しておいてよかった。こうした証拠によって、訴訟も起こして、私は、クビにならずにすんだ。JR から多額の損害賠償の支払いを求められると覚悟していた。友人が雇ってくれた弁護士は「損害賠償の支払い義務はない」と言っていた。億単位であれば払えないが、180万円ほどの予想外の低額だったし、反省もしていたので請求書が届いた日に、請求額を振り込んだ。新幹線は、2時間以上遅れたときには、改札で「遅延証明書」が自動的に発行されるので払い戻しを受けるのは簡単だが、このケースでは最大1時間50分の遅れで、2時間以内なので、自分で、次の電車との待ち時間などを合算して遅延時間が2時間以上になったことを証明しないと払い戻しは受けられない。自己申告した人は数人で、180万円の内訳の大半が、後始末に要した残業代だった。とにかく、すぐに JR との問題を解決したことが、検察官に好印象を与えたようで、刑事罰も、新幹線特措法違反での罰金5万円は覚悟していたが、有罪にならなかった。京都府組織の中には、私を分限処分（退職金は払うが公務員にふさわしくないの追い出す処分）にしたい考える人は多かったのだが、有罪にならなかったし、退職した元上司達が嘆願書のようなものを書いてくださり、「訓告」という処分であった。私に不条理な命令をした人達は、1人だけが「戒戒」で、不条理を働いた張本人達は無処分だった。とくに、T教授のパワハラが許されたことは今でも腑に落ちていない。

I博士の弟さんに「I博士が、K教授からのパワハラを受けていたことが遭難事故につながった」という真相を話そうとしていたが、その弟さんは、2014年9月27日の御嶽山の噴火に巻き込まれて亡くなられた。それを教えてくれたH氏は、京都府林業試験場で、20年以上も私の上司であった人物である。H氏は「小林君の周りには事故が多い。死に神だ」と言っていた。確かに、私の結婚式に来てもらった上司は、トラクター転倒事故、徹夜麻雀後の海水浴などの新聞記事なる事故で他界していた。H氏は府立大学出身で、私と同じ研究室出身であるが、長く私の上司であったK氏も府立大学の同じ研究室の出身であった。H氏とK氏は同僚で同い年であった。後述するが、K氏は退職前に病死したが、その病気に、私に関係していたことをH氏は知っていたので「小林は死に神だ」と言っている。

関西岩峰会では、あまりにも遭難を経験したため、2011年10月22日、関西岩峰会50周年記念では、10人のスピーチで、取りをまかされた。しかたないので「命がけで山に登ったことで、2つの力を得た。一つは、学会など緊張する場でも堂々としている度胸がついた。もう一つは、ヤクザにからまれることが趣味になった。最近のヤクザは命を張った経験がないので、私が本気で怒ると怯むのが面白い。友達から、どこかで殺されると忠告されている。60周年には来ることができないだろう」と言って、会場を沸かせた。その10日後、上述した殺人未遂事件に巻き込まれた。峠道で口論となり、木刀を持って車から出てきた相手に「やれる度胸があるなら、顔をついてみる」と窓ガラスを降ろして顔を出した。相手がヤクザ程度なら怯むはずだが、その男は、いきなり木刀で顔を突いてきた。と

っさに避けたが、頭に当たって怪我をした。頭にきて、逃げようとしている車を追いかけて、トランクを蹴飛ばした。地域の運動会で、大縄飛びの最中に肉離れを起こしていたことを忘れていた。蹴飛ばした反動で私の車のところまで飛ばされ、車のリアバンパーにもたれかかった。犯人達は、それを見て、いきなり車をバックしてひき殺そうとしたのが、殺人未遂事件の真相である。まさに「口は災いの元」である。

人生で最大の出来事は、個人的には、新幹線を止めたことではなく、他にも、いろいろある。しかし、日本人の多くが関係する大事件は、やはり、東日本大震災に伴う原発事故である。2010年、東京電力社有林の尾瀬でナラ枯れが発生し、東電から「助言して欲しい」との連絡があり、2011年3月11日午後3時、東電本店で会議することが決定した。3月12日の土曜日、横浜での従弟の結婚式に出席することになっていたため、3月11日を指定した。東電幹部も参加する上層階での会議だったので、15分前にロビーに集合することになった。そもそも、東京は、1657年3月2～4日の明暦の大火でも10万人が亡くなったとされている。1923年9月1日の関東大地震での死者・行方不明者数は10万5000人と推定されている。東京は、1944年11月24日～1945年8月15日の間に106回の空襲を受け、中でも1945年3月10日の空襲では死者数10万人以上であった。世界中を見渡しても、10万人以上が命を失った場所は希だし、それが複数回も起こった場所は東京以外に無い。東京のような恐ろしい場所に、平穏な美山町から、年に数回も出張していたから、東京に行く度に「東京で死ぬかも」と思うのは当然である。しかし、この時は、予想ではなく、確信があった。2011年3月9日、三陸沖でM7.3の大きな地震があり、震度5弱を記録した。しかし、正式な記者会見はなく、気象庁職員（中年の女性）が「これは皆さんが知っているタイプの地震ではない」と言ったのみだった。地学が得意な私は「プレート型地震の前震だ」と感じた。3月10日早朝にもM6.8の地震があり、その日、上司や同僚に「東京で地震に遭う」と話した。当日、母と2人で新幹線に乗ったのだが、母は、東京大空襲を生き延び、疎開先の広島で原爆による煙を見た人物である。新幹線も、前の車両だったので、後方の車両に変更してもらった。母は横浜駅で新幹線を降り、私は東京駅で降りて新橋駅で東電関係者のA氏と合流した。東電本店に向かう道中、A氏に「地震が怖い。地震が起こったら関東大震災で倒壊しなかった赤煉瓦の建物に逃げる」と言って、実際に赤煉瓦の建物を見つけていた。そして、東京電力本店に入って直ぐ、揺れ始めた。赤煉瓦の建物まで逃げるために本店ビルを出ようとしたとき、東電関係者から「このビルは世界一の耐震構造。建物の中のほうが安全です」と呼び止められた。揺れが徐々に大きくなってきたので、柱の下に移動した。その柱にへばりついていたら、柱も耐震構造でゴムが入っているためであろう、細かく砕かれた大理石の砂が頭に降り注いだ。揺れている最中、妻に電話して「死体は東電本店の柱の下に埋まっている」と伝えた。揺れが収まってからも電話が通じたので、妻に「大きな津波が来るので流されるかも」と伝えた。妻は「美山も揺れた。宮津市にいる息子も津波にさらわれるのか」と言ったので、「宮津市で死者が出るようなら、生き残らないほうがマシだ」と言って電話を切り、亀岡にいる上司のU氏に電話した。U氏は「亀岡でも揺れた。なぜ、地震が予知できたのか？」と驚いていた。亀岡は美山よりも揺れが大きかったので「これはプレート型地震。M9以上だ」と確信し、その場にいた東電関係者に「原発がメルトダウンする」と訴えた。しかし、気象庁は「M7.9。津波の高さは0.5m」と伝えてしまった。気象庁の速報は、できるだけ早く発信するため、初期震

動から推定した値を伝えてしまった。そのため、東電関係者は「これなら大丈夫。小林先生は樹木の専門家だが、地震のことは東電のほうが詳しい」と言った。あの時、気象庁が「M9以上、津波の高さは50m以上になる」と伝えていたら、津波による死者は僅かであったし、原発事故も防げたはずである。会議はキャンセルとなった。真実を知って欲しいと考えた私は「気仙沼直送の居酒屋が近くにあるので、そこで情報収集しよう」と提案した。東電関係者5名ほど来てくれた。居酒屋店員は、予想どおり気仙沼から直接情報を得ていて「大津波が襲っている。大勢が死んでいる」と涙ながらに教えてくれた。気象庁の発表もM8.3に上方修正された。その場に居た東電関係者は「小林先生が言ったとおりになってきた。原発がメルトダウンするかも」と慌てだし、方々に電話しようとしたが、繋がらなかった。あの時、私の腸は煮えくりかえていた。「地球が太陽の周りを回っている」と言ったガリレオは、宗教裁判で終身刑を言い渡された。その時にガリレオが感じた怒りも同様だったに違いない。「知らぬが仏」とはよく言ったもので、知りすぎた者は、無知に対して怒りを覚えてしまう。太陽が地球の周りを回っていても人命には影響しないが、地震の過小評価は多数の人命を奪う。2022年1月15日、トンガで大噴火があり、気象庁は、午後7時に「この噴火による潮位変化はわずか」と伝えた。しかし、午後11時になって1mを超える潮位変化が観測され、深夜12時を過ぎてから、慌てて津波警報を発した。同じミスを繰り返したことが許せず、気象庁に電話したら、若い職員が対応してくれた。その方は「今回も重大な誤報だ。誤報が起こる要因について検証する必要がある」と言っていた。

【46頁】クマは人を襲うこともあるだけに、生息数は多い前提で対策を考えるべきだろう。

【コメント】京都府でもクマ剥ぎ被害が多発していた。京都では芦生周辺に生息するクマが多く、その個体群は滋賀や福井にも出没していた。私は「クマをどうするかは京都だけで決めても意味がない。滋賀や福井と連携すべき」と進言した。そして、2000年7月18～19日、美山町の「きぐすりや」という料理旅館に、京都だけでなく、滋賀と福井の関係者も集まった。そして、クマを駆除すべきかどうか話が合われた。その場で、私は、次のように発言した。

***ここから

京都、滋賀及び福井の県境付近に生息するクマの推定数は500頭と少ない。駆除すれば絶滅するので駆除すべきではない。もし、絶滅したら、役人は「林家からの要請で駆除した」と責任を逃れ、林家が悪者にされてしまう。林家でもクマを殺すことに反対する人は多い。被害を受けたスギに十分な補償金を出すべきだ。税金で足りないなら「クマを殺さないで」と言っている人達から寄付金を集めればよい。皆さんは10年後には異動していてクマ問題には関わっていないが、私は20年後でも関わっている。クマの絶滅は困る。

***ここまで

この発言は、会議の雰囲気を一変させた。その後、長らく、京都府ではクマを殺さないことになった。体育指導員のイベントで、美山町職員のM氏から、携帯電話を3台所持している理由を聞かされた。「俺は消防団幹部なので火災が発生したら鳴る電話を持っている。また、クマ対策の町職員なのでクマが出没したら鳴る電話も持っている。お前は、京都府職員なので暢気でいいな。京都府職員の誰が言ったのかは知らないが、京都府組織は

クマを殺さないと決定した。だから、捕獲したクマを山に放獣している。地域の人は、捕らえたクマを放獣することに怒り、『クマに襲われたらお前のせいだ』と言う人もいる」と打ち明けられた。口が裂けても「私がクマを殺すなと主張した」とは言えなかった。その後、長らく、京都府ではクマによる人身事故は起きなかった。「クマを殺さない」と決定した京都府で人身事故が発生しなかったのに、メーリングリストで「クマを殺すのはやむを得ない」と主張した地域（石川など）では人身事故が多発した。その理由は、都会で暮らす人には判らないだろう。M氏のような町職員が、注意喚起の看板を立てたり、クマに出会った際の対応方法を書いたパンフを配布したり、木に残された柿を収穫して回った。こうした努力によって人身事故が防がれていたのだ。それが証拠に、美山町が市町村合併して南丹市になると、美山町でもクマによる人身事故が発生するようになった。体重 100kg を超える青年が、クマをこらしめようと、鶏小屋の金網を持ってクマに飛びかかり、クマの逆襲を受けて大怪我をした事故もあった。ツキノワグマは小さければ 50kg 以下で、格闘すれば勝てそうに思えるが、パワーが違う。クマに襲われる人のほうにも問題がある。京都大学芦生演習林に赴任した渡辺弘之博士は「京都の秘境・芦生—原生林への招待」という本を 1970 年に発表した。この本によって芦生を訪れる人が増えたため、渡辺博士は「芦生を紹介したせいで、芦生は秘境ではなくなった」と大勢から叱られたそう。その本に「芦生は日本一クマが多いが、芦生では人身事故が一件も発生していない。近くの久多では人身事故が多発している。久多のクマはどうかしている」と書いてあった。おかしな記述である。芦生の個体群と久多の個体群は同じなのだから「久多の人はどうかしている」と書くべきだ。渡辺博士に確認したところ「さすが小林君だね」と返事が返ってきた。

同級生の美山町職員（市町村合併後には南丹市職員）の T 氏が、怒って電話してきたことがあった。彼が暮らす集落でクマが毎晩のようにうろつき、外のトイレに行くことができず、尿瓶を横にして寝る人が出る事態になった。T 氏の努力で、檻によってそのクマが捕獲された。すぐに射殺して欲しかったそうであるが、当時のルールでは、京都府職員が麻醉銃を撃って檻から出すことになっていた。そこで、T 氏は、京都府の振興局に「クマが捕まったので直ぐに来てくれ」と要請した。しかし、女性職員が「クマを見たい」と言ったらしく、その女性の作業服の準備に手間取り、現場に来るのが遅れた。おまけに麻醉銃を持ってくるのを忘れた。T 氏は「京都府職員にとっては他人事かもしれないが、俺らには死活問題だ」と怒っていた。T 氏は、防護柵の補助金申請に失敗した京都府職員の S 氏に怒って電話してきたこともあった。S 氏は、大学の同級生で研究室も同じであった。S 氏は、古美術研究会というサークルに所属していたので、文化財（八幡神社や浄瑠璃寺）の社叢林のナラ枯れ防除には、役人とは思えないほど頑張った。しかし、S 氏にとって獣害は他人事であるため、何度も獣害担当になったが、ミスが多かった。適地適木は林業にとって重要だが、適材適所は役所にとって重要だ。

栗はクマにとっても好物であり、栗栽培者は、クマと出くわす危険性が高い。祖父は養蚕の研究者であったが、養蚕の斜陽化によって栗栽培に切り替えた。祖父は「栗園で子連れ之母クマに襲われかけた時、羽織をクマに被せるようにして逃げた」と言っていた。孫である私が丹波栗の研究者になり、栗栽培にとって獣害は重要なので、鳥獣撃退器も開発した。撃退器の効果を把握するため夜間カメラを設置した。クマは警戒心が強いが、夜間カメラの前では無邪気な姿を曝してくれた。夕方になると母クマだけが出てきて集落を観

察し、夜になると子クマを連れて柿木に登った。少しでも異変があると（車が通るだけでも）、親子は柿木から下りた。「柿木に集う動物達」というタイトルの動画を Youtube にアップしているが、その中にクマの行動も映っている。

<https://www.youtube.com/watch?v=GuUc4XXOQbs&t=43s>

イノシシの背に乗るサルで有名になった福知山動物園の園長さんが、鳥獣撃退器の効果調査に協力してくれた。動物園のシカ、イノシシ、サル、クマ、アライグマ、タヌキなどに撃退器の音や光を浴びせてみたところ、警戒して、栗を食べる獣はいなかった。ついでに、獣がどのように栗を食べるかも観察した。最も上手に食べたのはクマだった。栗を手で拾い上げて口の中に丸ごと入れ、もぐもぐと口を動かし、そのまま胃に入れるのかと思いきや、吐き出した。吐き出した栗の皮は、ミカン皮のように剥けていて、その皮の上ののっていたペースト状の実を、クマは、舌で綺麗になめて完食した。この動画をクマ研究者に見せたら「おそれいりました」との返信があった。サルは、人が生栗を食うのと同じだった。歯で鬼皮を剥ぎとった後、前歯で渋皮をガリガリと削り取って実だけにして食べた。サルは、喜んで栗を食べたので、面白くて、栗をサルに手渡していたら、園長さんが「逃げて！」と叫んだ。ボス猿が「雌を餌で誘うな」と怒り、私に飛びかかろうとしていた。これらの動画も「栗を食う犯人捜し」というタイトルで Youtube にアップしてある。

<https://www.youtube.com/watch?v=ipjEA3DCri4&t=135s>

都会で暮らしていたのでは、獣害を受けることは少ないし、獣をじっくり観察することもできない。そんな部外者が「クマは人を襲うこともあるだけに、生息数は多い前提で対策を考えるべきだ」との軽口を叩く社会では、獣害が減らないのは当然だ。

【46 頁】大学の林学科の後輩に、家が林家で、林業を継ぐつもりだという男がいた。

【コメント】「林学科に入学したのは林業をするためではないのか？」と疑問に思う人がいるかもしれない。しかし、林学科を卒業した人が林業をすることは希である。京都府立大学林学科の同級生でも、医学部に入学できる学力があれば、医学部に進学していたであろう。林家出身者は私だけで、山林を所有している人も希だった。林業関係の仕事に就いた人はいるが、大半は公務員で、私のように山林を購入した人は少ないはずだ。私は塾に行ったことはなく、受験勉強もまともにしなかった。数学が得意だったので、高校生の時、京大数学科入試試験の模試にチャレンジし、何度か上位になった。子供の頃から百科事典や図鑑をよく読んでいたので、センター試験の理系3科目（数学、化学、生物）はほぼ満点であった。推薦入試の面接で、O教授が「センター試験を自己採点したのか。化学は満点だし、数学も1問しか間違っていない。なぜ、この大学を志望したのか」と尋ねた。数学は、この年、難しすぎたことが問題になったが、実際、半分の時間で回答して、見直すつもりが、その時間がなく満点を逃した。高校の担任だったS教諭は、私のセンター試験の結果を知って驚き「医者になれるのに、なぜ、農学部に進学するのか」と、京都府立大学への進学（推薦第1号を目指していた）に反対した。私の両親を説得するために家に来た時、父は「偏差値で将来を選択するのは間違い。人には本分がある」と諭された。この事実はS教諭が北桑田高校の校長として退職した際の手記に書かれた。祖父は「お前の学費のために木を植えた。林業の町である美山町の役に立つために林業を学べ」と言ったので、迷うことなく従った。実家は、江戸時代には町医者もしていたが、近所に、地域医療

で著名であった伊藤盛夫医師がいて、ご子息が医師を目指していた。医者、医者の子がやるべき仕事だと考えていたし、実際に伊藤医師の子供達は全員が医師になった（が美山町には戻ってくれなかった）。人には本分があるが、偏差値で自分の進路を決めるのが普通になっていた。林学科に入学した同級生にも、田舎で暮らすことは嫌な人が多く、私のことを「田舎者」とか「田舎にいたら結婚できないぞ」と平気で言う人が多かった。そうゆう発言をする人が役人になった。こうした考えを持つ人間が増えたのは GHQ の策略のせいだろう。それは仕方がないことだが、田舎が嫌いな人が森林・林業の役人になったのでは、獣害やナラ枯れが解決しないのは当然だ。

日本人は、戦場で、おじけづくことはなく、命を投げ出して勇ましく戦った。日清・日露戦争で、世界を驚かせるほどの勝利をあげたのも、日本の軍人が強かったからだろう。戦場で「おじけづく」と「勇み立つ」とでは雲泥の差になるので、この差が生じる理由は、人類にとって最大の関心事である。その答えは、我が家に残された林業教科書に書いてあった。日本人は森を愛でる。森を愛でる心が家族愛に通じる。ご先祖様が森を守ってくれたから、水が飲めるし、稲が作れるし、魚も育つ。森を愛でる心が先祖崇拜になる。また、子孫のことを思って森を残そうとする。この家族愛は、地域愛や国家愛に通じる。だから日本の軍人は、家族、地域、国のためなら命を捧げる気になれたのである。また、災害の多い日本では「無常」を意識することも多い。一寸先は闇、「いつかは死ぬ」と思えば戦場で「おじけづく」のではなく「勇み立つ」ことができる。織田信長が桶狭間の戦いの前に舞ったとされる敦盛の「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻の如くなり」という歌詞は、不利な戦場に赴く兵士を奮い立たせに違いない。信長の時代から、西欧列強が日本に関心を向けたのは、金や絹だけが目的ではなく、強い武士を傭兵として本国に輸出するためだったかもしれない。いずれにしても、アメリカは、日本人を恐れ、日本と戦争する前から日本人を研究していた。そして、戦後、ドイツ人とは違って、日本人を森から遠ざけた。我が家に残っている林業教科書は、もう誰も所持していない。GHQ は、そのような教科書を捨てさせ、中央で決めた指導要領で、日本中で同じ教育を行い、日本の若者を同じ価値観に仕向けた。生を得た場所に関わりなく、誰もが、都会で工業用ロボットとして働くことに適した人材に仕立てられた。私が通った中学校も荒れていた。当時の若者が従順でなかったのは、ロボットにされることに反発したためかもしれない。尾崎豊の歌詞からも、そのことが伝わってくる。中1の頃、髪の毛が赤いと理由で、番長に呼び出されて殴られたことがあった。中1で、駅伝チームのレギュラーになるほど体力はあったが、一人で多数は倒せない。大勢に囲まれたとき「へそくりパンチ」を繰り出して応戦した。これは、人が近寄ることを防ぐために両手を激しく回転させる技で、私が命名した。公務員になって、苦手なバドミントンや卓球をする機会が増えた。負けることが嫌な私は、社会人チームに入ってリーグ戦にも出場した。美山町大野小学校の体育館でバドミントンの練習をしたとき、中学生が「へそくりパンチ」と言って、私が開発した技を繰り出していた。驚いて、その中学生に「もんがんじポッポは知っているか」と問うたが、知らなかった。「もんがんじポッポ」も私が考案した技で、これは、相手を倒してマウントし、思春期に痛くなる乳首をつまみ上げる攻撃的な技である。番長に勝てるほどケンカは強くなかったが、逃げたりしなかった。殴られた後、番長が吸っていたタバコを貸してもらって曲芸を披露した。父は、タバコの煙で輪を作るのが得意で、私は、その技を父から

習っていた。上手にタバコの輪を作ると、番長らも一目置いてくれた。自然の中で遊んできた人間は、戦場でも知恵を絞り、生き残る確率を高くする方法を瞬時に選択できる。

従弟の結婚式に参列するため、ロシアのウラジオストクまで行ったことがある。結婚式の二次会はダーチャ（ロシアでは都会で暮らす人も自給自足のために田舎に別荘を所有している人が多い）に移動して行われた。男達が薪を割り、サウナまで運んだ。私は日本人代表として薪割りに参加した。薪割りは大男達には勝てなかったが、薪運びは圧勝だった。飲み会の時、大男達は、私の細い腕を不思議そうに触っていた。片道 2.5km 以上の通学路を 6 年間も歩き、自然の中で遊んでいたのだから、体力があるのは当然である。GHQ は、日本人を弱くするために自然から引き離した。日本の若者が従順なロボットになることで、日本は高性能な工業品を安価で製造することに成功し、奇跡の戦後復興を成し遂げた。しかし、歪んだ教育のせいで、さまざまな問題が生じた。特に、命を粗末にし、食べ物を捨てたり、ペットを殺したり、自殺も増えた。原発事故によって苦勞している人がいるのに、原発を再稼働するという不条理も行った。昭和 30~50 年代に生まれた日本人は、田舎を嫌い、都会に殺到し、核家族や単独生活するようになり、仏壇もない家で暮らす人が増えた。とうとう、年金をもらい続けるために親族の死体を家の中に隠す人まで現れた。獣害に苦しんでいるわけでもない人物が、獣害対策を担う役人になったり、獣を研究する学者になったり、獣に関する本を書いてしまう世の中になった。講演で「獣害に困っていない人達が獣害について会議室で議論し、獣害に困っている人達は議論に参加できない。獣よりも先に獣害で食っている人を駆除すべき」と言うと、農山村では拍手が起こるが、都会では拍手は起こらない。

【47 項】野生動物に興味を持ったきっかけが、ボルネオのオランウータンだっただけに、私はニホンザルにも興味があった。学生時代にサルを見ようと思えば、餌付けされたサルのいる野猿公苑に行くのが常套手段だった。しかし、現在では本当の野生ザルを見るのも、そんなに難しくない。私も林道を車で走っていて、何度もサルに遭遇している。

【コメント】母校の京都府立大学で 10 年近く大学教員をやったが、学生達が林学科を選んだ理由は「林学科は偏差値が低い」とか「林学科は数学が苦手でも合格できる」とか「自然が好きなので選んだ」というもので、「林業をやりたいから」という理由は皆無だった。そもそも、林学科の大学教員で、林業ができる人もいない。

京都市内にも、筆者のように林学科を卒業し、現場を見ただけで林業のことが判ったつもりになっている人は多い。T 氏は「小林さんがいるなら」ということで、自分の子供を府立大学林学科に入学させた。しかし、その学生は大学を中退した。あのまま林学科を卒業していたら、やりたい仕事をすることもなく、役人として漫然と時間を過ごすだけで、人生を棒にふるっていただろう。家業がなくなり、サラリーマンが増えたのでしかたがないのだが、「父親の気まぐれ」で大学や就職先を選ぶべきではない。

私が、公務員採用のための面接試験の訓練した人は、合格することが多かった。「20 人以上が連続して合格した」との噂を聞いた京大の F 教授は「面接試験で落とされる学生がいる。指導して欲しい」と私に依頼した。「まかせてください」と言って、その学生と会ったのだが、現実を知って愕然とした。一次試験を通過した 11 人が、面接試験で 1 人に絞られるという難関であった。面接の予行演習で「最近のニュースで関心を持ったのは？」

と質問したところ、その学生は農業公務員の採用試験なのに、農業関係のニュースを挙げず「アフリカに新しい国ができたことです」と言った。その学生は、面接試験を学力試験だと思っていた。面接試験では、試験官と一緒に働きたいと思わせることが重要であることを知らなかった。「連続記録は途絶えた」と思えたが、深刻な状況だったので以下の助言をした。

***ここから

農林業分野だと「コンビニもない田舎が仕事場になることもあるが、大丈夫か？」と問われる。その質問に「大丈夫です」と回答したら「嫌だけど我慢できる」と言っていることになるので不採用になる。「私は都会しか経験したことがない。せつかく大学で農林業を学んだのだから、農林業に直接触れることができる農山村で働きたい」と回答すべきだ。ただし、面接で嘘をつくのはよくない。面接試験前に農山村を巡って農林業に触れ、農林業のことを本当に好きになるべきだ。農林業を愛している学生は少ないから、農林業のことを好きになれば面接試験はクリアできる。

***ここから

その京大生は、農山村に行き、農林業を好きになり、面接試験を突破した。しかし、この青年も、子供の頃から農山村に関わっていたわけではないし、農山村では暮らしていないので、筆者と同様、獣害の本質は見抜けないし、公務員になっても活躍することは難しいだろう。私が卒論や修論を直接指導した学生は10人ほどだが、1人だけ、本気で林業に関わっている。修士課程までの3年間を指導したN君は、都会生まれのひ弱な男で、最初の野外調査ではハチに刺されてパニックになった。演習林での調査では、私が伐採したスギ大木に当たりそうになって腰を抜かしていた。そんな若者でも、ナラ枯れ防除現場で指導的な役割を果たすうちにたくましくなり、スギ・ヒノキの雪害を研究して国際学会に参加し、論文も書いた。一流企業に就職しても恥ずかしくない人物になっていたが、N君は「林業が盛んな奈良県職員になりたい」と言った。公務員を目指すとは思っていなかった。「お前では無理。本気なら農山村に家を買って住め」と無茶なことを言った。しかし、N君は、実際に農山村で暮らし、林業技術を身につけた。林業技術を競う「杣人大会」を復活させて、公務員だけでメンバーを組んで総合3位になった。私が訓練した大学生チームも参加したが惨敗だった。N君は、私との勝負がしたくて、京都府で開催された丸太切り競争に参加した。楽勝だと思っていたが、私と同タイムだった。彼は、吉野杉を世界に売り込む仕事をしたり、今は、奈良フォレスターアカデミーで林業者を育てる仕事をしている。私にも「授業をして欲しい」と依頼してきた。都会で生まれ育った若者が林学科を卒業しただけで、真の林業技術者になるケースは希だろう。

筆者は「林道を走っていてサルに出会った」と書いているが、私は山村で暮らしているので頻りにサルと出会い、じっくり観察してきた。車にはねられた瞬間のサルを見たこともある。車にひかれたサルは立ち上がって仲間のところに行こうとしたが、途中で倒れた。仲間達は、事故現場の道路脇の崖に居て、はねられたサルを見ていた。現場は急カーブだったので、車を広場に停車し、はねられたサルに近寄った。苦しそうに呼吸していたが、どうすることもできず、息を引き取るまで背中をさすった。私が、サルを気の毒に思っただけで対応していることが、仲間のサルに伝わったと思ったが、ボスザルは牙をむき出しにして怒っていた。サルをはねた生物は、私と同種のホモ・サピエンスだから、ボスザルにとって

私は憎むべき相手なのだろう。その場所は、以前、タヌキを車で跳ねた現場だった。その時も、1 時間以上、息を引き取るまで背をさすった。「せめて食べてやらねば」と思ったが、料理法もわからないので、道路脇に移した。息を引き取ったサルも同じ場所に移した。

シカとの出会いは茶飯事である。車でシカと 10 回以上接触し、5 回以上、車両保険で修理している。車で多数のシカを駆除してきた。深夜の帰宅だと、車道に飛び出したシカと衝突する危険性が高まる。田畑にいるシカが、車の爆音を聞くと、山へと逃げ込むために猛スピードで道路を横断する。車の前に 5 頭以上の列が現れ、中央突破しようとして、2 頭をひき殺したこともある。その時の車の修理費は 90 万円だった。ハイブリッド車にしてから 10 年近くになるが、走行中の音が小さいので、シカは車道に飛び出さず、はねていない。その間、軽トラックでは何度かシカと接触しているの、シカの生態が変化したわけでもなく、私の運転技術が変化したわけでもない。

【49 項】同時にサルは戦前まで食用や薬用として狩猟の対象にもなっていた。

【コメント】京都府で最初に狩猟免許を取得した人の話を聞いたことがある。その老人は「50 年以上前からサルは実験動物としての需要があり、大学からの要請で捕獲していた。当時のサルは奥山だけにいて、里まで下りてくることはなかった」と話していた。サルが人里に近づき、昭和 50 年代になると、サルは深刻な害を起こすようになった。そして、合雅雄博士はモンキーセンター所長として、サル問題に取り組んだ。モンキーセンター職員を現場に派遣し、2 ヶ月間も餌付けして一網打尽にした。サルの大量捕獲に関わった元役人は「捕獲したサルは動物園に行った」と言っていた。一度に 70 頭以上のサルを生け捕りにする場合もあったのだから、年に千頭以上を捕獲していた可能性がある。動物園が、それほど数を引き受けたとは思えない。河合博士は、農林家がサルの命が奪われたことを知って意気消沈することを危惧し、「動物園で楽しく暮らしている」と伝えたのかもしれない。2010 年、河合博士に会う機会に恵まれた。河合博士は、兵庫県篠山市で生まれ、鮎漁が得意だった。実家が町医者だったことも私と共通している。河合博士のような農山村出身で農林家に寄り添う学者が減ったから、獣害が増えているのだろう。

河合博士の故郷である篠山市は、丹波栗の大産地で、5 回ほど講演している。篠山市の老人は「篠山は昔からサルに苦しめられてきた。サルは人に似ている。殺そうとすると、手を合わせて拝むので、猟師も撃ち殺すのをためらった。そこで、肉を味噌漬けにして薬として食べた」と言っていた。その老人は、サルから作った薬を「なしえもん」と呼んでいた。「なしえもん」で検索してもヒットしないので聞き間違いかもしれない。

京都府立大学に進学したのは、当時の学長が四手井綱英博士という登山家であったことも影響した。河合博士は四手井博士と親交があった。河合博士の兄弟には著名な医師がいるし、四手井博士は物理学者を排出した家庭で育っている。以前は、このような学者が獣を研究していた。偏差値が低くて、しかたなく農学部に進学し、興味もないのに獣を研究している学者はいなかった。東洋大学の M 博士は「医者になるかどうか迷った結果、サルを研究対象にしようと思った」と言っていた。一方、樹木の伝染病の権威である F 博士は「小林君は宇宙にも詳しいが、私も宇宙物理学者になりたかった。学力が足りず、この道に進んだ」と打ち明けた。今は、後者が圧倒的に多いように感じる。

綾部市に栗苗も生産する苗木業者があった。経営者の女性とは、30 年以上の付き合いに

なる。5 年ほど前、美味しいコーヒーを出してくださった。その時、その女性が、知の巨匠と呼ばれた梅棹忠夫博士の縁者だと気付いた。本人に尋ねたところ、梅棹忠夫博士の妹だった。四手井博士とは幼少期から遊ぶ中だったそうだ。その女性は「小林さんも物を知りすぎたので本は書けない。兄は目が潰れたので、文化勲章受賞者として国から支給された年金を使って、聞く人と書く人を雇って本を書き残した。小林さんも目が潰れたら本が書ける」と言った。実家には、本棚がたくさんあり、古文書も含めたら 1000 冊以上の文献がある。四手井博士が書いた本も多い。私は、そのような本を読んできたので「本を書こう」とは思わない。新潮社から「小林さんは本を書くべきだ」と熱心に進められてきたが、今書くと、ここで書いたように批判が多くなる。都会で暮らす人が読んだら怒るだろう。そもそも、四手井博士や梅棹忠夫博士のような示唆的なことも書けない。「苗木業者があった」と書いたのは、経営者の女性が「水田は共同管理なので獣害対策には十分すぎる補助金が支給されている。しかし、果樹園は個人管理なので、補助金が支給されにくい。果樹の苗木は売れなくなったので廃業する」と言っていたからである。

【54 頁】2018 年の環境省の調査によると、アライグマの生息情報がなかったのは秋田、高知、沖縄の 3 県だけだ。生息地域は、ここ 10 年で 3 倍近くに広がったという。駆除も行われているが、毎年数万頭も捕獲しているのに減少の気配は見えない。全国的な生息数の調査は行われていないが、千葉県調査では 2009 年に約 1 万頭とされた。おそらく全国で数十万頭は生息しているのだろう。

【コメント】京都市立大の学生が「アライグマを研究したい」と言ったので、京都市内でアライグマを千頭以上も捕殺した K さんに相談した。すると、K さんから、アライグマに関する貴重なデータをいただいた。しかし、「アライグマは人間に感染する病原体を持っているので危険」との理由で、T 教授から研究を止められた。K さんは京都市内の社寺仏閣の被害が深刻だったので多数のアライグマを捕殺した。それによって自然保護団体との軋轢が生じていた。T 教授は、学生を争いに巻き込みたくなかったのかもしれない。その学生は、研究室を変えてクマの研究に取り組み、卒業後、航空機から撮影した写真で獣の数を把握する研究に取り組んでいる。上司と共に私の職場に来てくださったこともある。航空機から獣が把握できれば、獣害対策は容易になるので、研究成果に期待している。

京都市内だけでなく、京都府全域にアライグマは拡大している。私の職場にもアライグマを安楽死させる施設が設置され、頻繁にアライグマが持ち込まれている。実家も、アライグマ被害に悩まされているが、ラスカルという漫画を見たせいもあって、殺す気にはなれない。2020 年夏、アライグマの赤ちゃんを見つけた。人なつこい性格なのか、目が見えていないせいなのか、私についてきた。牛乳や果物を与えたが口にできなかった。母に見つかれば、そのアライグマは殺されるので、家から遠ざけた。

死にそうなイヌやネコを持ち帰って世話したり、巣から落ちた小鳥（ツバメ、セキセイ、スズメ）を世話することも多かった。これは、人間なら誰でも行う行為であり、母も共感していた。しかし、母は、悪さをする獣には厳しかった。ペットとして飼っていた小鳥 3 羽が、鳥カゴに首を残して死んだことがあった。イタチが犯人だった。そのイタチが、居間に上がり込んだので、戸を閉めて追い回して捕まえた。すると、母は湯を沸かし始めた。イタチに熱湯をかけて殺すつもりだった。イタチは観念してジッとしていたので、気の毒

になって逃がしてやった。母だけでなく家族全員が怒った。追いかけて回したイタチは、我が家に思わぬ被害を与えていた。イタチを追いかけて回したのは、追いかけてバテさせるためだった。ホモサピエンスが体毛をなくして汗をかくようになったのは、バテながらも走るためだ。人間以外の哺乳類は、汗をかくことが苦手で、激しい運動を続けるとオーバーヒートして動けなくなり、死ぬ場合もある。42.195kmをバテながら走れるのはホモサピエンスだけなので、私がイタチを捕獲した方法は理にかなっていた。しかし、懸命に追いかけていたので気付かなかったのだが、イタチは屁をこいた。イタチが屁をこくことは知っていたが、あれほど強烈だとは想像もしていなかった。エズクほどの悪臭で、夏だったこともあり、居間は1ヶ月以上も開けっ放しにし、食事は、居間から離れた場所でとった。

実家はネズミにも苦しめられてきた。母は、捕獲したネズミを池に浸けて息の根を止めた。ネズミを池に浸けると、すぐに泡が浮き、その後、水面に油による斑紋ができた。断末魔のネズミの体内から脂が出るのだろうか。とにかく、母は、容赦しなかった。

40年以上前、モグラの巣の前に団子を置いたが、あれはヒ素入りの毒饅頭だった。二硫化炭素という毒物で、収穫した栗の中の虫を殺したのも、子供であった私の仕事だった。こんな危険なことを子供にやらせていたことは、今では、想像もできないことだが、40年前、多くの子供が所持していた昆虫採集セットには、本物の注射器が入っていたのだ。不思議なのは、40年前はやっていることは残酷なのに、漫画は、今ほど残酷でなかったことだ。35年ほど前にドラゴンボールが流行し、その後も、ワンピース、進撃の巨人、鬼滅の刃のような死闘を描いた漫画が人気になっている。一方、40年前は、アルプスの少女ハイジ、ラスカル、フランダースの犬のような動物との触れ合いを描いた作品が人気であった。ミツバチハッチ、ムーミン、カリメロのような動物が主役の漫画も人気であった。母は「母を訪ねて三千里」を泣きながら見ていたので、本来は残酷な人ではないはずだが、農民にとって獣は憎むべき相手なので、容赦しなかった。母は、万願寺唐辛子をイタリアンレストランに出荷するため、赤く熟すまで収穫しなかった。すると、その万願寺唐辛子が一夜にしてシカに食い尽くされた。損害額は20万円程度だったが、それまでの苦労が水の泡になったことが悔しかったのか、母は泣いていた。私は「獣も必死だ」と慰めたが、東京大空襲を生き延びた母が泣く姿を見て、鳥獣撃退器を作ろうと思った。

ナラ枯れ防除のためにカシナガトラップを開発し、浄瑠璃寺の境内林を守るために設置した。その境内林には大きなスダジイが多く、カラスにとっては巣が作りやすい環境だった。賢いカラスは、その境内林では鉄砲が使用できないことも知っていたようである。そのため、フランシスコッポラの映画のようにカラスの集団が舞っていた。その大量のカラスが、樹木に設置したトラップを壊した。その時、頭上を飛び回るカラスを見て涙が出そうになった。ネズミを池に浸けたり、イタチに熱湯をかけるなど、手ぬるいと感じた。「捕まえて八つ裂きにする」という程度の怒りではなく、「捕まえても殺さず、羽根を全部むしり取って苦しめてやる」というくらい腹が立った。その時、「母が感じた怒りはこれなのか」と思った。母のためにと開発した鳥獣撃退器を、その境内林に設置したところ、カラスによる被害は無くなった。自分で作った撃退器に酷く感謝した。

シカは追いかけると川の中に逃げ込む。これは、オオカミなどに追いかけられたとき、臭いを消すためと、オーバーヒートを回避するためだろう。そこで、2016年8月、自動走行するドローンで追いかけてシカを駆除する方法の特許申請をした。その特許が取得でき

そうになった 2017 年 3 月下旬、鹿児島大学での日本森林学会で、大学の後輩である T 氏と再開した。T 氏は、京都府立大学の山岳部に所属し、私に登山の相談をすることもあった。私は社会人の山岳会（関西岩峰会）に所属し、最初の冬山登山（劔岳の早月尾根）で靴が凍って凍傷になり、8 万円もする登山靴を買った。大学卒業と同時に本格登山を止めることにしたので、登山道具を T 氏に譲った。その道具を手にした T 氏は、1989 年元旦、リーダーとしてチャレンジした北アルプスで遭難した。絶望的な状況だったが、8 日後に救助された。この遭難事故は、連日、大きく報道され、T 氏は記者会見もした。日大アメフト部の危険なタックルが社会問題になり、日本初の学生による記者会見が行われたとされたが、30 年以上前、T 氏は学生として記者会見していたのだ。T 氏は、パスコという測量最大手に就職した。森林簿の電算化では、私が業者選定する立場として T 氏と面談した。大学では T 氏との共同研究も行った。学会での再会は 10 年ぶりだった。「こんなと所で会うのも運命だ。今、何をやってるの？」と尋ねると、T 氏は「SECOM は自動ドローンを運用するため、地形情報が必要だからパスコを子会社にした。情報収集のために学会に来た」と言った。私は「獣害研究も本格的に始め、鳥獣撃退器を開発した。ドローンで獣を追い払いたいと考えている」と打ち明けた。T 氏は「ALSOK も獣害対策に本腰を入れているので、SECOM も関心を持っている。SECOM ドローンで獣害対策できたら素晴らしい」と言ってくれた。私は「ここで会ったのは、SECOM と共同研究しろ」との運命だと感じた。しかし、T 氏が努力しても、SECOM のような大企業と、いきなり共同研究はできない。2018 年 4 月上旬、「害獣の撃退または駆除のシステム及び方法」という内容で申請していた特許が取得できた。それに、2018 年 3 月 31 日、綾部市の S 市議員が「獣害に困っている。鳥獣撃退器が欲しい」と私の職場にやってきたので SECOM との共同研究が実現した。開発した鳥獣撃退器の説明をすると、S 議員は「素晴らしい」と褒めて下さった。S 議員は綾部市の庄屋の末裔で、私が美山の庄屋の末裔ということもあり、意気投合して 2 時間ほど語り合った。S 議員が玄関から出たとたん、急に雨が降り始めた。とっさに傘を持って、車まで送った。すると、S 氏は「君は公務員ではなく、メーカー社員になるべきだった。俺はメーカーの重役だった。引退して農業していたら、議員になってくれと頼まれて議員もしている」と言われた。私は、S 議員が SECOM の重役だったかもしれないと感じた。すかさず「どこのメーカーにお勤めでしたか？」と尋ねた。すると、S 氏は「知らないだろうがパスコという会社だ」と返事されたので驚いた。「SECOM に提案したいことがあるので、T 氏というパスコ社員に繋いでもらっている」と言った。すると S 議員は「T 氏は俺が採用した社員で、俺の部下だった」と言ったので、さらに驚いた。S 議員は私の携帯電話で T 氏に電話して「SECOM ならば、俺から頼めば会える」と言ってくれた。そのおかげで、2017 年 5 月 11 日、T 氏と共に SECOM 研究所に行くことになった。念のために SECOM の株も購入しておいた。そして「都市をセコムするとか、イベントをセコムするとの CM で宣伝されているが、過疎地をセコムすると宣伝したほうが SECOM 株も上がる」と説得した。SECOM が開発した自動発着するドローンを使えば、山村での問題が解決することを説明した。①獣が撃退できる、②山村に設置されたソーラーパネルから金属が盗まれる被害が回避できる、③消火栓などの消防施設からの金属の盗難が回避できる、④重要文化財の盗難が回避できると説明した。そして「SECOM ドローンは、獣、泥棒、テロリスト対策に有効だが、それ以上に有効な活用法がある。だから美山

からわざわざやってきた」と言った。すると、SECOM の重役は「社員を集めるので、最初から提案し直してくれ」と本気になった。20 名ほどの社員が来てくださり、「SECOM ドローンは、認知症の老人の徘徊を止めることに利用できる。農山村が抱える重要な問題を解決できる技術を SECOM は既に持っている。私が試験地を提供するので実験して欲しい」とお願いした。その結果、SECOM との共同研究が、その日に決まり、大勢の社員が京都の現場に何度も来てくれた。徹夜しながら、SECOM ドローンでシカを追い払う実験を繰り返し、ついに成功した。この成果は、私が学会発表した 2018 年 3 月 27 日、SECOM はプレスリリースし、IR（投資家向け広報）も出した。その結果、その日から SECOM 株の価格は上昇し、2018 年の年初来安値は 3 月 26 日に付けた 7435 円であったが、12 月 4 日には 9827 円の年初来高値に達した。私は 79 万円で SECOM 株を買っていたが、インサイダー取引になってはいけなと考え、2018 年 3 月 28 日、数万円の損をして手放した。保持していたら 20 万円以上は儲かったが「残念だ」とは思わなかった。SECOM に「私と組んだ企業は必ず儲かる」と説得していたので、恩が返せてホットした。

「愛と意志が強ければ運がむいて縁ができ、縁は恩でつながる」というのは「あいうえお」の言葉遊びだが、SECOM との共同研究は、まさにそれであった。栗の研究では、そうしたことが頻繁に起こってきた。私が開発した技術で、最も世の中に貢献しているのは「栗の氷蔵処理」である。これについて詳しく書くと、本が書けてしまうほど長くなる。クリシギゾウムシという厄介な虫を殺すために使っていた臭化メチルが、オゾン層破壊物質であることが判明、2005 年に使用禁止になった。しかし、特別な許可を得て 2015 年まで国民には内緒で使っていた。クリシギゾウムシを殺すには、毒、温める、冷やす、放射線、振動、電気、炭酸ガスなどいろいろある。ほとんどを試した結果、「冷やす」が最も効果的であったが、冷蔵庫を使うと、栗が乾燥するため、乾燥防止の作業が煩雑であった。困っていたら、メーカー社員の I 氏が、農業試験場と間違えて林業試験場にやってきた。I 氏は「氷蔵庫は壁に不凍液を循環させて冷やす装置だ。これを使えば、冷やす物は乾燥しないので、京野菜の旬を保って出荷調整できる」と提案した。直ぐに「栗に使える」と説明し、その日のうちに、数百万円もする氷蔵庫を寄付してもらうことが決定した。実験の結果、-2℃で 3 週間貯蔵すれば、薬剤と同等以上の駆除効果が得られることが判った。2005 年の臭化メチルの使用禁止に間に合わせるため、その成果は 2003 年に論文発表した。そのことも影響し、私は、臭化メチル問題に関する国の委員も努めていた。しかし、氷蔵処理は旬を逃すと判断され、ヨウ化メチルで代替することが決まった。ところが、2011 年の東日本大震災による原発事故で、ヨウ素が逼迫、ヨウ化メチルは製造が難しくなった。おまけに、ヨウ化メチルは沸点が高く、臭化メチルのように簡単には使えないことも判った。結局、2015 年、再び氷蔵処理が見直され、2 台を導入して実験することになった。その結果、栗の糖度が増して美味しくなること、品種ごとに出荷できることを示すことができた。また、温暖化の影響で栗の収穫開始時期が 8 月下旬となり、その早生栗を氷蔵庫で貯蔵して売ること、有利販売できることが判った。つまり、氷蔵庫の最大の欠点とされた「旬を逃す」は「旬まで栗を貯蔵できる」というメリットに変わった。おまけに、氷蔵処理した栗はポン栗機で焼くと飛ぶように売れた。氷蔵処理や焼栗販売についても、Youtube に動画をアップしている。

<https://www.youtube.com/watch?v=o16G8XP9aKQ&t=43s>

<https://www.youtube.com/watch?v=nVqm8jm6JME&t=147s>

【54 頁】アライグマのほか、ハクビシンも増えている。鼻筋に白い線が入っているのが特徴だ。食肉目ジャコウネコ科ハクビシン属の動物だが、いつ日本に渡ってきたのかははっきりしない。戦争中（1943 年）に静岡県で捕獲されたのが最初だが、江戸時代に描かれた動物図にも似たもの（雷獣）があるほか、明治時代にも目撃例がある。一時期は長野県の天然記念物に指定されていた。

【コメント】ハクビシンは小さな穴から家の中に入る。鳥獣撃退器を怖がらず、撃退器を叩く様子が夜間カメラで撮影できた。ハクビシンは勇敢な生き物である。ハクビシンはアナグマに似ているし、アナグマのように美味しいらしいが、まだ食べたことはない。

【55 頁】ヌートリアも増えている。南アメリカ原産の水辺に棲む巨大ネズミである。頭胴長が 40～60cm、尻尾が 30cm 以上あり、体重は 5～10kg になる大型齧歯類だ。絶滅したとされるニホンカワウソを見かけたという声たまに出るが、ほとんどがヌートリアの見間違いだろう。全国の河川・湖沼に増殖中である。もともと軍服用の毛皮を得るために輸入されたが、逃げ出したか野に放たれたらしい。戦後も毛皮ブームに乗って輸入された。雑食性だが、水草のほか巻き貝を食べる。農作物も狙う。アライグマとともに世界中で問題化しており、特定外来種にも指定された。

【コメント】ヌートリアの繁殖力は高く、年 2～3 回の出産で平均 6.5 匹の子を産む。西日本を中心に分布し、大阪や京都、兵庫で定着。農林水産省が公表している「野生鳥獣による農作物被害状況」（2017 年度）によると、ヌートリアは全国で年間約 5800 万円の被害報告がある。水辺の草を引っこ抜き、根の部分を食べる大食漢で、1 日に体重の 20% に相当する量を食べる。頭も良く、侵入防止柵の突破できそうな場所を探し、集中的に攻撃する。水辺にトンネルを掘って巣を作るため、ため池や河川の堤防、田んぼの水路を決壊させる。2018 年の台風 7 号と梅雨前線による西日本豪雨では、各地で溜池が決壊して大被害になったが、ヌートリアの巣穴が原因で決壊した事例もあった。ヌートリアは堤防に穴をあけて豪雨による水害を助長するため、人命を奪う存在である。

<https://www.sankei.com/premium/news/190725/prm1907250003-n2.html>

【56 頁】中国原産のホエジカ科のキョンも危険な外来種だ。小型のシカだが、房総半島や伊豆半島で野生化し、森や農地を荒らして問題になっている。しかも数は数万頭に増えた。

【コメント】房総半島のキョンは数万頭ではなく 50 万頭以上に達している。栗の大産地である茨城県に侵入すれば、栗が被害を受ける。台湾ではキョンは高級食材であり、先住民が、車の荷台に乗って、道から一斉射撃する方法で大量捕獲したため、絶滅寸前になっている。台湾で、キョンの料理を出す店を尋ねたが、キョンが入手できないので料理は出してもらえず、キョンの剥製を見せられた。その店で「日本ではキョンが増えて困っている。台湾の先住民が日本でキョンを大量捕獲して台湾に持ち帰ってもらえれば助かる」と提案したら、賛同を得た。多くの日本人に、同じアイデアを話したところ「素晴らしいアイデアだ」と賛同するが、話は進まない。

地域消防団（御巢鷹山に落ちたジャンボ機に真っ先に駆けつけたのも地域消防団である）

は各地に残っている。消防団員が、深夜0～3時、地域住民を避難させて夜間捕獲をすることも提案している。軽トラックの荷台に1人の腕のよい猟師が乗り込み、赤外線センサーで獣を見分け、サイレンサー銃で打てば、一晩で数百頭を仕留めることができる。大型トラックを改造した加工施設に、仕留めたシカを消防団員が運び込んで血抜きすれば、美味しい肉が大量に得られる。自衛隊が射撃訓練を兼ねて実施すれば、自衛隊の食料になるだけでなく、缶詰にして難民キャンプに輸送すれば、食料援助にもなる。2014年10月28日、美山町大野で、この夜間捕獲のアイデアを披露した。すると、猟師の方が「サイレンサー銃は自衛隊でも使えない。無茶だ」と言った。そこで、私は「あなたには孫がないのか。孫が美山で暮らそうとしても、獣害がこれほど激しかったら、都会で暮らすしかない。私のような役人が提案しているのだから、猟師が諦めてどうする。夜間の射撃、道からの射撃、サイレンサー銃による射撃は危険なので禁止されているが、これら3つを同時にやれば安全だ。新しいことをしないと獣害は解決しない」と怒った。すると、その猟師さんは「俺にも孫がおる。すまなかった。夜間捕獲はやるべきだ」と言ってくださった。その猟師さんは合う度に「夜間捕獲、いつしてくれる」と言われた。この夜間捕獲についてアンケート調査したら、農山村で暮らす人は「すぐにやって欲しい」と回答したが、獣害の担当役人は「必要ない」と撥ね付けた。農山村での講演では、そのアンケート結果を示して「やる気のない役人の駆除が先だ」と主張すると、拍手が起こる。

【57～58頁】外来動物は、哺乳類以上に魚類や虫類、そして無脊椎動物にいても大きな問題だ。たとえば、ブラックバスやブルーギルは、すでに日本の淡水域の生態系を変えてしまった。ほかにもカダヤシはメダカを追い詰め、ソウギョ、タイリクバラタナゴも在来淡水魚に取って代わりつつある。意外なところで、ヘラブナやコイも来種だ。そしてミシシッピーアカミミガメ。子亀をミドリガメとして輸入し爆発的に増えた。さらにウシガエルやオオヒキガエル。アメリカザリガニ、ウチダザリガニといった甲殻類。アフリカマイマイなどの陸産巻き貝（カタツムリ）や、スクミリンゴガイなどの淡水巻き貝、ムラサキガイなどの二枚貝…。挙げ始めたら、きりが無い。もちろん、外来種の全てを否定することはできない。現在は在来種として扱う種の中にも、古代に日本に渡ってきた動植物もいるし、産業用に役立つ種も少なくない。家畜や家禽はもちろん、野菜の大半の原産地は海の向こうだ。しかし、それえらが人の栽培・飼育管理を離れて野生化したとき、生態系を乱し、獣害を発生させるのである。

【コメント】無脊椎動物の問題を指摘しているが、肝心の昆虫には触れていない。セアカゴケグモやヒアリは毒を有するので報道されるが、中国大陸から世界各地に分散したクビアカツヤカミキリについては、あまり知られていない。このカミキリは日本にも上陸して分布を拡大し、バラ科樹木を食いあさっている。モモやナシ、リンゴなど多くの果物はバラ科であり、サクラもバラ科である。このままでは、日本の果樹栽培は危機に陥り、サクラの花見もできなくなる。新型コロナも、中国大陸から拡大した可能性が指摘されているが、行き過ぎた資本主義（グローバル化と都市化）が外来種問題の根本原因だ。

ブルーギルについて触れているが、この外来魚については、2007年、平成天皇が天津市で開かれた「全国豊かな海づくり大会」で「ブルーギルは私が持ち込んだ。琵琶湖の在来魚を減らすほどブルーギルが異常繁殖した事態に心を痛めています」と発言された。

陛下は 1960 年、訪米先のシカゴ市長から贈られたブルーギルを日本に持ち帰り、水産庁の研究所に寄贈された。食糧難で困っている日本国民のために持ち込まれたのであり、当時、外来魚が問題になることは誰にも予想できなかったのだから、陛下に責任はない。黙っていれば、多くの人には知ることがない事実だが、陛下は公表された。「琵琶湖に迷惑を掛けた」と陛下が謝ろうとされたことに関係者は仰天、阻止しようとしたらしい。日本人の多くが粉飾決算や公文書偽造をする中で、陛下は、敢えて公表されたのかもしれない。いずれにしても、陛下が包み隠さずに公表されたことは尊敬の念に堪えない。

耕作放棄地が獣の住処になっているので耕作放棄水田を掘って水を貯め、琵琶湖で減っているホンモロコ（コイ科で最も美味しいとされる京料理に欠かせない琵琶湖固有種の高級魚）の養殖を計画した。すると「無許可で農地転用した。元に戻さないと罰金 300 万円の支払いになる」と南丹市職員から指摘された。そこで「農業委員には伝えていたので無許可ではない。耕作放棄水田に水を貯めることで水路が管理でき、獣害が減らせる」と説明した。それでも、許可してもらえなかったので、京都府や農水省などに陳情した。その結果、南丹市や京都府の役人 8 名が現場に来た。役人達に、水路を掃除する道具を渡し「水田は水路がないと意味が無い。イノシシが竹藪で暴れて水路が土砂で埋まる。耕作放棄する人が増え、水路を管理する人が減った。この集落では 50 人以上が稲作をしていたが、今は 10 人以下になった。養魚すれば水路が管理できる。養魚は稲作を続けるための苦肉の策だ。邪魔するな」と怒った。それでも「違法である」と言うので、「水田は掘ったが、まだ魚は放していない。レンコン栽培するために水田を掘ったことにして、そのレンコン畑にホンモロコが泳いでいることにしたら違法じゃない」と提案した。若い京都府職員が「私は京大林学科卒です。小林先生のことは学生時代から知っていた。小林先生が提案したレンコン栽培でやれるか検討する」と言ってくれたので、その場は解散した。その後、和知町出身の京都府職員の S 氏が「レンコン栽培は詭弁だ」と電話してきたので、「今すぐ、俺の職場に来い。和知町商店街を案内してやる。お前みたいな融通の利かない役人がいるせいで商店街では閑古鳥が鳴いている」と怒って電話を切った。余りにも腹が立つので、商店街にパンを買いに行った際、電話内容を店員に話した。すると店員は「和知町で S の名字は 1 軒だけ。この隣の閉まっている店が、その名字。息子さんは京都府職員です」と言った。そこで、再び S 氏に電話して「お前、和知町商店街で育った人間やないか。和知町の賑わいを取り戻したいとは思わないのか。法律は神が作るものではなく、役人が現場に合うように変更するものや」と叱った。すると、さすがに S 氏は「すまなかった」と謝罪し、ホンモロコ養殖が可能になった。その後、農業委員の 1 人が近畿農政局長に「水田養殖は地域経済にとって必要なので、農地転用せずに実施できるようにして欲しい」と陳情してくれた。そのようなこともあってか、2021 年 3 月、「水田の養殖池への転用は、変更が軽微であれば復田することも可能である。水田を利用した養殖は、農業と一体的に取り組みられ、地域の主要産業として確立されている場合があり、水田の機能保全、渇水時における農業用水の供給機能の発揮、農業者の所得増大といった農業振興に資する効果が期待できるため、農地を養殖池とする場合における一時転用について取り扱いを変更した」という通知が出され、水田の大改変を伴わない養魚であれば、10 年間は農地転用せずに実施できるようになった。

<https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/289374.pdf>

2021年、ホンモロコは200匹ほどしか収穫できなかったが、ドジョウとアメリカザリガニは、それぞれ2000匹以上が捕獲できた。ホンモロコとドジョウは、京料理店が購入してくれたので、京料理店で発生する生ゴミ（鯛のアラや、出汁を取るためのコブやカツオブシ）を譲っていただき、養魚用の餌にした。料理店から料理を運搬するUberが流行っているようだが、料理店に魚を届けて料理店から魚の餌となる生ゴミを回収する逆Uberもビジネスになるかもしれない。逆UberはSDGsに合致した取り組みになる。

アメリカザリガニが日本に移入されたのは1927年で、食用のウシガエルの餌用として持ち込まれた。その後、養殖池から逃げ出し、1960年頃には九州まで分布域を広げた。アメリカザリガニは、日本の水生昆虫や魚の生存を危うくしており、ゲンゴロウの激減の一因になっている。こうした悪影響から日本生態学会によって、日本の侵略的外来種ワースト100に選定されている。2023年にもアメリカザリガニの規制が始まる可能性がある。アメリカザリガニは勝手に増えた。ホンモロコやドジョウの敵だが、野外に放流できないし、かといって簡単に殺すことも憚られた。そこで、アヒージョやパエリアにして食べてみたところ、意外にも美味だった。アメリカザリガニは、フランスでは「エクルビス」と呼ばれる高級食材で、「天皇の料理番」として知られる秋山徳蔵は、大正天皇の即位式の晩餐会でザリガニ料理を出したいと考え、軍隊を支笏湖に送ってニホンザリガニ4000匹を採取し、うち3000匹を使ってザリガニ料理を作り、海外からの賓客をもてなした。ロブスターやオマールエビ（ヨーロッパ海ザリガニ）もザリガニの仲間である。私が育てた（自然に増えた）アメリカザリガニは、ホンモロコを食っているせいか美味しく、客人にも好評なので「美山ロブスター」と命名した。こうした水田養殖が、獣害対策になることをテレビ大阪が放送してくれた。放送内容はYoutubeにアップされている。<https://youtu.be/g4cqKiNrkL0>

【60頁】カラスの方がサルよりも多い。その他鳥類も同じくらいあるので、鳥害も非常に深刻であることがわかる。

【コメント】開発した鳥獣撃退器には大勢から問い合わせがある。農山村からは「サルやシカ、イノシシを撃退したい」との要望が多いが、都会からは「カラスやハトを撃退したい」との要望が多い。都会では、獣害よりも鳥害のほうが深刻なようである。

【61頁】被害額が減少してきたのは、やはり獣害対策に力を入れてきたからだとされている。具体的には農地に柵などを築いて防備を固めた点と、害獣を捕獲して駆除する事業を推進したことだ。実際、シカやイノシシの生息数は、若干減ったことになっている。だがこの被害額は、よく内容を見極めないと、現実と遊離している面もある。表に出ていない被害、被害額を計算していないケースが多くあるからだ。一部の研究者は「おそらく本当の被害額は表に出た額の5倍以上になるはず」と語る。単純計算すると158億円の5倍ならば800億円に近いし、近年の平均的な200億円前後の被害額を元にすれば、1000億円になるかもしれない。なぜ、これほど差が出るのか。まず、表に出るのは農林作物の被害額である。そして届出のあったものだ。農協などの組織が情報を集めているし、保険などを適用できる場合もあるからだ。水稲共済加入農家ならば、獣害による減収の9割まで補償する「野生動物被害補償制度」もある。ところが、それらの計算には入らない被害が少な

くない。たとえば、兼業で農業所得が低い場合や、自家用栽培や趣味的な家庭菜園の作物を食べられても、あまり被害を報告しない。保険に入っていないければ尚更だ。それに作物被害とは別の破壊もある。たとえば施設を壊されたとか、水田の畦を崩されて水が抜けてしまった場合もあるだろう。また、それ以前に諦めが先に立って作付けを止める農家も少なくない。広い農地を全部守るのは無理だから、作付面積を減らして、自分たちの目が届く範囲の農地だけにする農家も増えている。作付面積が少なくなれば、見た目の被害は減り、被害額も少なくなる。農業自体を諦めてしまえば被害額はゼロだ。農業が衰退して農家が減れば、獣害も減るのである。

【63 頁】そもそも木材価格が下がると、獣害に遭っても被害金額は少なくなる。

【64 頁】本当の獣害被害額は、統計に表れる額の数倍になることは間違いない。

【コメント】獣害被害額について、役所のデータが信頼できないことを指摘している点は評価できる。京都府農林水産部が、その年の重大ニュースとして「獣害が減った」ことを挙げたことがあった。その時の担当者に「農業総生産額が 100 億円から 10 億円に減った状況下で、獣害被害額が 2 億円から 1 億円に半減した場合、獣害は 5 倍になったことになる。栗を植えても獣に食われるので、栗を植えることを断念している人も多いが、それは被害額には反映されない。現場を見ずに、被害金額が減ったことを喜ぶのは怠慢だ」と怒った。また、鳥獣撃退器を貸し出すモニター調査で「獣害は減っているか？」と質問した結果、予想どおり「増えている」との回答が圧倒的に多かった。しかも、増え始めた時期として「最近」との回答が最多であった。役所では、パソコンのキーボードを叩くのが仕事になってしまい、役人は現場の声を聞かず、被害金額だけで獣害の増減を判断している。獣害には、農作物の食害、建物や農地の損壊、電車や車との衝突など金額で現すことができる被害もあるが、伝染病の拡大、下層植生の喪失、耕作の放棄、農山村からの離脱など、金額では現せない被害があり、そちらのほうが重大である。せっかく育てた農作物が獣害に遭った場合、役人は、その被害額しか考えないが、農家にとっては被害額の問題ではない。苦労が水の泡になったことで受ける心労は被害額よりもはるかに大きい。

【65～66 頁】かつての大台ヶ原は原生林に覆われていた。ブナやモミ、トウヒなどの大木による鬱蒼とした原生林に覆われていた。それが、なぜ、今は草原なのか。景観が変化したのは戦後だ。周辺の山々は天然林が伐られてスギやヒノキの人工林に変えられていくが、大台ヶ原は国立公園に指定されていたため手付かずだった。そこを襲ったのが、伊勢湾台風（1959 年）と第二室戸台風（1961 年）である。これらの大型台風によって、多くの大木が倒れた。そおために林床が明るくなった。すると、その部分はミヤコザサやスズタケなどのササが生えるようになる。これだけなら自然の摂理であり、時間が経てばまた樹木も育つはずだった。ところが、そのササを食べることでシカが大増殖した。ササは、シカにとって大好物の餌だ。もともと、大台ヶ原にはシカはあまりいなかったと想像されるが、急速に数を増やした。増えたシカは、ササだけでは餌が足りなくなり、樹木の枝葉も、樹皮も食べるようになった。落ちた種子も食べるし、種子から芽を出した稚樹も食べる。食べて食べて食べ尽くし、樹木が枯れて倒れると、より一層林床が明るくなりササや草が生える。シカの勢いはそこで止まらなかった。ササまで食べ尽くしてしまったのだ。土がむき出しになり、裸地化すると、降雨によって土砂が流出し始める。これは他の生き物の生

存にも影響を与える。草原化や裸地化の進行とシカの増減の細かなメカニズムは十分に解明されたわけではないが、大台ヶ原では台風の襲来とともにシカの生息数が激増したのは間違いない。

【コメント】「大台ヶ原のシカは台風によって増えた」というのは学者による通説にすぎない。ジャーナリストが、このような通説を鵜呑みにしてはいけない。伊勢湾台風や第二室戸台風は、100年に1度程度の災害である。この程度の台風で、ササが増え、それを餌にしてシカが増えるのであれば、シカは、しょっちゅう増えることになる。100年に1度程度の台風で大木が倒れる度にシカが増えて森が裸地化するのなら、日本には原生林など存在せず、禿げ山が多くなる。自然界には、増えた者を減らす仕組みが備わっている。新型コロナウイルスにも、増えすぎた人間を減らす役割があるのかもしれない。虫は、餌が多ければ増えるが、餌があり続けられれば、どこまでも増えるわけではない。むしろ増えすぎると疫病や天敵によってクラッシュする。シカにも天敵は存在する。大台ヶ原には野良犬の集団がいたのに、それを排除したことが、シカのクラッシュが生じなくなった要因だろう。大台ヶ原をフィールドに、シカの研究で博士号を取得したA氏も、上述したように、「大台ヶ原のシカは台風によって増えた」との通説を盲信していたが、数理モデルなども使って説明した結果、「野良犬を駆除したためにシカが増えた」との考えを考慮するようになった。

【70～72頁】山間の集落を訪れると、異様な光景に圧倒されることがある。集落が柵で覆われているのだ。正確に言えば田畑を柵で囲んでいるのだが、それがまるで監獄のように見える。高さ2メートルぐらひはある金網が延々と延びている。棚田の場合、山裾に柵が建設されるため、まるで山を柵が取り囲んでいるようだ。さらに平地の農地も柵が張り巡らされ、道路と川に沿って迷路をつくっているかのような光景になる。ときに人家までモノモノしい柵に囲まれていることもある。もはや要塞か砦である。さらに畑の周囲を柵で囲むだけではなく、その上、つまり畑の畝の上空までネットをかけて完全に塞いでいる場合もある。周辺の柵は主にイノシシやシカ対策だろうが、上部を塞ぐのはカラスなどの鳥に作物を荒らされないためだろう。こうなると柵というよりは、檻だ。そして、檻の中に入るのは人間だ。農作業は檻の中で行うのである。ちなみに農地を囲む柵は、電気柵の使用が増えている。不用意に触れたら危険だ。人体に影響のない微弱な電流と聞くが、やはり感電したくない。自作の電気柵に家庭用の電源から電流を弱める安全装置なしで配線したため、知らずに小川から近づいた親子2人を感電死させてしまった痛ましい事件も起きている。こうした柵はもちろん違法である。だが、通常の柵では防げないからやりすぎたのだろう。

【コメント】柵で囲まれた村の様子は、都会で暮らす人にとっては他人事だが、私は、その異様な光景の中で生活している。電気柵の設置と撤去はもとより、電気柵に触れて痛い目にあった回数も100回以上になる。獣の研究者や獣害担当役人は、電気柵で感電した経験は少ないだろうし、獣によって命が危険に曝された経験もないだろう。獣害の真の怖さは人命が奪われることである。筆者が指摘した感電死は、2015年7月20日、静岡県西伊豆町での事故であり、7人の親子が感電し、亡くなったのは親子ではなく大人2人である。電気柵はアジサイの花壇をシカから守るために男性が設置したもので、その男性は業務上過失致死傷容疑で逮捕され、男性は事故から約3週間後に自ら命を絶った。これら3人は、

獣害によって亡くなった。2010年6月5日、京都府福知山市猪野々の山中でも死亡事故が発生した。シカやイノシシの駆除に来ていた三宅諭さん（65歳）が誤って仲間の中嶋慶喜さん（67歳）を撃ち、それを苦にして三宅さんが銃で自殺された。その後、ご遺族などの関係者にも自殺者が出てしまった。痛ましい事故である。同じ福知山では、2015年3月22日、77歳女性が殴られてケガをし、現場近くで80歳の夫が死亡しているのが発見された。これも、私が調べたところ獣害による死亡であった。逮捕された山口一彦容疑者（48歳）は、老夫婦が道路沿いにシカよけネットを設置していたので「車で通行しにくい」と言っただけで口論になり、犯行に及んだ。私の近所に住んでいた教員の父も自作の電柵で感電死している。私が知っているだけで、これほどの死亡例があるのだから、獣害によって落命した方は千人以上かもしれない。鳥インフルや北朝鮮が発射するミサイルは大騒ぎになるが、それらによって死んだ日本人は皆無である。獣害では、多数の人が死んでいるのだから、政治家も、もっと関心を持つべきである。票を獲得しないと政治家にはなれないので、都会で暮らす人が政治家になることが多くなってしまった。そのため、農山村の問題である獣害について関心を持つ政治家は減り、世間の関心も低くなっている。筆者も「中山間地において獣害がもたらす最大の影響は、物理的被害以上に精神的なダメージではないかと思う」と暢気なことを書いているが、獣害の深刻さを世間に伝えたいのなら「獣害の最大の問題は人命の喪失だ」と主張すべきだ。

【74頁】いわゆる限界集落と呼ばれている地域では高齢化が進んでいるが、実は食うに困らない人も多い。年金があるからだ。子どもらは町に住み仕事に就いて、「町で一緒に暮らそう」と誘ってくれるが、親の世代は「産まれ育った村で暮らす方が楽しい」と断る。暮らしは自給自足に近くてお金もあまりかからないから年金で十分。昔からの知り合いがいたら寂しくない。だから身体が動かなくなるまで集落に住もうとするのだが...そこに必要なのが生きがいだ。それが農業であったりする。食べものをつくって金銭的に助かるだけでなく、実は生きがいとして精神的にも田舎の暮らしを支えているのだ。

【コメント】筆者は都会でしか暮らしていないので、農山村では、家や墓を守ることが重視されていることを知らない。都会生まれの人間にとって、暮らす場所は、お金の稼げる場所なら、どこでもかまわないのであろうが、私のように農山村で産まれた人間には、浮き草のような暮らしはできない。家や墓のことは気になるし、それを気にしないような人生など無意味にさえ思える。大学の林学科を卒業すると、大企業への就職は難しいので、半数以上は公務員を目指すことになる。都会生まれの学生は、国家公務員、都道府県、市町村と、あらゆるところを受験し、採用された役所に就職する。私のように「林業技術者として地元で貢献したい」との夢を持ち、京都府だけを受験する学生は皆無といってよい。

私は、実家から30km以内の職場でないで困るので、面接試験でも「京都府林業試験場に行きたい」と明言した。また、京都府林業試験場に赴任後は「異動せよ」と言われる度に「異動するなら辞職する」と拒否した。6時間以上も場長室に籠城したこともあった。不条理な人事異動を言い渡される度に、騒動が起こり、世間を騒がせたこともあった。そんな公務員は、私の他には、見たことも聞いたことも無い。

田舎でも公務員やJA職員などは、それなりの年金をもらうが、専業農家の年金は少ない。老後に夫婦2人で生活する上で必要な最低月額額は約22万円、ゆとりある老後生活を送

るために必要な額は約 36 万円とされている。厚生年金の男性の平均月額が約 16 万 6000 円で、女性は約 10 万 3000 円なので、夫婦だと 26 万 9000 円になる。これだと、それなりに暮らしていける。しかし、国民年金の平均月額は約 5 万 5000 円、農業者年金をかけていても夫婦で 15 万円以下にしかならず、これでは暮らせない。暮らすために必死で農業している人も多い。そもそも、専業農家は、土地を保有しており、受け継いだ家に住み、墓も守っている。家の修理、近所づきあい、寺などの共有財産の管理にもお金は必要だ。筆者は「暮らしは自給自足に近くてお金もあまりかからないから年金で十分」と書いているが、それは都会で暮らす年寄りのことであり、田舎で暮らす年寄りには余裕がない。都会で、浮き草生活している者が、勝手なことを書くべきではない。80 歳を超える父は、年金も少なく、農業収入も減っている。しかし、2019 年には祖父が建てた養蚕会社の記念碑の建立、2020 年には石垣の修繕、2021 年には寺に伝わる宝暦 10 年（1760 年）に描かれた親鸞聖人御伝絵の表具を行っており、その総額は 300 万円近くになる。父は贅沢はしないし、高級車も買わない。専業農家なのに、農機具も中古しか購入しない。趣味は読書で、暇があれば神社仏閣を巡っている。現金が貯まれば、近所や親戚との交際費、先祖から受け継いだ財産の維持管理に使う。妻は、西陣の大きな商家の生まれで、美山町に嫁いだ直後には JA 職員として窓口にいた。私の両親の貯蓄額を知った妻は、父が結婚祝いに 10 万円以上を包むことに対して「貯蓄額に見合わない祝儀だ」と指摘した。その時、父は「田舎では現金よりも信用が大切。困った時に頼る人がいない都会で暮らすなら、俺も貯蓄するが、田舎では貯蓄は不要だ」と反論した。日本人の平均貯金額は 964 万円だそうだが、貯蓄額がゼロに近い両親と、平均値の 5 倍以上を貯めている妻とが同居している。私は、父のように他人のことに私財を投げ出すことはできないし、妻のように質素儉約して蓄財することもできない。妙好人（みょうこうにん）とは、浄土教の篤信者で、例えば、自分の畑に肥料を撒くつもりで鶏糞を持ち帰ったのに、近所の畑のほうに肥料が足りていないと思うと、その鶏糞を撒いてしまうような、見返りの無い利他行動ができる人である。宮沢賢治の「雨にも負けず風にも負けず、雪にも夏の暑さにも負けず、丈夫な体を持ち、欲はなく決して怒らず、いつも静かに笑っている。1 日に玄米 4 合と味噌と少しの野菜を食べ、あらゆることを自分を勘定に入れず、よく見聞きして分かり、そして忘れず、野原の林の下の蔭の小さな萱ぶきの小屋にいて東に病気の子供あれば行って看病してやり、西に疲れた母あれば行ってその稲の束を負い、南に死にそうな人あれば行って怖がらなくてもいいと言い、北に喧嘩や訴訟があればつまらないからやめろと言い、日照りのときは涙を流し、寒さの夏はおろおろ歩き、皆にデクノボーと呼ばれ、ほめられもせず、苦にもされず、そういうものに私はなりたい」という詩の「そうゆう者」は妙好人に近い。違っているのは、妙好人は、その言行をもって周囲から尊称された人物である。日本には、何人もの実在例がある。私は、そうゆう者になりたい。欲を捨てれば楽しく生きられることは知っているが、まだ、欲は捨てきれない。

【75 頁】過疎の原因は、子どもらの教育や就職先、農業の衰退、そして買い物や病院通いの交通の便...などいろいろある。どれも正解だが、実は直接的な村を離れるきっかけは、獣害が多いのではないかと私は想像している。村に住み続ける意欲を破壊するからだ。

【コメント】獣害に困っているのは農業に従事している年寄りであるが、年寄りが村を離

れることはない。年寄りが離れるのは、老人ホームや病院に行くときと、他界するときである。40～60代が村を離れることも多いが、その原因は事業の失敗による破産が多い。役所を退職して地域に関わろうとして撥ね付けられ、村を去るケースも多い。私も、公務員を退職したら、口を慎まねばならない。村を離れるのは若者である。離れる理由として、獣害が直接的な原因になっているケースは少ない。若者が村を離れる直接的な原因は過疎である。「過疎の原因は過疎である」。過疎になると、友達や交際相手が減るし、交通の便が悪くなるし、教育や医療が受けにくくなるし、情報（通信）が少なくなる。イワシは群の中にいないと死亡率が高くなることは容易に想像できるだろう。どんな動物でも、個体数が減ると交配相手が減るし、外敵の襲撃から逃れにくくなるので、繁殖や生存が困難になる。「個体数が減ると絶滅の危機が増大する」という法則は「アリー効果」と呼ばれている。獣害の原因は過疎であり、獣害は過疎を助長するから、獣害は間接的に過疎の原因になっている。

【80～82 頁】2020 年、世界は新型コロナウイルスが引き起こす肺炎によって、大恐慌に陥った。そして、まだ終息していない。正確には、前年の秋から中国の武漢市で新しい疫病が広がっている噂はあったが、その脅威は十分に認識されず世界は案穩としていた。中国政府もひた隠しにして、そのうち沈静化するのを願っていたのだろう。だが、新型コロナウイルスは、想像以上の感染力を持っており、世界中に肺炎を蔓延させてしまった。このウイルス感染症は「COVID-19」と名付けられた。新型コロナウイルスの正式名称は、「SARS-CoV-2」だ。コロナウイルスそのものは従来から知られていたが、変異したため、従来の治療法やワクチンが効かず、人類は免疫を持たないためパンデミック（世界的な感染爆発）を引き起こしてしまったのだ。感染源は確定していないが、コウモリだろうといわれている。そしてほかの動物、たとえばセイザンコウを介して人に広がったらしい。2003年に流行し、多くの死者を題した重症急性呼吸器症候群（SARS）、さらに2012年の中東呼吸器症候群（MARS）もコロナウイルスの仲間が引き起こした感染症だ。SARS はキクガシラコウモリの持っていたウイルスが、ハクビシンを介して人に感染したとされる。MARS も宿主はコウモリらしいが、そこからヒトコブラクダを介して人間へうつったようだ。感染症には野生動物起源のものが多い。鳥インフルエンザは1997年に人に直接感染するものが現れて、新たな人間のインフルエンザ（A/H1N1）となった。2009年にはこの新型インフルエンザが世界的流行となり、今も各地で季節ごとに発症し続けている。2014年にはアフリカを中心に大流行したエボラ出血熱も、エボラウイルスがコウモリから人へうつり、さらに人から人へ感染するようになった。西アフリカのマナコ地区で1人に感染したエボラウイルスが変異して、人間への感染性を4倍も高めたことがわかっている。患者に触れるだけでうつる強力な感染力と、その致死率の高さ（約50%）で脅威となった。またエイズも、サルの持っていたウイルスが突然変異によって人への感染性を獲得し、人免疫不全ウイルス（HIV）になったと考えられている。そして世界史上最大級の被害を出したといわれるペストは、ネズミ、イヌ、ネコなどが宿主で、ノミを媒介して人に感染するようになった疫病である。14世紀に起きた大流行では世界で約1億人、当時の人口の22%が亡くなったという推定もある。

【83 頁】いずれにしる野生動物がもたらす害という意味で、これも獣害と呼べるだろう。

それも、膨大な人の生死を左右し、世界経済を壊滅させかねない獣害である。こうした動物が持っていた病原体が人間にうつって起こる疫病を、人獣共通感染症とか動物由来感染症などと呼ぶ。英語では「ズーノーシス (zoonosis)」である。世界保健機関 (WHO) がこれまでに確認したズーノーシスは約 150 種に及ぶ。全ての感染症の 58% がズーノーシスで、その 3 分の 2 以上が野生動物に由来する。

【84 頁】たとえば SARS は、中国の野生動物市場で取引されたハクビシンから人に感染したといわれている。野生動物が恒常的に取引される市場があり、そこで食肉などに加工され売買される過程で、人と接触した。しかも市場には広い地域から多くの人が集まるため、感染を広げる場になりうる。今回の新型コロナウイルスも同じ疑いがかけられている。コウモリからセイザンコウにうつり、そのセイザンコウを食肉のほか、ウロコを漢方薬にし、皮革を利用する過程で人に感染した可能性だ。もう一つ、ペットも大きな感染源になる。とくに心配なのはネコだ。つながれるか囲われて飼われるイヌやウサギなどと違って野外を自由に徘徊するネコは、多くの病原体をほかの動物からもらって身につけやすい。ネコ同士の感染も頻繁だ。たとえばネコエイズやネコ白血病なども放し飼いによって広がっている。それらが何かのきっかけで人にもうつるように変異するかもしれない。新型コロナウイルスは飼いネコにも感染例が出ている。

【コメント】この本は「新型コロナも獣害の 1 つだ」と主張したことが最も評価できる。後述するが、私も、2018 年 10 月 5 日、「獣害が増えると感染症が問題になる」と Facebook で指摘していた。

エボラ出血熱が流行したとき世界的に株価が急落、保有株も下がったので、2014 年 10 月 17 日、全てを売却した。「日本でエボラ出血熱患者が発生」とのニュースも流れ、株価はどんどん下がった。六和証券の O 氏が「小林先生が買った株は下がる。アゼアス株を買ってエボラ出血熱を止めて」と電話してきた。アゼアス社は防護服の草分け的な存在で、エボラ出血熱の流行によって株価は 470 円から 1890 円 (株を手放した 17 日) に急騰していた。そこで、アゼアス株を 1 万株 (1600 万円) 購入した。買ったアゼアス株が下がれば、エボラ出血熱は終息する。また、エボラ出血熱がさらに拡大したら、アゼアスの株価も上がるので損失が補填できる。アゼアス株を買うことにためらいは無かった。アゼアス株を買った直後、「日本でエボラ出血熱患者が発生との情報は誤報である」との速報が流れ、アゼアス株は暴落、売ろうとしても売れないストップ安が 2 日間も続き、大損した。六和証券の O 氏は「小林先生は、たった 1 千万円で世界を救った」と言ってくれた。

ビルゲイツはパンデミックを予想し、自己の資産をマラリアの撲滅に投じている。私も、蚊をとる装置の開発を目指している。新型コロナが武漢で問題になったとき、世界は安穏としていた。しかし、私は「これは拡大する」と思った。そして、新型コロナが広がれば海外には行けなくなるので、2020 年 1 月 15~24 日の日程でのスイス行きを決めた。この渡航を決めたとき、アゼアス株は値が上がっていなかったので買っておいた。すると、新型コロナは急拡大してアゼアス株が上昇した。1 月 23 日、スイスからの帰途のヘルシンキ空港で武漢から脱出した中国人の集団に出くわした。日本に戻ると、新型コロナは世界中に広がる様相を呈していた。1 月 28 日、スイス行きの旅費 (30 万円ほど) の利益が出たのでアゼアス株を売却した。すると、新型コロナが急拡大、アゼアス株はさらに上昇した。証券会社の O 氏は「小林先生がアゼアス株を売ったので新型コロナが広がった」と怒った。

仕事で関係する企業については、企業情報を知るために株を買ってきた。しかし、「買った株は下がり、売った株は上がる」という傾向があった。人は、嫌な体験ほど強く記憶する。このためマーフィーの法則というユーモラスな経験則がある。「タクシーは待てば来ない」「慌ててコピーしようとするときコピー機が不調になる」「落としたトーストがバターを塗った面を下にして着地する確率は、トーストを落としたジュウタンの値段に比例する」とかの法則である。しかし、私の株の売買は、マーフィーの法則ではなく、統計的にも証明できるほど明確である。東日本大震災が発生した3月11日、東京電力本店で幹部と面会することになっていた。そこで、直前に東京電力株を買っていた。すると、原発のメルトダウンで東京電力の株は暴落した。「こんな時こそ株主は買い支えるべきだ」と言いつつ買い続けたら、東電株は下がり続けた。原油株も、WTI原油先物価格が1バレル当たり30ドルまで下がったので買ったなら、1バレルが20ドルを割ったので、さらに買ったなら、1バレルが10ドルを割り、頭にきて、沢山買ったなら、2020年4月20日、1バレルあたり-40ドルになった。怖くなって全部売ったら、その後、V字回復した。SECOM株も80万円ほどで買ったなら、すぐに下がって74万円になった。しかし、2018年3月27日、SECOMとの共同研究内容を学会発表した日に79万円まで上昇したので、インサイダー取引を回避するために売却した。すると、その後、一方的に上昇して100万円を超えた。両肺血気胸で入院した際、パルスオキシメーターのお世話になった。この装置は、コニカミノルタが1977年に開発したもので、新型コロナウイルス感染者の肺炎の早期発見に活躍している。そこで、コニカミノルタ株を少しだけ購入した。中学生の頃、駅伝に情熱を燃やした私にとって、正月の楽しみは実業団駅伝と箱根駅伝である。コニカミノルタの株主情報に「駅伝での名門復活を目指す」とあった。正月の午前中から実施される実業団駅伝の日本一決定戦である「ニューイヤースタート」では、コニカミノルタの優勝回数は8度で、旭化成に次いで2位である。期待して見たが、コニカミノルタは終盤に失速し、21位に低迷した。ホンダが初優勝だった。車は、ホンダしか購入しておらず、ホンダのファンではあるが、やはりコニカミノルタに活躍して欲しかった。その時、「今年の秋、コニカミノルタの選手に焼栗を食べてもらおう」と考えた。そう思ってコニカミノルタ株を1万株も買い集めたら、ウクライナ情勢の悪化などで暴落した。WTI原油先物価格が1バレルあたり60ドルにもなっていたので、原油が株を買ったら、珍しく上がったので、2022年1月6日に売却した。すると、その後、ロシアがウクライナに侵攻するなどして原油価格は一方的に上がり、WTI原油先物価格は1バレルあたり120ドルを超えた。こうした状況を知る人は「原油株を大量に買ってくれ」と私に懇願している。原油株を2万円買うだけで戦争が終わるなら、買ってほしいと思いはじめている。

【85～86頁】ダニはQ熱、日本紅斑熱、ライム病などの感染源になること知られているが、なかでも怖いのは重傷熱性血小板減少症候群（SFTS）だ。極めて致死率の高い（15～25%）危険な病気で、2019年には過去最高の102件の感染者が報告された。やはり野生動物が人里に出没することで、マダニが人につく機会が増えたからだろう。

【コメント】マダニに噛まれたことは数回ある。ナラ枯れの調査で笹原を歩いたとき、ベルトのあたりを噛まれた。シカに付着していたマダニが、シカが笹原を歩いたときに落下し、そのマダニが私の身体に付着したのであろう。そのマダニを手でひねり潰したところ、

やはり跡が残った。ナラ枯れの共同研究者もマダニに噛まれたが、その人は、病院の手術台で摘出手術を受けた。大勢の研修医が、物珍しそうに見学したそうである。

2008～2018年、クマに襲われて死亡したのは22人、平均すると毎年2人が亡くなっている。2019年、ヘビ（大半がマムシ）に噛まれて死亡したのは5人、毎年、数人程度が亡くなっている。2020年、ハチに刺されて死亡したのは13人、1984年に73人が亡くなったのが最多で、最近では毎年十数人が亡くなっている。このことから「日本における最強生物はハチである」と言えそうだ。ただし、マダニが媒介するSFTSは、2013～2019年11月末までの患者総数は492人で、このうち14%に当たる69人が死亡している。平均すると毎年10人が亡くなっており、ハチよりも怖い存在になりつつある。

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO53465030X11C19A2CR8000/>

【88～89頁】1879年3月26日の函館新聞には、釧路周辺だけで10万頭を獲ったと記されている。これは前年度か、数年間の記録かわからない。当時はエゾジカ肉が缶詰にされて海外輸出されていたことも影響しているだろう。1882年には十勝でエゾジカの角を16万本収集した記録（札幌勸業課年報）もある。

【コメント】古文書から、江戸時代のほうが今よりシカが多かったことがうかがえる。明治時代には日本のシカは缶詰にして輸出していたのだが、シカが減って、缶詰にしていたことも忘れ去られている。もう一度、思い出して、日本のシカを缶詰にして輸出したり、難民キャンプに送るべきだ。日本で増えすぎたシカを、北朝鮮に食料として送ることに異を唱える日本人は少ないだろう。北朝鮮に食料援助すれば、拉致被害者を戻してもらえ可能性も多少は高くなるかもしれない。

【89～91頁】なお本州も含めたシカ全般については、1892年に「狩猟規則」が制定されて1歳以下のシカが捕獲を禁止されている。ところが1901年に「狩猟法」が改正されて禁猟が解除され、1918年には狩猟獣に指定された。獣害が出たから、狩猟を希望する人たちの圧力があつたのだろうか。だが翌年、生息数の減少が目立ったため狩猟期間の短縮などの措置が取られるようになった。当時は1頭でもシカを仕留めたら大きな成果だったらしい。戦後は1947年に狩猟期間が元にもどされたが、1948年から狩猟獣から除外され1950年にはオスジカのみが狩猟獣とされた。ただ地方によってはシカを全面的な捕獲禁止にしたところもある。やはりシカは減少しているという認識だったのだ。1978年に環境庁（当時）は、オスジカの捕獲数を1日1頭に制限している。徐々に農作物などに被害が出ていたので駆除が必要という声があつたものの、野生動物を殺すことに抵抗した様子が伝わる。だが1980年代になってから個体数が増加したことがあきらかになり、農林業や森林植生への影響も指摘された。そこで環境庁は1994年にメスジカの狩猟を許可する。ただし、「シカの保護管理計画を策定した都道府県に限りメスジカを獲れる」という複雑な段取りだ。まだまだ駆除には及び腰だったのだろう。そもそもオスジカの駆除だけで頭数管理を行うのは無理がある。なぜならシカの社会構造は、強いオスジカが複数のメスとハーレムをつくるからだ。つまり1頭で多くのメスを妊娠させる。仮にハーレムをつくったオスを駆除しても、空白のボスの座に交尾相手にあぶれたオスジカが就くから、メスの妊娠率は下らない。あるいはハーレムを持たないオスジカを駆除しても、もともと子孫はつukれない

のだから繁殖力を減じる効果はないだろう。1999年には、鳥獣保護法を改正して特定計画制度を創設し、メスジカの狩猟を可能にした。また2006年には休猟区であってもシカ・イノシシなどの狩猟が可能になる「特例休猟区制度」が創設された。さらにメスジカを制限なく狩猟できるよう2007年に改正された。これで捕獲禁止処置が完全に廃止された。

【コメント】ここの記述は、シカに対する施策の経緯がよくわかる。想像になるが、以下のような経過があったのではないだろうか。

***ここから

明治維新を成し遂げた指導者達は、欧米列強と対峙せねばならなかった。指導者達は、日本人の体格が欧米人に比べて小柄であることを気にした。日本人の体格が小さいのは「肉を食わないからだ」と考え、福沢諭吉に「千数百年にわたって肉食を卑しいとした風俗があり、肉食を嫌う者が多いが、無学妄想である」と新聞に書かせるなどして、獣肉を食うことを奨励した。その結果、多数のシカが捕獲され、一気に減った。そこで、1892年に「狩猟規則」を制定した。しかし、日清戦争で食料が必要となり、1901年に「狩猟法」を改正して禁猟を解除した。日清・日露戦争に徴兵された民は、銃を使うことに馴れ、しかも、旧式の村田銃が安価で払い下げられた。復員兵が銃でシカを捕りたいと要望したため、1918年にシカを狩猟獣に指定した。すると、シカが一気に減ったので、1919年に狩猟期間を短縮した。戦中戦後の食糧難の中、獣肉は貴重なタンパク源になり、1947年に狩猟期間を延長した。すると、シカが一気に減ったので1950年にメスジカの狩猟を禁止した。すると、1980年代にシカが増えたので1994年にメスジカの狩猟を許可した。それでもシカは減らないので、次々に狩猟を緩和してきた。

***ここまで

【92頁】ニホンカモシカはウシ科の日本固有種だが、明治以降は毛皮や角が商品化されたことでカモシカへの狩猟圧は増した。そのため生息数は激減し、1934年に天然記念物、1955年に特別天然記念物に指定される。

【コメント】美山町芦生にはカモシカは生息しているが、見たことはない。1983年、三重県の御在所だけでの岩登り訓練中に、初めてカモシカを見た。カモシカは、人を警戒せず、近づいてきた。野生の大型哺乳動物と、あれほど接近したのは、小学生の修学旅行で、奈良公園のシカに触れて以来であった。「カモシカはウシ科なので美味しい」と言われるが、猟師達は「たいしたことはない」と言っている。いずれにしても、美山町に特区を設け、カモシカやオオサンショウウオを飼育して観光客に提供するレストランを作れば面白い。このような提案して皆から鼻で笑われているが、いたって本気である。

【96～98頁】温暖化が動物を増加させたという意見は、一定の理解を得ることができるだろう。豪雪地帯から雪が消え、それとともに野生動物の姿が冬でも見られるようになったのは事実だ。生息域を北へと広げている現象も説明できる。実際に、温暖化によってシカの生存率が高まっているという研究がある。通常、子ジカは冬の死亡率が高い。初年度に体重が20kg程度まで増えないと冬を越せないという。脂肪が少ないと寒さに耐えられないからだ。それが近年は栄養状態がよい子ジカが増えているらしい。しかし、地球温暖化によって、全ての野生動物の増加を上手く説明できるわけでない。むしろ限定的だ。日本列

島で深い積雪がある地方は日本海側の山陰、北陸、東北、そして北海道に限られている。九州など昔から雪がたいして降らない地域も少なくない。東北の太平洋側は厳冬期でもあまり積もらない。積雪の影響をすべての動物が受けるわけではないのだ。さらに、積雪地域でもこの仮説が当てはまるかどうか怪しい面がある。温暖化の兆候がまったく現れていない時代に、多くのシカが生息していたからである。現在よりもはるかに平均気温が低くて寒冷期だったとされる江戸時代中期にも、東北に多くのシカやイノシシがいた記録がある。近年でも、北海道における1980年～2002年までの積雪量とシカ個体群変動を分析した研究からは、大雪が降って積雪が多かった年代でも、個体数は減少していなかった結果が示されている。それに温暖化が進行していても、実際に大雪が時折降る。最近では地球温暖化という言葉が公的研究機関ではあまり使われないようになり、「気象変動」と表現されるようになった。平均気温は上昇しているものの、地域ごとに違いがあり、また短期的に極度の低温が続くこともある。豪雪や強風なども増えた。大気中の二酸化炭素濃度の上昇をもたらすのは気温の上昇だけでなく、気象の激甚化だと指摘されている。酷暑も大寒波ももたらすのだ。たとえば「平成18年豪雪」（2005年12月から2006年1月）と名付けられた大雪がある。全国各地で軒並み観測史上最高の積雪が起きた。ところが、その時期（大雪の翌年）のシカの生息数は、どの地域でも減少してない。寒波や大雪は生存に影響を与えるだろうが、それが野生動物の生息数を減らすほどなのかどうかは怪しい。

【コメント】温暖化が獣害の増加要因ではないことをうまく説明している。ただし、温暖化をもたらした化石燃料の利用は、獣害を増やしている可能性がある。シカやイノシシは、主にタンパク質でできているので、タンパク質の基となる窒素が増えれば、シカやイノシシが増えても不思議ではない。自動車が普及して世界中で窒素酸化物が増えている。シカが食う草が、窒素酸化物のせいで生長が早くなっていれば、シカやイノシシが、その分、多くなっても不思議ではない。私は「安全な場所が増えたので獣が増えた」と考えているので、窒素酸化物の増加の影響は小さいと思っている。ただし、筆者は「餌が増えたことで獣が増えた」と主張しているのだから、窒素酸化物についても考察すべきだ。

【98頁】シカが増加すれば、教科書的には、餌を奪い合って最終的に生息数は減るはずなのだが、個体の体格が小さくなりやしても、生息数は減らないという報告もある。

【コメント】虫も、種によって体サイズはほぼ決まっている。しかし、オオゾウムシの成虫は体長1cm程度の個体がいったり、3cmを超える個体もいる。これは、マツのような栄養の少ない樹木の幹を食っているからだろう。オオゾウムシの幼虫は、自分では、餌を選べない。親が卵を産み付けた樹木を食うしかなく、その樹木の栄養が豊富であれば大きく育つが、貧栄養であれば小さくなる。これは、生きる上で、実に便利である。シカは、餌が少ないと体格を小さくできるので、なかなか数は減らない。人間で、こんなことができるのは日本人だけかもしれない。戦中・戦後の食糧難を生き延びた昭和一代は、体格が小さい。ドイツ人でそんな人はいないだろう。世界の人口は75億に達し、食料難になれば人口は急減するが、大人の身長を50cmにすれば人口減は避けられる。

【99頁】ハンターの数は狩猟に必要な狩猟免許（銃猟と罟猟の合計）の免許所持者数で数えることができる。農林水産省や環境省の白書などの統計グラフでは、1975年には51万

8000人だったが、90年には29万人。そして2014年は19万400人と右肩下がりの状況が示されている。こんなグラフを見せられたら、誰もがハンターは減少していると感じるだろう。そして「狩猟する人が少ないから駆除が進まない」という説明に納得する。

【101～102頁】次に届出のある有害駆除数の推移を見てみた。すると驚くべき数字が出ていた。ここでは1990年と2014年の駆除数を比べてみよう。シカは4万2000頭から58万8000頭へ、イノシシは7万200頭から52万600頭へと急増している。そしてこの期間は、ハンター数が急減した時期に当たる。29万人から19万4000人と約10万人もハンターが減った。それにもかかわらず、駆除数は激増しているのだ。この点だけでも、「ハンターの減少」が「野生動物の増加」もしくは「獣害の増加」を招いたことは説明できないことがわかるだろう。白書や政府の説明する獣害発生理由にハンターの減少を揚げるのは極めて不適切である。

【コメント】ハンターの減少は獣害の激増の要因ではないことをうまく説明している。ただし、ハンター数や駆除数のような役所の統計データは信用できない。

車が普及していなかった時代、ウサギ狩りや鮎漁は、村で暮らす人の大半が実施していた「遊び仕事」であった。車が普及すると、ゴルフやパチンコに興じる人が増え「遊び仕事」をする人は減った。狩りのような遊び仕事には、技術と体力が必要であるため、サラリーマンが増えると、さらに「遊び仕事」をする人が減った。私のように50歳を過ぎても鮎漁をするには、かなりの体力が必要であるが、そんな中年は珍しくなった。遊び仕事をする人は、獣にとって厄介な存在である。私は、シカやイノシシを捕獲したことはないが、何度も追いかけて回している。こんな人間が、集落に50人もいたら、シカやイノシシは、集落にはやってこない。ハンターの減少は獣害の増加要因ではないが、遊び仕事をする人が減ったことは、獣害増加の一因である。

【103頁】ハンターの数が減り高齢化が進んだのに、なぜ駆除数は増えているのか。獣害がクローズアップされ、その対策の必要性が広く訴えられたことがあるのは間違いない。ただその裏には報奨金がある。有害駆除を行うと支払われる報酬である。額は自治体によって違うが、これまではシカ1頭当たり2000～5000円だった。これではハンターの収入にならない。銃を扱う場合には多くの経費がかかるうえ、山野を駆けめぐりつつさを考えると、この額で出勤しようとは思えない。趣味の狩猟に付いてくる小遣いか、ボランティア意識で行うのである。ところが、獣害がひどくなるにつれて報奨金が上がってきた。地域によるがシカ1頭当たり2～3万円になっている。しかも生息数が増えたので捕獲のチャンスも上がる。すると、これまでボランティアに近かった駆除に頑張りがいが出るし、収入増も期待できる。本気で取り組みれば1日で何頭も仕留めることができるからだ。ハンターの高齢化は進んでも、狩猟には精が出るわけだ。

【コメント】京都府では、シカを仕留めた場合、0.5～4万円が支給されてきた。仕留めた証拠として、シカの歯とアンケート調査票の提出が求められた。その調査票は、私が勤務する林業試験場に集められ、集計結果は、シカ生息数を推定する基礎とされた。しかし、歯に関する業務はデタラメであった。30年間で数億円の血税が投入されただろうが、担当者がコロコロと交代し、単年度の集計はあっても、経年変化は把握されなかった。データがもったいないので、過去のデータを集計してみたが、オスが妊娠しているケースが多く

「オスが妊娠するようになったことをネイチャーに投稿すべきだ」と揶揄した。獣害に苦しんでいる私のような京都府民にとって、デタラメな仕事によって「獣害対策してますよ」とアピールされることは許せなかった。だから「歯の回収事業を止め、それに使っている血税を獣害回避策に回せ」と怒った。毎年のように怒っていたが、歯の回収事業は継続されたので、この事業で利益を得ている業者にも腹が立った。2018年5月2日、南禅寺でイノシシ撃退用のカプサイシンが撒かれ、観光客など24人が喉の痛みなどを訴え、4人が病院に搬送された。この事件は、テロの可能性があると大きく報道された。京都市が委託した業者がカプサイシンを撒いたのだから、京都市が謝罪すべきなのに、京都市の担当役人は「あんな場所でカプサイシンを撒いたら、あきまへんなー」とテレビカメラの前で暢気なことを言っていた。人脈を使って調べたところ、カプサイシンを撒いたのは、シカの歯の回収事業をやっている業者だった。その業者の社長に「カプサイシンを撒いた犯人であることは伏せておく。その代わりに相談したいことがあるので京都に来て欲しい」と連絡し、京都に来てもらった。そして「シカの歯の回収事業は、京都府民の役に立っておらず、猟師に負担をかける茶番であり、すぐに止めるべきだ」と怒った。社長にとっては収入減を失う要求であり、すぐには納得してくれなかったが、私が京都府職員としてではなく、獣害に困っている京都府民として要望していることを知った社長は「この事業は不要です」と京都府組織に進言してくれた。

車に撥ねられたシカの死体は100回以上見ている。近所の猟師に「目の前に車にシカの死体がある」と教えたところ、その猟師は、消防団詰め所に5000円相当の缶ビールを寄付してくれた。猟師が減っているのに、駆除数が多くなったのは、補助金が出るようになって以降、捕獲した数の全てを届けるようになったためだろう。また、車に撥ねられたシカの歯を抜いて届けたり、1頭から複数の歯をとって申請すれば、駆除数は増える。ナラ枯れの被害量もそうだが、役所のデータは信用できない。国交省による統計データ改竄が発覚して大問題になっているが、この改竄は20年以上にわたって実施されていた。農林水産関係の統計データは改竄しても、真実のデータは把握が困難なので、改竄も発覚することはない。役人の他に、登山者がナラ枯れを把握するなどの仕組みが必要なので、実際に、登山関係の組織に提案している。

森友問題での財務省の公文書改竄もあった。役所がこんな状態だから「小林さんは、なんで公務員をしているの？」と大勢から問われてきた。日本の偉人は、坂本龍馬や西郷隆盛、渋沢栄一など、ほとんどが役人である。今の役人は保身のために公文書でも改竄するので「役人は、つまらぬ」と思われているが、もし、私が役人でなかったら、南禅寺で事件を起こした業者はわからなかった。そもそも、シカの歯の回収事業が、なんの役にも立っていないブルシット・ジョブであることに気付くこともなかった。

クマの研究をするために、京都府職員のM氏が林業試験場に赴任した。2004年10月28日、美山町にクマの研究者が集まった際、囲炉裏端で焼き松茸をふるまって、何をすべきか意見を聞いた。すると、東北でクマを研究していたO博士が「東北では、ブナの実が凶作だと、クマが里に出没しやすい。京都では、ミズナラのドングリが凶作だと、クマが出没しやすくなるかも」と教えてくれた。さっそく、ミズナラの豊凶とクマの出没数（目撃数）との関係を調査した。その結果、3年間で「ミズナラが凶作だとクマが里に出没しやすい」という傾向が認められ。その成果を学会発表し、ミズナラの豊凶を把握する事業も

始まった。実は、これもブルシット・ジョブである。クマは、主に秋に里に出没するが、秋の出没が多い年には、5月頃から出没が増える。ミズナラの凶作が判明する秋よりも前の6月には「熊が出没しやすい」と予想できるのであるから、ミズナラの豊凶調査には意味が無い。それでも、ミズナラの豊凶調査は延々と続けられているのは「クマ対策もやっています」とのジェスチャーに過ぎないので、むしろ止めるべきだ。

農林水産部長と商工関係部長が相談し「京都府の中小企業に、クマの移動範囲を把握するための発信器を作らせる」という事業もあった。これには複数の獣害研究者が関わっていた。私は「欧米の大企業が発信器を製造している。中小企業では開発できない」と主張した。それでも、数年間、事業は継続され、発信器らしきものが完成した。2008年4月27日、副知事も参加してデモが実施され、開発された発信器を付けた京都府職員が京都府府庁周辺を歩いたが、位置は把握できなかった。クマにも装着されたが、発信器は回収できなかった。他にも、農林水産部長から「林業試験場と畜産試験場が共同し、ウシの放牧による獣害回避の研究をしろ」とか「ヤギを栗園で飼って獣害対策しろ」という命令があり、林業試験場の職員が汗をかいた。ウシの放牧では、ウシが逃げ出さないように頑丈な柵をすることになり、その柵によって獣害が回避できてしまった。また、放牧されたウシは風邪をこじらせて死亡した。栗園でのヤギの放牧は、ヤギが栗の幹や実を食うので、遠くの試験地で実施してもらった。餌やりが大変なので、引き受けた林業試験場長にお任せした。出世のために無駄な仕事をする上司に「獣害は深刻。無駄な事をしている時間はない」と怒っていた。このような組織で獣害研究をしていたO氏は本庁に異動したが、退職前に森林技術センターに戻ってきた。上からの命令に従って懸命に仕事をされていたが、平社員のままだった。戻ってこられたときには、外でタバコを吸っては、ため息をついておられた。2020年1月22日、O氏は、山陰線で痴漢を繰り返した容疑で逮捕され、退職された。京都府組織で獣害に関わった職員は精神的に不安定となる事例が多く、睡眠薬を大量に服用して長期入院した事例もある（もちろん組織的に隠蔽された）。都会にいる人の素人考えによって現場職員が振り回されて潰されている現状を知っているのも私だけかもしれない。私は、命令を受けても「そんな無駄な仕事はやらない」と断れるが、そのような役人は少ない。筆者は「ジャーナリスト」と自称しながら、重要な情報に触れていない。ジャーナリストとは、一般の人が触れることができない情報を掘り出す仕事である。本気で森林ジャーナリストになりたいのなら、私から話を聞くべきだ。ここに書けない話は他に山ほどある。

【105～106頁】ニホンオオカミは、通説では1905年に奈良県東吉野村鷲家口で最後の1頭が捕らえられて滅んだとされる。正確に言えば、この1頭を最後に発見されていないのだ。実は、その後も目撃情報や捕獲例はいくつかある。戦後になってからオオカミと似ている動物が捕獲された記録もある。だが確実にニホンオオカミと言えるものは、東吉野村が最後なのである。その個体はアメリカ人の標本収集家マルコム・アンダーソンに買われて、現在は毛皮と頭骨がイギリスのロンドン自然史博物館に保管されている。一方でエゾオオカミは、1895年に函館の毛皮商が毛皮を数枚扱ったという記録を最後に姿を消している。最後の捕獲がいつかもわからず、ニホンオオカミ以上に謎の絶滅を遂げている。ただ北海道では大々的にオオカミ駆除が行われていた。1877～88年までの間だけで1593頭の

駆除が記録されている。実態は、その数倍だろう。また同種が生息していたサハリンや千島列島でも同じ頃絶滅したとされている。激減理由は、はっきりしてない。とくにニホンオオカミは、江戸時代後期には急減し始めていた。狂犬病やジステンパーが蔓延したといわれるが、正確な原因は謎のまま。

【コメント】悪魔の証明 (devil's proof) とは、証明することが非常に困難な事象を悪魔に例えたものをいう。日本にオオカミがいることはオオカミを見つければ証明できるが、日本にオオカミがいないことを証明することは不可能である。マタギをやっていた I 氏は「芦生には戦後もオオカミがいた。芦生でメスの猟犬を木にくくりつけておくと、そのメスは妊娠し、猟犬として優れた子犬を産んだ」と言っていた。これが本当なら、美山町には少なくとも 50 年前にオオカミがいたことになる。

【107～108 頁】分類上はともかく、オオカミは偶蹄類を主に捕食することが知られている。ところが絶滅したため、シカを捕食する動物がいなくなった。これがシカが増えた理由だという。この説に対する回答は、簡単だ。オオカミがいた江戸時代でもシカは非常に多くて獣害も苛烈だったのだ。この一点で獣害抑制にオオカミは役立っていなかったと証明できるだろう。さらにオオカミが減んだ後も長くシカは増えなかった。ようやく増加が報告されるのは 1980 年代。そこには 80 年以上のずれがある。オオカミの生息とシカの数に関連性は見られない。また最初からオオカミが生息してない屋久島におけるヤクジカの生息の変動も説明できない。それにオオカミがイノシシを捕食するのは難しいだろう。非常に強力な牙を持つ相手だからだ。クマにいたってはオオカミがかなう相手ではないだろう。とくにニホンオオカミは、成獣で体重が 15～20 キロだったが、ツキノワグマはその数倍だ。好んでクマやイノシシを獲物に狙うとは思えない。獣害全般の抑制にはつながらないのである。なおニホンジカも体重 70 キロ以上、エゾジカなら 150 キロ以上の個体は珍しくないし、足も速い。猟犬がオスジカに後ろ足で蹴られて大怪我した例もある。襲うとしたら幼獣が中心か、あるいは群れをなして襲撃しないといけない。いつもシカを捕食しているとは考えにくい。たまに食べられるご馳走ではなかったか。

【コメント】筆者は、小さな動物が、大きな動物を駆逐してきた歴史を知らない。恐竜絶滅後、北アメリカでは肉食巨鳥のディアトリマ (ダチョウのような鳥で体重 200kg) が地上の覇者になった。アジアには巨鳥がおらず、哺乳類のハイエノドント (犬のような獣で体重 5kg) が地上の覇者になった。恐竜絶滅の 1000 万年後、急激な温暖化によってアジアと北アメリカをつないでいた陸橋の氷河が溶け、自由に行き来できるようになった。その結果、集団行動を得意とするハイエノドントがディアトリマを駆逐し、地上は、ようやく哺乳類が支配するようになった。

オオカミは、集団で獲物を仕留める。大きなクマやシカ、イノシシは、一匹のオオカミでは仕留められないが、集団だと仕留められる。弱っている個体なら、集団で追いかけ回して簡単に仕留めることができる。子グマや子ジカ、ウリボウは、オオカミにとって格好の餌である。子供が食われては困るクマやシカ、イノシシの親は、オオカミから逃げるし、場合によってはオオカミと闘う。筆者は「食うため」だけに着目しているから「オオカミは大きな獣は食わないので、獣害の抑制には無関係だ」と断定している。オオカミや野良犬がいると、獣は逃げる必要が増え、「食うこと」と「繁殖」に専念できなくなる。だから

ら、オオカミや野良犬は、獣害の抑制につながる。江戸時代にオオカミがいたのに獣害が激しかったのは、今よりも獣が多かったからであろう。オオカミが絶滅した後、80年ほど獣が増えなかったのは、人がオオカミの役割を担っていたからであろう。オオカミが生息しない屋久島では、野良犬がオオカミの役割を担っていたのであろう。オオカミの増減だけで獣の増減は説明できないが、かといって「オオカミの影響はない」と考えるのは間違いだ。

【110 頁】以前はイヌを放し飼いにしていたから、獣害が少なかったという意見もある。しかし、シカの頭数増加の説明にはならないだろう。それに現在の山野には、多くのノイヌがいて、すでにオオカミの生態的地位を占めている。それでもシカは増え続ける。絶滅したニホンオオカミに憧れを抱き、その復活を望むのは、「恐竜を現代によみがえらせてい」という映画の中のロマンと同じレベルの発想である。

【コメント】オオカミを放しても意味が無いという筆者の指摘は正しい。しかし、筆者は、40年前、野良犬や放し飼いの犬が多く、それが獣害を防止していた事実を知らない。美山町で、シカによる下層植生の食害程度を調べた結果、飼犬が少ない集落ほど食害程度が激しかった。犬の減少は、獣害の増加に大きく影響している証拠である。そもそも「現在の山野には、多くのノイヌがいて、すでにオオカミの生態的地位を占めている」とはどこの地域なのか。多数のノイヌがうろつく地域など、日本には、もうないはずだ。

【111 頁】これまで野生動物が増えた理由の仮説を紹介してきた。そして、いずれも否定すべき事実があり、決め手に欠くことを記した。それぞれの要因は生息数に多少の影響を与えるだろうが、根本的な増加原因を説明できないのである。では、何が野生動物を増やしたのか。決定的な原因を示すのは難しい。だが、確実に言えることがある。それは餌が増えたことだ。餌がなければ、仮になんらかの理由で生息数が増えても、その個体は生き延びられず繁殖もできない。増え続けるのは、十分な餌が恒常的に存在することということだ。もし山野の植物が繁茂して量が増えたら、草食性や雑食性の動物にとって餌が豊富になったと言えるかもしれない。そして草食動物が増えたら、肉食動物の餌も増えたことになる。いわば野生動物は飽食の時代を迎えたのではないか。

【コメント】筆者は、野生動物が増えた原因として挙げられてきた「地球温暖化」「ハンターの減少」「オオカミの絶滅」について、その影響を否定した。そして、野生動物が増えた要因（獣害の増加要因）を「餌が増えたからだ」と断定した。これは、この本の骨子であるが、間違っている。シカは、千種以上の植物を食べるのだから、そもそも、日本では、シカにとって餌は常に豊富に存在してきた。葉虫にとって、樹木の葉は無尽蔵に存在する餌だが、かといって葉虫は一方向的に増えてたりしない。一定の個体数に達すると、病気や天敵の影響を受けてクラッシュする。シカが増えるのは、餌が増えたからではなく、安全な場所が増え、「逃げる」必要がなくなり、「食うこと」と「繁殖」に使える時間が増えたからだ。この仮説を証明するため、美山町で、シカによる下層植生の食害程度を調べた結果、飼犬が少ない集落ほど、また、獣を追い払う就農者が少ない集落ほど、食害程度が激しかった。1970年代に野良犬が駆逐されてシカが増え始めた。1980年代の耕地整理、1985年のプラザ合意などで就農者が減り、里は、奈良公園のようにシカにとって安全な場

所になり、さらにシカが増えた。そこに決定的に影響を与えたのはダイオキシン問題による「野焼きの禁止」である。1997年、シカが怖がる煙の臭いが人里から消えさり、シカにとって里はより安全な場所になった。だからシカが増えた。都会で暮らしていても、このことに気付くべきである。気付かないのは、知識偏重の受験の訓練のような教育を受けたせいだろう。知識偏重で育った人間が、獣に関する学者や役人、ジャーナリストになっているうちは、日本の獣害は解決しない。

【111～113頁】具体的に植物性の餌が増えたかどうか検証してみよう。まず奥山はどうか。本来の奥山は天然林に覆われていたが、現在は多くが人工林になった。植えられたのはスギやヒノキ、カラマツなどの針葉樹。一般に針葉樹は餌となる実を付けない。それに林内は暗くなり下草も生えない。だから「奥山の多くを人工林にしたから、野生動物の餌がなくなった」と主張される。そして「野生動物が増えたのではなく、餌のない奥山から餌を求めて里に下りてくるのだ」と解釈するのだ。しかし、私は「人工林に餌がない」という主張に、かなり疑問を持っている。本当に人工林をよく観察したのか。私は全国の林業地を見て歩いているが、意外と絵に描いたような「林内は暗くて草1本生えない」ところは多くない。スギ林はスギだけ、ヒノキ林はヒノキだけしか生えていないと思込みがちだが、そうでもない。しっかり管理されている人工林の場合、植えて20年も経てば低層は草や低木が茂り、中層も広葉樹が入り枝を広げている。定期的の間伐を実施して林内に光を入れるようにするからだ。スギやヒノキが高く伸びた後なら草や雑木に被圧される心配もない。むしろ林業家は土壌を豊にするために草を残す。草がないと、降雨で土壌が流出するからだ。「もし下草のない人工林を見かけたら、そこにシカが出没した証拠」と林業家は言う。一方で手入れ不足の人工林はどうか。たしかに密生して暗くなり草が1本も生えてない荒れた人工林もあるにはあるが、だが、多くの放置林は、スギやヒノキが枯れて倒れ、ギャップ（林内の開けた空間）をつくる。そこに広葉樹が侵入して来る。とくに若年時に数回間伐された後に放棄された山は、雑木や雑草が繁茂しやすい。それがスギやヒノキを被圧しているから「荒れた」といわれるのだ。しかし繁った雑木は、動物の餌にもなる。放棄された人工林が、その後針広混交林に移行しているところも多くある。そんな森は決して不毛の砂漠ではない。広葉樹林と比べると少ないかもしれないが、野生動物に十分な餌と隠れ家を与えている。また人工林では、森林整備という名の間伐・除伐が行われる。密生した植林木を間引きしたり、合間に生えてきた広葉樹などの雑木を伐採したりする作業だ。しかし、切り倒せば高みにあった樹冠部分が地面に落ちる。幹は利用するために搬出することもあるが、梢や枝葉はその場に切り落として残す。これがシカなどの餌となる。また切り開いて地面まで光を入れたら草や稚樹が生えるから、これも格好の餌の提供だ。広葉樹の場合、切株から萌芽が出る種も多いが、この新芽もご馳走になる。作業員によると、間伐・除伐作業をしていると、現場近くにシカが現れ、伐倒を待っているそうだ。倒した木々の枝葉を早く食べたいのだろう。

【コメント】筆者は「奥山に針葉樹を植えたので、獣の餌がなくなり、餌がある里に出てきた」との考えが間違っていることには気付いている。京都府におけるシカ捕獲頭数（これはシカの生息数を反映）の推移と、植林面積の推移を同時に示すと「針葉樹を植えたからシカが増えた」という関係ではなく、むしろ「針葉樹を植えなくなったからシカが増え

た」という関係になっている。これは当然である。私の集落では、1980年代後半まで、かなりの面積に植林していた。植林した場所では、雪起し、枝打ち、間伐などの作業が行われる。大学生の頃から日役（入会林の管理作業）に参加した。林業を学ぶには絶好の機会、大学では教えてくれない「ヒモの結び方」も習得できた。18歳で初参加したとき、「もう酒は飲めるだろう」と言われ、現場で飲まされた。30人以上が参加していたが、休憩が多く、酒を飲んでのドンチャン騒ぎであった。集落周辺で、このような人間活動が継続されていたら、シカやイノシシは集落には近寄れない。1990年代になって植林しなくなり、林業作業ができる人も減り、入会林での活動は皆無になった。集落周辺で人間活動がなくなったから（＝植林が減ったから）、シカやイノシシが集落に近寄るようになった。

22歳で就職したが、最初の勤務地は、京都府林業試験場夜久野分場であった。実家から90km近くも離れていたのも福知山市内の独身寮を借りた。その頃、京都府では、夜久野町でしかシカ害はなかった。「夜久野町では人工林が多いのでシカ害が多い」と思っていた。だから、美山町でシカ害が発生するとは思っていなかった。しかし、2年後、和知町の京都府林業試験場に異動した頃から美山町でもシカを見るようになった。24歳の頃、1人で松茸を採りに行ってシカと遭遇した。松茸狩りは静かに行うものなので、シカの集団は私に気付かずに近づいてきた。オスが大きくて怖かった。慌てて、くぼみに寝転び、落ち葉をかけて身を隠した。これは失敗だった。シカの集団は私に気付かず、どんどん接近してきた。あまりにも近く、驚かせてしまったら、攻撃される可能性があるので、ひたすら息をひそめた。ハラハラしたが、その時、美山町でもシカ害が発生すると思った。

化学肥料がなかった頃、刈敷（かりしき）が行われていた。刈敷とは、肥料となる雑草を山などで刈って、畑に撒く作業である。東京から山村に嫁いだ母は「刈敷が最もしんどい作業だった」と言っている。撒いた雑草は、シカの格好の餌であるが、母が嫁いできた昭和30年代、撒いた雑草を食べるシカはいなかった。そもそも、シカが少なかったのだが、シカがたくさんいたとしても、田畑に撒かれた草を食べるシカはいなかったはずである。人間でも、美味しいご馳走があっても、その餌を得るのが危険なら食べない。シカも同じで、シカに危害を加える人が大勢いる場所の草など食べない。筆者は、動物（とくにシカ）の行動にとって「安全かどうかが重要である」という基本を理解していない。

アリやハチ、シロアリなどは真社会性の暮らしをしている。人間のような雌雄が家族をつくって子育てする亜社会性でも世代は重複するし、共同で子育てするが、真社会性のような繁殖に関する分業はない。アリは、ひらすら卵を産む女王と、繁殖しないワーカー（働きアリや兵アリ）がいる。亜社会性が真社会性へと進化した理由については、さまざま説がある。それを解明するため、ゴキブリ（ほぼ全て亜社会性）とシロアリ（ゴキブリが進化した動物で全て真社会性）が研究されてきた。私は、カシナガの飼育に成功し、カシナガが真社会性に近い暮らしをしているという驚くべき生態を解明した。そして「十分な餌」と「安全な巣」の2条件が揃ったときに真社会性に進化することに気付いた。学会で、この説を発表したら、動物の社会性の権威である東大の松本忠夫教授の目にとまり、2003年5月28日、東大で講演することになった。その場には、アブラムシにも真社会性の種がいるという大発見をした青木重幸博士もいて「君は、とてつもない発見をした。ネイチャーに投稿すべきだ」と言ってくれた。その後、欲が出たのか、カシナガの飼育に成功しても、木の中での行動は撮影できなかった。透明のビンの中での飼育に成功したのは努力

の賜であるが、ビンの中での生態を鮮明な動画として残せたのは奇跡であった。ビンによる飼育に 30 本ほどで成功し、うち 1 本だけで、カシナガの孔道内が透明のガラス越しに観察できた。70 万円以上もする実体顕微鏡で、巣の中でのカシナガの行動を観察したところ、幼虫が巣を掘り、菌を培養し、卵も運搬していることが判った。さらに、真社会性の昆虫に見られる幼虫同士での栄養交換もしていた。「これは凄い発見をした。学会で発表しよう」と思ったが、動画を残さないと、誰も信じてくれないことに気付いた。そこで、大慌てで使わなくなった画像解析装置を分解して CCD カメラを抜きとった。実体顕微鏡には、真ん中に筒があり、その筒に CCD カメラがぴったり収まったので、ガムテープで固定した。CCD カメラから出ている端子を、Sony ハンディカムを分解して挿入したところ、ハンディーカムのモニター画面に動画が現れ、録画ボタンを押したら撮影できた。キーエンスという大企業の技術者にも来ていただいて再現も試みたができなかった。京都大学や名古屋大もチャレンジしたが成功しなかった。嘘みたいな話だが、10 時間以上の鮮明な動画が証拠として残っている。これらの動画を見た人は、研究者でなくても、ビックリする。これらの動画は、ネイチャー投稿を狙っているので一部しか Youtube にアップしていない。
<https://www.youtube.com/watch?v=hQKm5Q6PqJ4>

【114～115 頁】さらに山間部の道には、意外な餌が大量にあった。斜面に草が繁っているのだ。道路（農道、林道、作業道を含む）を通す際、山肌を削ると新しい斜面ができるが、そこに光が当たり、草が生えるのだ。よく見ると、生えているのは外来牧草が多い。牧草の種子を土留め用に斜面に吹きつけることもあるからだ。家畜の餌として改良された牧草は、冬も青々と繁って栄養価も高い。当然、シカは好むだろう。また、最近では人工林の皆伐が進んでいる。一定面積の山の木を全部伐ってしまう行為だ。ときに数十 ha も裸地になる。そこは日当たりもよく、雑草が繁茂する。シカやカモシカにとって食べ放題の餌場だ。跡地に植林したら、その苗も美味しい餌だろう。次に里山はどうか。近年人の手が入らなくなり、荒れているとされる里山だが、農地の耕作が放棄されて「荒れる」と、雑草や雑木が茂る。実を付ける草木も多くあるから、むしろ餌は増える。また土砂崩れや開発行為で一度地表を攪乱されたような土地にはクズの繁茂が目立つが、その地下茎は豊富なデンプンを含んでいる。いわゆる葛粉の原料だ。以前は重要な林産物だったが、いまや掘る人もほとんどいない。ほかにヤマイモなどもよく見かける。どちらもイノシシは掘り返して食べる。またササが繁茂すれば、シカの重要な餌になる。竹林が野放図に広がっていく問題も、春に出るタケノコがイノシシやクマの餌となり（野生動物）を喜ばす。人間にとって「荒れた」と感じる山や休耕地が、野生動物の豊富な餌場となっているのだ。最近では山を切り開いてメガソーラーを築くケースも増えているが、そうした場所もシカの餌場にもってこいになっている。

【コメント】筆者は、林道や林道法面、耕作放棄地、竹林などが獣たちの餌場になっていることに気付いている。しかし、上空から農山村を見たことがないためか、もっと重要な餌場に気付いていない。日本のゴルフコースは 1960 年代半ばに 500 施設ほどしかなかったが、わずか 30 年で 5 倍に増えた。現在、約 2400 コースで、総面積は約 27 万 ha、神奈川県よりも広い面積になっている。餌の増加を指摘するなら、急激に増えたゴルフ場を指摘すべきだ。2005 年以降、防災ヘリや府警ヘリに搭乗してナラ枯れを調査してきたが、ゴルフ

フ場が増え、荒れ地が増え、竹林が増えている。特に、廃屋が増えている。「廃屋が多い集落ほど獣害が激しい」という事実気付いているのも、私だけなのかもしれない。

筆者は「ゴルフ場は自然がいっぱい」という摩訶不思議なタイトルの本を出版している。ゴルフ場で講演したこともあるし、ゴルフ場関係の雑誌に原稿を書いたこともある。ハッキリ言ってゴルフ場関係は、講演料や原稿料がバカ高い。筆者は、ゴルフ場が獣の餌場になっていることに気付いているのに、食うために、指摘しなかったのだろうか。

【116 頁】いまや作物は質によって選別し、弾かれた作物が農地に残される。だが、それらは野生動物の格好の餌となる。また、農地に生える雑草も想像以上に多かった。冬だというのに、草がいっぱいだ。冬でも枯れない草は意外と多い。滋賀県の農業研究所で、田畑の雑草の重量を調べた記録があるが、1 アールで約 30kg になったそうだ。加えて水田では早生品種の栽培が増えて、9 月には稲刈りをする。すると、稲の切り株からヒコバエが生える。11 月頃には、背丈は低くても穂が伸び、米が実る。それが 1 アールに茎葉は 10kg、米粒は 5kg 近くあったそうだ。

【コメント】筆者は、近年になって獣の餌になる植物が増えたことを熱心に書いている。しかし、獣が少なかった 60 年前に比べて、獣の餌になる植物は増えていない。60 年前は除草剤もなかったし、高性能な草刈り機も無かったので、草は多かった。化学肥料がなかったので「刈敷」によって大量の餌が里に持ち込まれていた。栗園は、獣の餌の宝庫であるが、京都府の栗園面積（役所のデータなので正確ではないが）は、1977 年に 1500ha を超えていたが、2013 年には 200ha 以下になっている。

獣害コーディネーターも「餌となる野菜を放置するな」と言っているが、里を、獣にとって危険な場所に戻さなければ、いくら餌を少なくしても獣害は減らない。餌が少なければ、それだけ獣が餌を探し回る時間が増え、逆に農作物が食われて獣害が増えかねない。獣害コーディネーターは、獣の研究者であることが多い。こうした人達は、獣害を減らすために、獣の数を把握したり、行動範囲を知ろうとするが、それは役に立たない。虫害を減らすために、害虫の数を把握したり、害虫の行動範囲を知ろうとする学者は少ない。そんな無駄な事をするよりも、虫害を受けた植物の状況を観察するほうが目的が達成できる。虫害対策（農薬散布、フェロモン剤の設置、トラップでの捕獲など）の前後で、虫害の程度を把握すれば、対策に効果があったかどうかは判断できる。獣害でも、獣の数や行動範囲を把握するよりも、獣害の程度を把握し、対策の効果を評価すべきである。そもそも、上述したように、獣の数や行動範囲を把握するための研究が、獣害を助長している可能性がある。クマは絶滅危惧種で、それほど増えていないが、里に出てくるクマの数は 50 年前に比べて 10 倍以上になっている。学者は「クマが激増した」と言うが、クマの数が 10 倍に増えたとは考え難い。クマが里に出てくるのは、里にご馳走が有るからでもない。人（とくに学者）が、餌で誘引して捕獲するようになり、クマを里に近づけた可能性がある。マタギは、里の（美味しい食べ物の）香りを、クマが暮らす奥山に持ち込まぬように注意していた。しかし、学者は、ハチミツやリンゴ、ヌカを使ってクマを誘引捕獲し、里にご馳走があることをクマに覚えさせた。里は過疎化で人が減り、焚き火をしなくなり、犬や家畜もうろつかなくなった。里が安全になった中で、クマが里の魅力を知れば、里に出てくるようになるのは当然である。

著者は「日本では獣の餌が増えたので獣が増えた」と主張している。読者（学者や役人）も「そうだ」と思うのが現状だ。ナラ枯れでも、公費をつぎ込んで防除事業を展開しているが、間違った方法が実施され、ナラ枯れを拡大させているケースは多い。ナラ枯れを研究し始めた頃は、私のように農山村で暮らしている人も研究していたが、今は、そんな人はいない。ナラ枯れを理解している学者や役人は少なく、ナラ枯れを抑えた現場は、私が関係した現場と、石川県の兼六園くらいだ。

【116～118 頁】最近では”草食系クマ”が増えているという。恋愛に奥手なのではなく、ベジタリアンという意味だ。動物性よりも植物質のものを好んで食べているというのだ。明治時代のヒグマの骨に含まれる窒素同位体元素の比率から、その個体が食べていたものを調べたところ、エゾジカやサケ、昆虫類などの動物性タンパク質が6割以上だった。ところが最近のヒグマでは5%程度に落ちていた。増えたのは、フキやヤマブドウなどの草本・果実類なのだという。イノシシの胃袋を調べても最近では草ばかりらしい。雑食動物が草食に偏することで、十分な餌の確保に成功し、繁殖もしやすくなったと考えられないだろうか。この一方で、肉食系クマにも有り難い餌が提供されている。イノシシやシカの駆除が進められているが、仕留めた個体を持ち帰るケースは1割に満たず、たいてい現地に埋めるか捨てられる。その死骸がクマの餌になる事例が報告されている。クマが生きたシカやイノシシを襲うことはそんなに多くないが、皮肉なことに人が駆除したおかげでクマの餌になっているわけだ。栃木県でツキノワグマの体毛から餌の炭素と窒素の同位体比率を調べたところ、5歳以上のクマはシカを餌にしていた割合が高く、とくにオスにその傾向が強かった。季節は夏が多かったらしい。この時期は、有害駆除が多く行われている。奥山にも里にも餌がたっぷりある。一方で人は少なくなり、人里に侵入しても追い払おうとしない。そして人間がシカなどの肉を提供してくれる。これでは野生動物が餌に困る可能性は低い。生息数を左右する要因は多様だろうが、餌の量は重要だろう。

【コメント】「雑食動物が草食に偏することで、十分な餌の確保に成功し、繁殖もしやすくなったと考えられないだろうか」と問うているが、間違いである。明治時代、オオカミ、イヌ、キツネ、猟師が多く、クマは常に警戒しなければならなかった。今は、クマにとって安全な場所が増え「食うこと」と「繁殖」に専念しやすくなった。危険が多いときは「食うこと」に費やす時間を短縮するために栄養価が高いエゾジカやサケを食ったが、危険が少ない今は、時間をかけて栄養価が低い植物を食うことができる。ツキノワグマは、狙った食べ物を1日かけて食う性質がある。栗樹に登ってクマ棚を作って栗を食うのは1日仕事だ。アケビも、1日かけて食ったと思われる現場を見たことがある。クマ剥ぎは、スギの皮を剥いて内樹皮を食うためだが、スギ植林地に人が来ず、安全であるから1日かけて食べることができるようになったのだろう。50年前、クマ剥ぎが少なかったのは、スギ植林地には、人がしょっちゅういたので、クマが栄養価の低いスギ内樹皮を食う時間が確保できなかったのだろう。

クマにとって餌が最も不足する季節は夏である。だから、クマは、雪崩が起こる多雪地帯に多い。雪崩が頻発する場所には木が少なく、人間にとっても麦などを栽培できる場所であるため「菜場」と呼ばれてきた。菜場は、夏にイチゴなどが生育するため、クマにとって夏場の貴重な餌場になっている。クマが、夏に死んだシカを食うのは、有害駆除が多

いためだけでなく、夏場の餌不足のためだろう。いずれにしても、筆者は、深く考察せずに推察している。とくに「生息数を左右する要因は多様だが、餌の量は重要だろう」との推察は、この本の骨子であるが、間違っている。「生息数を左右する要因は多様だが、安全かどうかは重要だろう」と書くべきだ。私が暮らす限界集落では、ほんの 60 年前には 300 人以上が暮らしており、小学校に通う子供は 50 人以上もいた。今は 100 人ほどが暮らしていることになっているが、半数は高齢者施設や病院にいたので、実際には 50 人以下しか暮らしていない。小学校に通う子供は、私が通学していた 40 年前に 20 人以下になり、息子が通学していた 20 年前に 5 人以下になり、10 年前に 2 人になり、その後、小学生はいなくなった。美山町全体で同様のことが起こっているため、5 つあった小学校のうち 4 校が、2016 年 3 月をもって閉校となった。店やバスは減り、銀行支店が閉鎖され、病院の存続も危ぶまれている。同様のことはスペインでも起こっていて、廃村になった村が売られている。病院も学校もバスもない過疎化が進むスペインの農村部で暮らす人々は、地方軽視の政治に絶望し、自分たちの代表を国政に送り込もうと「空っぽのスペイン」という政党を立ち上げ、それが躍進している。日本では、過疎地は「空っぽ」にならず、代わりに獣が空白を埋めている。私が暮らす集落では、20 代以下は 1 人しかおらず、60 代以下の大半はサラリーマンで、多くの時間を集落外で過ごしている。集落での人間活動量は、60 年前を 100 とすると、40 年前に 20 になり、今は 5 以下である。しかも、燃料革命によって、オコドサン（煮炊きをするカマドがある場所またはその場所を守る神様）と五右衛門風呂がなくなり、1997 年には、ダイオキシン問題で焚き火が禁止された。50 年前に野良犬が駆逐され、牛の放牧もなくなった。30 年程前から飼い犬も繋ぐようになった。農山村の過疎化で人による追い払いが減り、焚き火が減り、野良犬、飼い犬、家畜もうろつかず、里が獣にとって安全になった。私が暮らす集落では、60 年前の獣に与える恐怖指数を 100 とすると、40 年前に 10 になり、今は 0.1 以下で、奈良公園よりも小さな値になっている。都会で暮らす人には想像もできないだろうが、「里が安全になった」この一点だけで、獣害が増えた理由は十分に説明できる。

【121～122 頁】もともとジビエとはフランス語だが、狩猟で得た野生鳥獣の食べられる肉を指す。飼育した家畜の肉の対語でもある。欧米ではマガモやウズラ、キジ、ライチョウなどの鳥類、ノウサギ、シカ、イノシシ、クマなどの哺乳類が主な獲物だろう。日本でも古くは同じような鳥獣を狩りの対象としていたが、肉は日常的な食べ物ではなかった。ウシやウマなどの家畜も、農作業や荷役用でかわいがると食べられなくなる。だから狩猟で肉を得るのは山間部の一部の人に限られていた。そして肉を食べない理由に、生物の生命を絶つことを禁止する仏教の「不殺生戒」の戒律を掲げた。一方で言い換えも行われた。たとえばイノシシの肉は山鯨と呼ぶ。当時クジラは魚扱いだったから山のクジラも食べてよいというこじつけだろう。ウサギを一羽二羽と数えるのも鳥扱いにしたのだろう（ここで魚や鳥は殺生と感ぜない点は触れない。忌避の対象は四つ足の獣だったのである）。いずれにしろ狩猟は、基本的にジビエを得るための行為だった。獲物を撃つ、捕らえることの興奮もあるが、仕留めた後は肉を得るのが楽しみだったのだ。そこに農業の広がりとともに、獣害駆除という新たな目的が加わってくる。実際に日本では「獣害として駆除した個体をどうするか」という問題から、ジビエが注目を集めている。政府もジビエ利用拡

大の旗をふり、各地で事業化の動きが目立つ。仕留めた獲物をそのまま葬るのは「もったいない」という意識があるほか、駆除した個体をジビエとして販売したら、多少とも利益を生み出せる。それは駆除の励みになるだけでなく、獣害対策をコストからビジネスに変えることも可能となる。そうなれば補助金を減額できるかもしれない。加えて、ジビエ・ビジネスを農山村の産業とすることで地域活性化に寄与させる...という発想もあるだろう。これまでジビエとして一般的だったのは、イノシシの肉である。家畜のブタの先祖であるし、ポタン鍋に代表されるシシ肉の料理法も知られていた。そうした料理店もそこそこある。それにイノシシは体重の 8 割が食肉になり効率がよいという声もある。

【コメント】大化の改新（645 年）後、田畑と民は国家のものとなり、民には口分田が与えられ、税を納めた（班田収授法）。しかし、税を払わない人（特に定住しない狩猟民）が多く、為政者が目指した中央集権国家は安定しなかった。天武天皇（673～686 年）が聖徳太子と組んで仏教を奨励したのは、仏教の十戒の最初が「不殺生」だったことが一因だろう。天武天皇は、民から税金を集めるために狩猟を禁じた可能性がある。なぜなら、猟師は、定住しなくても生きていけるので税を払う必要が無い。為政者は、全ての民を農地に縛り、全員から徴税したかったが、猟師（や山賊）は武器を持っているので、「税を払え」と役人が怒ってきても、黙って言うことは聞かなかった。だから、仏教を奨励して「不殺生」を徹底しようとした可能性がある。日本の為政者が、一般民を農民にしたかった証拠は「百姓」という言葉の使い方である。「百姓」は、韓国や中国では「一般民」という文字本来の意味として使われているが、日本では「農民」という意味になっている。穢多（えた）とは、中世以前からある身分制度の中の身分の一つで、仏教や神道における「穢れ」の観念からきた「穢れが多い仕事」または「穢れ多い者が行なう生業」の呼称である。病死した牛馬の処理、獣皮の加工、屠殺など、四つ足に関する仕事は「穢れが多い仕事」とみなされた。「士農工商穢多非人」の身分制度を設けた目的として「農民を支配するために農民よりも下の階級をつくった」と習ったが、それよりも「四つ足」を賤しいものとして、狩猟を止めさせることが主目的だったように思われる。

官僚組織を維持するためには安定した税収が必要である。そこで、天武天皇は、仏教を奨励し、大宝律令（701 年）を施行して天皇中心の中央集権を目指した。戸籍で人民を把握して、税（租・庸・調）と軍役を課した。しかし、定住しない者が多く、口分田は荒れた。天武天皇の孫である長屋王（684～729 年）は、先進国（ローマ帝国や中国の唐）が、「全ての道はローマに通ず」の言葉のとおり、道を造って徴税していることを知り、真似をして広い道を造った。例えば、美山で捕獲したイノシシを京都市内に運んで売ろうとしたとき、京都市内の入り口に関所があり、そこで「このイノシシは 50 万円の価値があるので、消費税 10 万円を払っていけ」という具合だ。しかし、日本は、地形が急峻で山道が多い。川や海も移動手段になる。民は徴税を逃れるために長屋王が造った道を通らずに移動した。そこで、切羽詰まって三世一身法（723 年）を施行した。三世一身法では、開墾した土地は、自分と子供と孫のものになるが、当時の 3 世代の期間は 50 年ほどで、これでは民の墾田意欲は向上しなかった。そこで、20 年後、墾田永年私財法（743 年）が施行された。すると、有力な豪族が人を雇って私有地を増やし、それが荘園となって武士が誕生した。荘園から得た税の一部を荘園警護の武士に与えるという主従関係が生まれた。中央集

権国家は崩壊し、豪族が群雄割拠する時代となった。鎌倉政権は、ほぼ日本を統一して各地に国司を置いたが中央集権国家とまでは言えなかった。織田信長が日本統一を目前にして暗殺され、豊臣秀吉が引き継いだ。その政権を徳川家康が奪った。家康は、徳川の世が続くようにするため、各国の大名に対して、「参勤交代」「国替え」「お家潰し」も行って、大名の力が増すのを防いだ。日本が真の意味で中央集権国家になったのは明治維新以降である。明治政府は、農業だけではなく商工業にも力を入れ、殖産興業によって富国強兵を達成した。兵隊は強力となり、猟師にも勝てる力を得た。だから、欧米人との体格差を埋めるために狩猟を奨励し、獣肉を食うことも奨励した。しかし、民が食ったのは鋤焼き（牛鍋）くらいだった。鋤焼きといえば牛肉を想像するが、食ってはダメな獣肉を、隠れて農具の「鋤」の鉄の部分で焼いたことが語源だ。明治維新までは、猪、鹿、馬、鶏は食うことが禁止されていた。だから、猪はボタン（または山鯨）、鹿はモミジ、馬はサクラ、鶏はカシワと呼んだ。ヤマバトは食うことが許されていたので、四つ足のウサギは、山中で皮を剥いで持ち帰った。「その肉はなんだ」と役人に問われたときに「ヤマバトだ」と言い張るため、ウサギを「1羽、2羽」と数えることにした。美山では、オオサンショウウオは「ハダカス」と呼ばれていた。だから、美山の人は、オオサンショウウオが天然記念物になっても「ハダカス」だと言い張って食べていた。捕獲したオオサンショウウオを歩かせて、右足から歩き始めた種は「オオサンショウウオ」、左足から歩き始めた種は「ハダカス」と判定し、ハダカスだけを食べた。こうしておけば警官に注意されても「ハダカスだ」と言い逃れができた時期があった。それほどオオサンショウウオは美味しいらしい。

著者は「狩猟はジビエを得るための行為だった」と書いているが、クマを捕る主目的は肉じゃなく、熊の胆（くまのい）だった。クマの胆嚢を乾燥させて造られる熊の胆は、古来より中国で用いられ、日本では飛鳥時代から利用されている。奈良時代には、越中で税の一種の「調」として収められていた。クマの脂は火傷の特効薬である。ポン菓子機で栗を焼いていたら、焼栗が釜から飛び出して左顔面を直撃し、けっこうな火傷を負ったことがある。医者がくれた薬は塗るとヒンヤリしたが、クマの脂は塗るとポカポカと暖かくなった。大火傷の場合は冷やさない。冷やすと血流が悪くなり、直りが悪くなって痕が残りやすくなる。血中成分が火傷を癒すからだ。そこで、医者がくれた薬だけでなく、クマの脂も塗った。半信半疑だったが、20日後、傷は綺麗に治った。なんでも実験したくなる性格なので、目立たない顎の下の一部にはクマの脂を塗らなかったが、そこは痕が残った。形成外科医も、クマも脂の効果に驚いていた。

【123～124頁】近年注目されているのがシカ肉だ。なぜなら獣害駆除でも、いまイノシシを抜いてシカがもっとも多いからである。すでにレストランでは、シカ肉料理がクローズアップされている。シカ肉はモミジと称されるように、赤身だ。高タンパク低脂肪、鉄分が多くて栄養価が高いと謳われる。ただ、脂身がないので多くの日本人の好みでないうえに、調理にも一工夫が必要だ。それに量も取れない（食肉になる部分は、シカ1頭の体重の3割以下とされる）。ジビエ流通量の統計はないが、鳥獣処理加工施設（食肉処理の認可を受けた施設）は、把握されているだけで2008年の42カ所から2018年の633カ所へと激増している。新しく稼働した施設の多くがシカやイノシシの肉を扱うと考えてよいだろう。ただ、駆除を含む狩猟で仕留めた獲物のうち、食肉になる割合は1割以下にすぎ

ない。仕留めることの難しさはさておき、その個体を食肉にするまでには多くの関門があるからだ。その点は後述したいが、ジビエの供給は安易には進まないことを知っておきたい。このように、日本でのジビエ普及は、まだまだ敷居が高いのが現状だ。私自身は、ジビエを初めて食した記憶をたどると、学生時代に訪れたボルネオ（マレーシア）の田舎町でたまたま入った小さな小汚い料理屋を思い出す。メニューなどないから、片言の英語で肉とか野菜の料理を出してくれ、と伝えた。すると出てきた肉の炒め物が抜群に美味しかった。何の肉かと聞いてみると、シカ肉だったのである。だから今でもシシ肉やシカ肉などが並んでいたら、つい手にしてしまう。またジビエ料理専門店にも足を向ける。独特の味や臭いを嫌う人もいるが、それがジビエの醍醐味だ。ただボルネオの店の味に匹敵するジビエ料理には今も出会っていない。またノルウェーに行った際に、一般のレストランでシカ肉が普通にメニューに載っていた。そこでステーキを頼むと、これまた美味しかった。ヘラジカ牧場から供給される肉だったからだ。シカ肉といってもすべてがジビエとは限らない。すでに家畜化された肉もあるのだ。その方が安全性と安定供給が可能になるだけでなく、価格も抑えられるからだろう。日本のジビエ料理は、まだ一般的になっていない。基本的に日本人の好む肉は脂身が多いが、ジビエはたいてい脂身が少なく赤身が多い。もちろん価格も高い。「もったいないから食べよう」と気軽に言えないのである。

【コメント】この部分は、筆者の経験の少なさが露呈している。都会で暮らしてきたので美味しいジビエを食ったことがないのだろう。都会で普通の暮らしをしている人は、体験が少なく、物差しが少ないし、物差しの幅が狭い。山村で暮らしてきた私は、子供の頃からシカ、イノシシ、クマなど、いろいろな肉を食べてきた。都会では、そのような肉は売ってないし、食べられないだろう。ただ、都会の裕福層は、ジビエを好んで食べる。筆者は「ジビエは臭い」と書いているが、上等のシカ肉は牛肉よりも臭わない。ジビエを長く扱うと、牛肉を臭く感じるようになる。そもそも「ジビエは臭いから美味しくない」と考えることも間違いである。

北海道では、羊の肉（ジンギスカン）を食うし、観光客にも提供する。羊肉といってもラムやマトン、その中間のホゲット（西欧ではよく食べる）がある。ラムは、生後1年未満の永久門歯が生えていない子羊の肉で、臭いやクセがなく、味も淡白なので、観光客は、これを好む。ラムの中でも生後2~3ヵ月以内の母乳のみで育った羊の肉はミルクラムと呼ばれ、ほんのりと甘い香りがあるが、高級食材なので、観光客は食えない。マトンは生後2~7年ほどの永久門歯が3本以上生えている羊の肉で、独特の臭いがあり肉質も固めだが、旨味や脂がしっかりと感じられる。羊を食べ慣れている北海道の人は、ラムよりもマトンを好む。日本人が食べる肉（ウシ、ブタ、ニワトリ）は血抜きがうまくできているので臭みが少ない。シカやイノシシも血抜きがうまくできれば臭くなく、牛肉よりも美味しく感じることもある。

駆除されたシカやイノシシの9割りは、食われずに捨てられる。都会で暮らす研究者の中には「獣が重すぎて運び出すのが大変だから捨てられる」と考えている人がいる。2021年3月の日本森林学会で、捕獲した獣をワイヤーロープで引っ張り出す装置の発表があった。私は「そんな道具で引っ張り出したら、肉に傷がつき、血抜きできても味が悪くなる」と指摘した。筆者が140頁で指摘したように、暴れると打ち身になって鬱血して「蒸れ肉」になる。肉として利用するなら、短時間で乱暴に運搬する方法よりも、肉質が低下しない

運搬法を開発すべきである。具体的には、罠で捕獲しても暴れずに打ち身にならない方法の開発や、輸送時間が長くなっても腐敗しない方法の開発が待たれる。最近の研究者は、やたらとドローンが好きなのだから、捕獲した現場で解体・血抜きして小分けにしてドローンで運搬する方法を開発すればいいだろう。

筆者は「日本のジビエは脂身がないので多くの日本人の好みでない」と書いているが、大間違いである。2008年、宇宙船地球号という番組から「シカを取材している。番組に出て欲しい」と依頼された。NHK夜の深夜便というラジオ番組で「芦生の森から学んだこと」とのタイトルで5日間も話したが、獣害についても話したので、番組スタッフは、それを聞いて、オファーしてきたのだろう。https://www.youtube.com/watch?v=PLu_c78hhwI&t=28s 私は、よくテレビに出るので、目立ちたがり屋だと思われるが、私よりも適任者がいた場合は、その方を紹介する。このオファーに対しても「美山の腕利きの猟師を紹介する」と言って、鹿猟の名人であるT氏を紹介した。T氏は、数百mも離れた位置からシカをライフルで仕留める。できるだけ川に落ちるように仕留め、すぐに駆け寄り、一気に血抜きする。死の直前まで暴れていないシカなので血抜きが完全にできる。暴れると体温が上昇して、血が筋肉に回って血抜きが難しくなり、肉質が低下する。ブタでも、屠殺場に運ぶ際に嫌がって暴れた個体の肉は二流品になる。宇宙船地球号に出演したT氏は「お礼がしたい」と言って、銀座の名店に行くのと同レベルのシカ肉を譲ってくれた。それをワイン専門店に持ち込み、赤ワイン煮とローストビーフにしてもらった。嵐山吉兆の会長、お茶やお花の先生などの文化人にも食べてもらった。ジビエを食べた経験が豊富な文化人は、シカ肉だと判ったが、ジビエ未経験者は「こんな美味しい肉は初めて。美山の牛肉はこんなにも美味しいの?」と言った。そこで「シカ肉ですよ」と説明したら、ギョッとしてビックリされた。京都市内の料亭を貸し切ったジビエの会もやった。東京から社長も来たが、その方はスッポン、クマ、イノシシ、シカには一切手を付けなかった。そんなこともあるかと、美山の地鶏も用意していたので、鳥鍋も出してもらった。その社長は「ようやく精肉店の肉が食える」と喜び、参加者の笑いを誘った。京都の文化人も、ニタニタしていたが、二次会では「あの社長は文化度が低いな」と揶揄していた。

筆者は、ボルネオやノルウェーのジビエ料理を褒め「ボルネオの店の味に匹敵するジビエ料理には今も出会っていない」と書いている。それは、日本で美味しいジビエを食べていないからである。または、美味しいジビエに馴れておらず、ソースや香辛料で臭みを消した海外の料理が美味しいと感じただけかもしれない。日本の水（特に京都市内の地下水）はミネラルの含有量が少なく、素材の味や香りの邪魔をしない。だから、和食（特に京料理）は薄味である。海外でジビエを何度も食べた。美味しかったが、香辛料やソースの味がキツ過ぎて素材の味がわからないのが残念に思えた。海外のモンブランが洋酒の味が強く、栗本来の味が楽しめないのと同様である。シカ肉を提供したワイン店では、モンブランの味比べも行った。モンブランで有名になった京都市内の名店のモンブラン、コンビニ各社のモンブランを用意した。そして、私が育てた美玖里という品種の丹波栗を素材に、洋酒を使わずに作ったモンブランと比べた。予想どおり、丹波栗のモンブランが最も美味しいと評価された。ローソンのモンブランも、洋酒を使った高級店のモンブランよりも高い評価を受けた。マロングラッセの味比べも行った。デパート買った高級マロングラッセ3種と、私が育てた「ぼろたん」という品種の丹波栗で作ったマロングラッセとを比べた。

これは、洋酒を使わない丹波栗と砂糖だけのマロングラッセが圧勝した。そのマロングラッセは、NHKの朝イチでも取り上げられ、年間のベスト10に入る高視聴率を獲得した。

https://www.youtube.com/watch?v=nur6-_xhXxc

京都には、小泉純一郎や吉永小百合も通うイタリアンの名店がある。「そのシカ肉料理は、丹波地方でシカ肉料理を提供している人達が驚くほど美味しい」との噂を聞いた。2005年11月19日、クマに関するシンポジウムの後、その名店を、大学教授と訪れた。店に入ってすぐに大きな栗の板があり、その板にはキクイムシの食痕があった。私は「この栗板は素晴らしい。ヨーロッパでは、美しい虫の食痕がある板は高級品だ」と同行した大学教授に説明した。すると、それを聞いた店主が店内から飛び出してきた。「この板を褒めた日本人は初めてだ」と言った。私は「丹波栗の研究者。シカ害に困っている。この店のシカ料理が美味しい理由を教えて欲しい」と伝えた。すると店主は、食事後、地下のワインセラーで、私が産まれた1966年のワインを飲ませてくれた。ボジョレー・ヌーボ解禁日の直後で、ボジョレー・ヌーボも飲ませてくれたが、若いワインと熟成されたワインのコントラストに感動し、それ以降、ワインにはまってしまった。店主は、栗にも関心が高く、皮が簡単に剥ける「ぼろたん」が日本で開発できた経過も話した（の開発秘話を書けば長くなるので割愛する）。すると、4千年前のエジプトのレシピで作ったケーキも焼いてくれた。店主は「日本人は、醤油や砂糖については原料にこだわるが、塩については原料にこだわらない。ジビエの下ごしらえには海水塩よりも岩塩が適している」と教えてくれた。塩にも多くの種類があり、精製塩と天然塩に大別される。生成されていない天然塩は、ミネラルが豊富で旨みやコク、甘みをより感じやすい。日本では、天然塩の大半が海水塩で、食材本来の持ち味をじんわりと引き出すのに適している。しかし、欧米では、天然塩として岩塩もよく使われる。岩塩は、大昔に海だった場所が隆起するなどして海水が閉じ込められて結晶化したもので、海水塩よりも塩気がきつく、地中からのミネラルや有機物も加わって、産地によって色も変化する。店主は塩の収集家で、丹波のシカに適する塩を探しあてていた。

美味しいジビエを食べてきたが、中でも「King of オブジビエ」と称されるアナグマは格別であった。見た目はイノシシ肉に似ているが、ほとんどが真っ白な脂身で、その脂身は牛脂よりも甘かった。叔父のK氏は、我が家に来るとき、いつも上等の牛肉を手土産にしてくれた。それは必ず鋤焼きになったが、最初に焼く牛脂の固まりは、妹との争奪戦になった。アナグマは、その時に食べた牛脂よりも甘かった。筆者は、京都の名店のシカ肉料理やアナグマを食べてから、日本のジビエ料理を評価すべきだ。

そもそも、味は、食材や料理法だけによるものではない、器、体調によって味は大きく変化する。美味しいビールも紙コップだと台無しだ。満腹では美味しくないし、体調を崩していたのでは、そもそも食えない。美食家に会えば「この世で一番美味しい物は何ですか？」と聞く癖がある。その回答として、複数人が、クマ、スッポン、タコ、柿、栗、イチジクをあげた。中には「トラ」と言った人もあった。私は「野沢菜茶漬け」が1番で、ウナギが2番である。八ヶ岳に氷柱を登りに行き、大雪で閉ざされて2日間もひもじい思いをした。その下山時、野沢菜茶漬けを泣きながら食べた。満腹中枢が狂ってしまったのか、7杯もご飯を注文し、登山仲間から「もう食うな」と止められた。子供の頃、父から「お前は鮎を沢山捕ってくるが、ウナギは捕ってこない」と言われた。そこで、土用の丑

の日に、ムキになってウナギを探したら、大物に出会った。午後2時頃、長さ1mに迫る大ウナギを見つけ、深さ2mの水深でモリで突いた。しかし、大きすぎて引き上げることができず、ウナギが弱るまで、友達3人と入れ替わりでモリを4時間ほど抑えた。ウナギが少し弱ったので引き上げ、近くの老人にさばいてもらった。その老人は「こんな大きいウナギは初めて見た。由良川の主を捕ったな」と驚いていた。家に戻ったら、家族は、親戚から届いたウナギを食い終わっていた。フライパンにウナギをのせ、砂糖、味醂、醤油を使ってウナギを丁寧に焼いた。鰻重のタレが少し残っていたので、それを舐めて、同じ味になるようにした。どんぶり茶碗からはみ出す大きなウナギは脂が多く、美味しかった。その後、ウナギを焼くのが上手になり、大学の研究室で、学生が買ってきた中国産を焼く機会も多かった。野沢菜漬けもウナギも、空腹の中で食べたので美味しく感じた。味は、雰囲気によっても変わる。汚い部屋では美味しくないし、嫌な奴と食べても美味しくない。魚の内臓を原料とする塩辛は「酒盗」と命名されるほど酒に合う。韓国のチャンジャは、鱈の内臓の塩辛である。美山には、鮎の内臓の塩辛であるウルカという珍味がある。義理の兄は、美山の宿の囲炉裏端でウルカを食べたら、あまりにも美味しくて、お土産として持ち帰った。都会の家のテーブルで食べたら、ただ塩辛いだけと感じたそうだ。

【127～130頁】 猟友会は獣害対策を担う組織として存在するのではなく、基本は「狩猟愛好者の団体」であるということだ。まず市町村レベルの猟友会があり、それをまとめた都道府県猟友会、そして全国組織の一般社団法人大日本猟友会が存在する。狩猟愛好者と記したとおり、本来は狩猟を趣味とする人々の集まりだ。ハンターの加入は任意であり、専門的な教育や訓練を受けて加入するわけではない。資格試験があるわけでもない。地域の猟友会もたいてい任意団体だ。ただ、全国組織である大日本猟友会の源流は、帝国在郷軍人会が各地で結成した猟友会である。それが大日本連合猟友会を発足（1929年）させた。この組織の目的は、当時横行していた密猟を抑えるとともに、軍用の毛皮を収集するためだったとされる。ウサギなどの捕獲を組織的に行うため、銃弾や火薬を軍から支給していた。戦後は、狩猟の適正化や野生鳥獣の保護、会員向けの共済事業などを目的として掲げている。しかし現在注目されているのは、有害駆除の担い手としての側面だろう。ここで狩猟と有害駆除の違いについて認識しておかねばならない。狩猟は趣味であえる。たとえば、複数のハンターが獲物を山中で追いかけて仕留める巻狩では、1日中山を駆けずり回って仕留められるのは1～2頭だろう。それは野生動物と向き合い、対決することを楽しむ面が強い。しかし有害鳥獣の駆除は、もっと効率よく獲物を仕留めなければ効果が出ない。また出没情報に合わせて平日でも急遽出動要請が出ることもよくある。楽しむという面を抜きに行う事業だ。猟友会にとって、有害駆除は仕事を休んで出動するボランティアなのだ。社会貢献に近い。なお狩猟ではなく罠にかかった獲物の処理を頼まれることも多い。一般の人には止めを刺せないからだ。しかし箱罠などにかかったイノシシやシカ、ときにクマを仕留めるのは楽しくもない作業だろう。逃げられない獣を至近距離から撃つ、ときに槍で突いたり棒で殴ったりするのだから。動物と対等に向き合うのではなく、命あるものを殺す辛さがある。しかも、地域のためと思って要請に従って行う作業なのに、世間の白い目が向けられがちだ。加えて銃の所持や資格維持の手続き、イヌの飼育など、経費も手間も馬鹿にならない。それを負担して狩猟をやりたい人が参加するものだ。また野生鳥

獣の肉を得るための狩猟を行う人は、自分の周辺で消費できる以上の頭数は獲らないことを決めている人も少なくない。もう一点強調しておきたいのは、愛好者団体という性格から、いわゆる新人を教育する役割を持っていないということだ。ようやく狩猟免許を取得して会員になっても、猟に関する細かなノウハウを先輩に教えてもらえるとは限らない。猟友会のなかには「3年間は先輩ハンターの弁当持ち」という言葉もある。つまり、下働きしないと何も教えてもらえないということだ。また教えるというよりは「見て覚えろ」という、いわば徒弟制度のような面もある。ハンターにとっては、獲物獣の通り道や、餌を食う場所、シカが山にこもって寝る場所など、長い時間をかけて蓄積したものが財産だから、そうやすやすと他人には教えたくないのである。しかし、これでは有害駆除も進まない。風向きが変わったのは、獣害がひどくなるなかで、先述したように報奨金の額が高まったことだろう。以前は経費にもならない額と嘆かれていたが、いまや1頭2~3万円になっている。これならやる気になる。そのためか、猟友会のなかで有害駆除に誰が出動するか、奪い合いになるケースもあるそうだ。そこに序列のようなものが生まれ、古参ばかりが権利を行使するようになり、新規参加者は駆除に参加できないこともある。それに猟友会ごとに行動エリアをある程度決めているので、広域に出動するのは難しい。好きにどこでも狩猟できるわけではないのだ。駆除は、容易に獲れる場所を選びがちだ。それは必ずしも被害の多い地域とイコールではない。まったく被害報告の出ていない奥山で多く仕留めても、報奨金は獲物の頭数によって得られる。しかしそれでは被害を抑えられない。それどころか「あまり獲りすぎると翌年の獲物が減るから」と、手加減する傾向もあるそうだ。獣害を抑えるための狩猟ではなく、「持続的に獲物を捕れるようにする」ことを意識するのだ。ひどい場合は、罠にかかっている個体を逃すそうである。

【コメント】「地域のためと思って駆除の要請に従って行う作業なのに、世間の白い目が向けられる」と書いているが、他は猟師に対する批判が多い。猟師の中には、農山村で農林業を営み、獣害に苦勞している人も多い。批判するなら、都会で暮らしている獣の研究者を対象にすべきだ。例えば、京都府森林技術センターと森林総合研究所は「ドロップネットで、シカを簡単に大量捕獲できた」と発表している。

<https://www.ffpri.affrc.go.jp/pubs/seikasenshu/2013/documents/p48-49.pdf>

この報告書の記述は嘘だらけである。都会で暮らしている人は嘘だと見抜けず、林業白書でも紹介された。また、2013年度農林水産研究成果10大トピックスの2位に選出された。

<https://www.ffpri.affrc.go.jp/news/2013/20131224dropnet/index.html>

報告書では「誰でもできる」としているが、ネットに絡まって暴れているシカを殺すのは猟師でも危険な作業である。「資材費9万円」としているが、20万円以上するwebカメラなどは含まれていない。「1日あたり0.6頭」としているが、1ヶ月以上餌付けした後、10日間で6頭が捕れただけである。1日あたり0.6頭なら年に216頭が捕れるが、実際には年に30頭以下しか捕れない。「箱ワナよりも効率的」としているが、多数が設置できる箱ワナのほうが効率的である。ドロップネットは非効率なので現場で採用例がない。作業を手伝った人達は「餌付けが大変。webカメラをずっと見ているのは大変。ドロップネット設置よりも撤去が大変で現場では使えない」と言っていた。実際、同じ試験結果なのに、森林防疫という論文では「ドロップネットは実施が困難」と結論している。ドロップネットを指導した兵庫県立大学のS博士は「駄作を宣伝されて困っている」と打ち明けてくれ

た。また、この研究を指導した東洋大学の M 博士は「森林総合研究所がやりそうなことだ」と呆れておられた。そこで、私は、森林総合研究所の成果選集にあった問い合わせ先に、以下の質問をした。

***ここから

- Q1 「森林用ドロップネットは被害現場で林家が直接シカを捕獲できる」とされています。ネット捕獲されたシカは、かなり暴れるし、逃げる恐れもあります。林家が、どのような方法で殺すのですか？ハンターに依頼するのであれば、「林家が直接捕獲できる」という表現は嘘になります。また「林家がやりで突いたりして殺す」のであれば、とても危険ですから「安全で」という表現は嘘になります。
- Q2 「持ち運びや設置が簡単で、森の中で使いやすい」とされています。また、「遠隔監視や作動に必要な装置を除く本体の資材費は9万円」とされています。現場が導入するかどうかを判断する場合、コストは重要です。遠隔監視や作動に必要な装置の価格はいくらですか？もし、これらの合計金額が10万円以上ならば、コスト安に見せかけた不適切な表現になります。
- Q3 「4人で1日で製作でき、設置は半日」とされています。餌付け、監視、固定カメラでの撮影とチェック、捕獲個体の処理にも労力が必要です。製作と設置以外の労力はどのくらいでしょうか？もし、これらの労力が多ければ、低労力に見せかけた不適切な表現になります。
- Q4 「ワナ1基あたりの捕獲数は1日あたり0.6頭」とされています。これが事実だと、年間に219頭が捕れることとなりますが、本当ですか？もし、餌付けなどの日数を入れずに推定した値であれば、捕獲効率を故意に水増しした「ねつ造」になります。
- Q5 「箱ワナなどの捕獲効率は、おおむね0.4頭で、それらに比べて捕獲効率が高いことが分かった」と書かれていますが、バラツキの大きなデータの平均値の比較において、0.6と0.4では差がないことは明白です。このような不確実なデータで、「捕獲効率が他の方法よりも高い」と断定することは不適切ではないでしょうか？くくり縄だけで、年に200頭以上を捕獲している人もいます。箱ワナも、設置方法によっては、かなり捕獲できます。ここでの記述は、ドロップネットを宣伝するあまり、他の捕獲法をおとしめる結果になっています。
- Q6 この研究成果は2013年の農林水産関係研究10大トピックの2位になっています。上記のような疑問点が多く、京都府の現場では「あれはジェスチャーだ」と批判している人もいます。ドロップネットの発案者（兵庫県）も「駄作を宣伝してもらっては困る」と明言されました。京都府における導入実績はゼロですが、他府県で導入実績はあるのでしょうか？森林用ドロップネットは、開発されてから3年以上が経過しているのに、現場で導入実績が無い場合、それを無視して、成果選集に記載することは適切だと思います。
- Q7 林業用ドロップネットは、コスト的にも労力的にも、安全性からも、問題点が多いと思います。当時担当していた京都府職員は「1基での捕獲数は年に24頭が限度だろう」と言っています。1基あたり捕獲数は、年間で、どのくらいでしょうか？
- Q8 こうした現場が導入できない方法を、いつまでも宣伝することで、現場に正しい情報が伝わらなくなっています。箱ワナのメーカーの方は「0.4頭という数字には根拠はない。

研究するならば、役に立たない方法を研究するのではなく、箱ワナの捕獲効率を上げる研究をして欲しい」と言われました。研究費獲得のための虚偽ともとれる成果が、現場を混乱させ、獣害を激化させていると思うのですが、この意見に対して、どうお考えでしょうか？

***ここまで

この質問に対して回答は無く、上司であった I 氏に、森林総合研究所（以下森林総研と略記）の T 氏から以下の内容のメールが届いた。

***ここから

お世話になっております。少し残念なお知らせです。

貴センターの小林正秀と名乗る人物（おそらく本人と思われます。gmail アドレスだそうです）から、森林総研本所の「相談窓口」（本所の Website に掲載されている、誰でも問い合わせをできるアドレス）に質問および要望を綴った長文のメールが届いたそうです。私はメールの中身を見ていませんが、要約すると以下のような内容だそうです。

- ・森林総研が行ってきた「カシナガ対策」と「シカ対策」の成果を掲載した冊子（および Web 上の情報）の内容に関して数多くの質問事項を並べ、回答を要求している。
- ・質問という聞こえは良いが、我々の記述に対して「嘘」や「捏造」などとする表現も含まれており、勝手な憶測を元に内容を曲解しているように感じられる。
- ・総じて森林総研の成果に対して否定的であり、「森林総研の研究は役に立たない」「税金の無駄遣い」などのような記述も含まれている。

本所では、内容を検討し、以下のように対応する方針です。

小林氏本人には回答せず、本所研究ディレクターの K が、京都府センターの組織長である I さん宛に文書で回答するとのこと。文書の内容は「小林氏の認識には事実誤認があるようで、不適切な表現も散見された。必要ならばセンター名であらためてご質問頂きたい」という主旨になるはず。この件には、関西支所は直接関係しておりませんが、参考までに事前にお知らせいたします。小林氏関連の問題は、I さんにとっては災難以外のなにものでもなく、心中お察し申し上げますが、私どもも組織の名誉やスタッフを守る義務があります。良識あるご対応を切にお願いする次第です。

***ここまで

私の人事権を有する K 林務課長が、私の職場に飛んできて「森林総研から苦情が入った。大きな問題になる」と通知した。そこで、K 課長に「以前にも同様のことがあった。森林総研は都合が悪くなると組織の問題にする。しかし、研究者は、研究内容への質問には回答する義務がある。獣害は人命に関わる重大問題。あなたは夜久野町出身だから判るはず。ドロップネットは、どれだけ使われていると思いますか？」と怒った。K 課長は「ドロップネットは数十カ所で使われていると聞いている」と回答した。そこで私は「ドロップネットは現場で採用された例がない。林務課長が、その程度の認識であることの方が大問題だ。森林総研からの苦情内容を開示して欲しい」と追及した。森林総研の T 氏のメールは、私を誹謗・中傷するものであるため、本来、私は見ることはできないものである。しかし、私が K 課長を厳しく叱ったので、このメールが入手できた。このメールを添付して、再度、森林総研に同じ質問をしたところ、平成 28 年 11 月 7 日付けの公文書が京都府森林技術センターに届いた。その概要は以下である。

***ここから

平素より当研究所の研究業務にご理解ご協力いただき厚く御礼申し上げます。
この度、貴センター小林正秀主任研究員より当研究所企画部広報普及科相談窓口宛別紙の通りご連絡をいただきました。第三期中期計画研究成果選集は研究成果を要約しており、一部内容が十分に伝わらなかったようです。成果を詳しく解説した資料を同封しましたので、ご確認ください。小林正秀主任研究員よりいただきましたご意見は、当研究所の今後の研究の参考にさせていただきます。今後とも、当研究所の研究業務にご理解ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

なお、森林用ドロップネットは、京都府農林水産部林務課および貴センターをはじめ、京都府関係機関との共同研究の成果であることを申し添えます。

***ここまえ

結局、森林総研は、なにも回答しなかった。そもそも、これほどの嘘を並べていたのでは回答できるはずがない。

ドロップネットに対する質問をした後の悶着と同様のことは2008年にもあった。森林総研のK博士が、私に「本の執筆を頼まれた。急いでいる。一緒にナラ枯れの本を書いて欲しい」と依頼してきた。その頃、K博士よりも実績が多い人達と本を書くことを検討していたが、ナラ枯れの全容は判っておらず、実現していなかった。そこで「ナラ枯れに深く関わった人達と、落ち着いて一緒に書くべき。慌てると間違いを書くことになる」と断った。すると、K博士は、あろうことか、私の同僚であったNさん（上述した動物好きの女性）に「小林さんは忙しいので書けないので、共同研究者のNさんに書いて欲しい。小林さんには黙って欲しい。適切な時期に私から説明する」と依頼した。森林総研との関係上、Nさんは断れず、原稿を書いた。しかし、Nさんとの約束は果たされず、私への説明がないまま、本の出版期限が近づいた。困り果てたNさんは「間違っただけを書いているかもしれないので見て欲しい」と私に依頼してきた。その原稿を読んで愕然とした。間違いが多いのは覚悟していたが、まだ論文にしていない未発表内容まで書いていた。そこで、出版社に「原稿を修正したい。出版は待ってもらえるか？」と問い合わせた。出版社は、私の研究内容が、私の同意なしに本に書かれようとしている事に驚き、「待ちます」と言ってくれた。そして、私は、K博士などの執筆者に対して「なぜ、こんなことをしたのか」とメールで問い詰めた。すると、困り果てた森林総研は、京都府の本庁に「小林から攻撃を受けている」と申し出た。これは森林総研の常套手段であった。公立林試の研究員は弱い立場で、上司の意向によって異動させられ、研究ができなくなる。森林総研は、公立林試の指導的な立場であるため、公立林試の研究員との間でいざこざが起これば、本庁に「組織の問題になる」と通知する。こうした通知があれば、公立林試の研究員は研究ができなくなる。同じ目に遭った人達から、「小林君なら闘える。負けないで欲しい」との手紙が多数届いた。中には、高級な柑橘類を送ってくれた人もあった。しかし、役所では善悪は関係ない。トラブルが発生した時点で「悪」である。問題が大きくなることは避けたいので、上司であったT教授も「出版を差し止めた」「攻撃的なメールを送った」などとの理由で、学会発表停止、メール使用禁止の処分を下した。その他に、継続していた文化人との会食も停止した（これは私的な会なので違法である）。森林総研と私との間に入った森林保全課長のK氏は、22年も林業試験場に勤務した優秀な研究者だった。私とのプログラ

ミング対決（大きな素数を求める時間の勝負）に負け、私に研究を托した方で、14年間も私の上司だった。K 課長は「お前は悪くないので謝る必要は無いが、お前が闘って問題が大きくなると、研究できなくなる」と言って、処分中の私を誘って酒をあおった。結局、K 課長は「本に書いた内容の出典を明示して欲しい」と森林総研に依頼し、その本の論文引用数は、編者である K 博士の論文よりも、筆者でない私の論文のほうが圧倒的に多くなった。そして、K 課長は「できるだけ大勢に謝罪文を書け」と助言した。そこで、出版社などの関係先、30 人以上に謝罪文を送った。その結果、農林水産部長は「潔い」と褒め、私は何階級か昇進した。また、謝罪文を送った人達から「森林総研のやり方は酷い」との返信が送られてきた。K 課長は「悔しい」と言っていたので「褒め殺し」という戦法を選んだのであろう。この件のさなか、N さんは、以下のメールを関係者に送信している。

***ここから

小林さんが本原稿を書かないと判断された K 博士から、私に執筆のお話があった際に、小林さんが書かないのにとっても書けないと断りましたが、S さんが承諾され「手伝ってほしい」と言われたこと、また、K 博士にはお世話になってきたと考えていたので、執筆することにしました。当初は、名前を出さず、S さんの原稿の付け足しくらいに考えていましたが、割り振りを見たら、とても付け足しではなかったのです。K 博士から「小林さんには黙っていてほしい」といわれ続けました。本が出せなくなるという理由でした。今から考えると、私が書かなくても、本は出せますし、出版したいのであれば、小林さんが何を言っても出版できます。小林さんに、内緒にしておくことは、とてもつらかったのですが、「小林さんには黙っていて欲しい」と説得を受けました。実際に、12 月 23 日、「小林さんが、いないのは私にはとてもプレッシャーですが、なんとかありますよね～、小林さんには私が執筆する件はまだ伝えていませんが、なにか勃発しましたら、フォローよろしく願い致します。K 博士、書き出しちゃったら、言ってもいいかなーと思ったりしていますが、いかがですか？」と出したメールは、かなりの覚悟をした上でのことです。これは、執筆者の皆様に配信させていただきましたが、理解していただけなかったのかもしれない。K 博士からのみ反応があり、これでも、「原稿が書き上がるまで、10 日ほどは黙っていきましょう」と言われました。その後、「学会で報告している内容は、共同研究者の許可などいらない」「今から変更する時間もない」など、聞いてきました。私の方も、最初に小林さんに言わなかったこともあり、ずるずると言えないまま小林さんに話さずに、時間だけ過ぎました。小林さんは、1 月上旬には、私が執筆していることを知ったようですが、私から打ち明けられるのをじっと待っていたようです。どのような心持ちだったのかは、よく分かります。そのうち、小林さんからメールがありました。小林さんは、シイタケを書いているのだと思って、「それだけなら、削ったほうがよい」と怒っていました。ただし、「シイタケ植菌のことを、あまりよく書くなよ」という助言もあり、全く書いてはダメだとは考えませんでした。私からは他に執筆している内容は伝えなかったため、この時点では穿入生存木の扱いや、爪楊枝防除、ヘリ調査など、論文になっていない新規性のある内容を書いているとは小林さんは知りませんでした。しかし、あとで未発表のものが含まれていることを知り、おまけに私がそれらを書いていると知って、激怒しました。怒るのは当然です。皆さんにも事前にメールにて相談したつもりでした。だから、K 博士に「小林さんに説明して欲しい」と何度もお願いしました。当场からは場長にまで K 博士

に、小林さんと話をして欲しいとお願いしました。けれど K 博士からは、「パンフレットの一件から、小林さんとは話できなくなった」ということで話をさせていただくことがなく、急に、「組織の話にしました」と連絡があり、私自身は愕然としました。こんなことは、個人の問題なので、K 博士から、小林さんに説明してもらえればいいのかと思った私が甘かったと思っています。もし喧嘩別れになっていたとしても、その K 博士が小林さんに話をするのは、当然の義務だったと考えています。森林総研からは、誰一人として小林さんに説明がされないのでしょうか。私は、小林さんだけが処分されようとしていることにとっても不安と焦りと、また失望もしています。憤りも感じています。私は、小林さんが一生懸命にやった実験や野外調査を、小林さんの許可なく書きました。相談できなかったのも、とても間違っただけでも書いてしまいました。執筆者からは誰も訂正はなかったけれど、小林さんは、むちゃくちゃ言いながらも、まずいところを訂正してくれました。結果は、私にも納得できるものでした。訂正しておかなければ、すぐまずい事になっていたと思います。

気になるのは、結局、小林さんだけが悪者になっていることです。小林さんは怒りすぎたかもしれません。K 博士が話さないとやっているのだから、小林さんから電話するという方法もあったのかもしれませんが。とにかく、二人が話をして欲しかったのです。小林さんは、大学に迷惑をかけたくないので、おそらく何も反論はされていないのですが、それではあんまりだと思います。また、小林さんは、多くの研究者にとっても仲良くやっているのも、「心配している」という連絡が私にも来ています。おそらく、小林さんの所には、たくさん来ているだろうと思います。話がどんどん拡大していき、ますます、收拾がつかなくなるようです。とにかく、私は、森林総研の今回のやり方に、大変怒っています。

***ここまで

私のテンヤワナンヤ人生にとっては、たわいもない事件だった。しかし、K 課長は、この問題が終息して直ぐに、現役職員のまま逝ってしまった。死因は食道ガンで、私と酒を何度もあおったことが死期を早めたことは間違いない。また、ナラ枯れ研究に頑張っていた N さんは、その後、やる気を失い、数年後、京都府職員も辞してしまった。私は、まだ 42 歳で、こうした問題に、どのように対処すべきか、判断できなかった。ただ、同じ問題で研究を諦めた人が多いことを知った。また、私は、研究職を追われなかったのも、同様の問題で困っている人達から相談を受けるようになった。次第に、研究を続けるためには、不条理と闘う術を身につける必要がと考えるようになった。法律や訴訟を勉強し、そのへんの弁護士よりも闘う術を身につけた。殺人未遂事件の被害届けを出して犯人達を有罪にできたのも、JA 共済が「一切払わない」と言っていた保険金だけでなく和解金など総額 4 千万円を勝ち取れたのも、研究を継続するために身につけた闘う術のおかげであった。その後も、不条理と闘うため、弁護士無しで訴訟を起こしている。詳しくは書かないが、現役公務員が、過去にも未来にも絶対にやらない訴訟で一部勝訴したこともある。今なら、森林総研が本庁に「小林から攻撃を受けている」と申し出て、人事権を有する課長が私を怒りに来たとき、「攻撃していない。不条理なことをされたので怒っただけ。森林総研が非を認めないなら、第三者に判断してもらうために訴訟する」と毅然と対応する。ドロップネットの件では、私を怒りに K 課長に「この件を問題にするなら、第三者に判断してもらうために法廷で争う」と伝えた。それだけではなく「森林総研から苦情が入った」と K

課長が言ったので、「具体的苦情内容を教える義務がある」と指摘した。

筆者は「森林ジャーナリスト」を自称しているのだから、ドロップネットの嘘を見抜き、私と同様の質問をすべきだ。ドロップネットの捏造は、ナラ枯れ研究に比べたら些細なことである。上述した樹幹注入の動画や、2021年の森林学会で発表した動画を見れば、ナラ枯れ対策に、どれほどの問題があるのは判るはずだ。何も知らずに、私が開発したナラ枯れ防除法を批判するのは、まさに「お門違い」である。

<https://www.youtube.com/watch?v=Px9zyvworkQ>

【141～142 頁】さらに根本的な季節の問題もある。農業被害の観点からは、作物が育つ春から秋にかけて駆除すべきだ。ところが、シカもイノシシも肉に脂がのって美味しくなり需要が増えるのは秋から冬である。肉の価格も冬の方が高い。関係者によると夏の肉も美味しいというのだが、世間の目がそうになっていないため価格には反映しにくいのだ。ちなみに解体施設は、通常 1500 万円かかるという。自治体施設の場合は数億円かけた話も聞く。この時点で採算は合わないだろう。結局、補助金頼みになってしまう。移動式の解体施設としてジビエカーの開発も行われた。トラックの荷台に解体する設備を備えたものである。解体施設が近くにないため、仕留めた個体を運び込めないケースに対応するものだ。狩猟を行う現場にジビエカーを走らせるのである。しかし莫大な補助金をつぎ込んで作られた割には普及していない。だいたい、いつ、どこで、何頭仕留められるのかわからない獲物のためにジビエカーを走らせてもコストは引き合わないだろう。それにトラックが入れるのはある程度の幅員のある道路までだ。そこまで獲物を運ぶ手間がかかる。そして道路まで引っ張り出したら、そのまま車で解体場まで運ぶことも可能だろう。出番はあまりなさそうだ。

【コメント】アイデアを出さずに批判ばかりしている。「いつ、どこで、何頭仕留められるのかわからない獲物のためにジビエカーを走らせてもコストは引き合わない」と書いているが、上述した地域消防団による夜間捕獲ならば、いつ、どこで、何頭捕れるかが事前に把握できるのでジビエカーも活躍できる。獣害に困っていない役人や学者、ジャーナリストが知恵を出さずに、夜間捕獲というアイデアも批判する。夜間捕獲をやれば獣害が減ってしまうからだろう。獣害が減って困るのは、獣害研究者や獣害コーディネーター、筆者も講演料や原稿料が減って困るだろう。ある講演で「駆除すべきは鳥獣ではない。やる気のない役人と、獣害がなくなると困る学者を駆除すべきだ」と過激なことを言ったら、拍手喝采を浴びたことがある。現場で獣害に苦勞する人達は、酷くなる獣害に怒りを爆発させ「獣害は人災だ」と感じているのだ。

【146～148 頁】最初の屠体給餌では、ライオンとトラは骨をすべて平らげた。とくに 1 頭のオスライオンは、通常の給餌と違って、ほえる、屠体をくわえて走る、前肢でつくなどの行動を見せ、骨もかみ砕きながら食べた。これは自然界の行動に近い。なお難消化性の骨を食べると、整腸作用を促進し、体調をよくする効果も見込めるそう。見学者にとったアンケートによると、採食の様子を見るのに抵抗を感じた人は 1 割程度で、多くの方は肯定的だったという。大牟田市動物園の屠体給餌は、今では月に幾度か行われている。現在与えられる屠体は、福岡県の山で駆除されたシカやイノシシだそう。

この活動を受けて、京都市動物園でも試みられている。さらに岩手盛岡市動物園や茨城県日立市のみかね動物園、熊本市動物園など、全国十数カ所でライオンやトラ、ピューマ、ヒグマ、コンドル、ワシなどを対象に行われるようになった。今後、各地で広がりそうだ。屠体給餌を推進するために「ワイルド・ミート・ズー」という団体もつくられた。もちろん、この方法で使われる駆除個体の量は限られているし、また動物園の餌を全部「屠体」に切り換えられるわけでもない。しかし飼育環境をよくするだけでなく、見学者にとっても、人間社会に害を与える獣害問題について考えてもらうきっかけになるだろう。また、動物園に限らずイヌ・ネコを含めたペットの餌としての加工を推進する動きもある。人間用のような衛生面の手間が緩和されるし、蒸れ肉などの味の下落によって売れなくなることもない。ただドッグフードの原料にすると価格は安くなってしまふ。しかし、干し肉（ジャーキー）にすると高価格で売れる。ハンター自らが製造して販売するケースもあるという。干し肉は、イヌやネコにとって野生状態に近い餌だからなのか、非常に食いつきがよいそうである。こうした駆除個体の利用は、いろいろメリットがある。販売利益を得るだけでなく、焼却や埋没処分をしなくてもよいことや、生のあるものを殺した末の「もったいない」意識を和らげ、ハンターの心理的負担を弱める点からも一考に値するかもしれない。私自身も、人間が食べるジビエにこだわらず、屠体給餌やペットフードなどの利用を進める方が現実的だと感じている。それは、人が野生動物を身近に感じる機会になると想像できるからだ。

【コメント】ジャーキーについては、美山で料理旅館を経営する梅棹君（梅棹忠夫博士の孫）も取り組んでいる。彼は美味しいジビエを提供するため、旅館の敷地内に食肉加工場を設置し、自ら獣を解体して血抜きしている。こうすることで、良質な肉を客に提供するだけでなく、ジビエ店にも出荷している。食用に適さない部位でペット用のジャーキーを作っている。これは木材でのカスケード利用と似ている。木材の場合、良質材からは建材（柱や板）が得られるが、建材に使えない端材は細かくしてボードや紙、燃料などとして利用される。燃料としてペレットになることもある。ペレットとは、木材を細かな粉にし、その粉を加熱して棒状に固めたもので、ペレットストーブやペレットボイラーで使う木質燃料である。ペレットは、ヨーロッパでは大量消費されていたが、日本では、それほど普及していない。そこで、ヒノキペレットをネコ砂（ネコ用トイレ）として利用することを、花王の株を買って株主提案している。また、ナラ枯れの媒介昆虫であるカシナガから広葉樹を守るため、ヒノキペレットを土俵袋につめて木の根元に置く予防法も発案した。北米では、針葉樹を攻撃するキクイムシが問題となっており、広葉樹の香り（ベルメノン）でキクイムシを忌避する方法が実用化している。そこで、広葉樹を攻撃するカシナガは、針葉樹の香りでも忌避できるかもしれないと考えた。実際にやってみると、簡単で環境に優しく、見た目にも問題なく効果的で、この方法で京都市内の多数の御神木を守ることができた。御蔵島には日本一大きなスダジイなどの貴重な木が多く、2011年1月13日、御蔵島村長など10名ほどが、京都市内のナラ枯れ防除現場を視察に来られた。「樹幹注入はやってはならない」と助言したが、樹幹注入が実施されている。現状を尋ねたところ、学者と役人は「樹幹注入に効果が有るかどうかわからないが、他に方法が無い」と言った。効果が有れば「効果が有る」と言うはずなので、「効果は判らない」との回答は、効果が無かった証拠である。そこで、方々に問い合わせ

せたら、御蔵島の観光ガイドさんが「2020年、樹幹注入木が多数枯れた。あの方法には疑問がある」と教えてくれた。その後、樹幹注入が効かない証拠や、ヒノキペレットで予防できることをメールで伝えた。その結果、「小林さんの話を聞きたい」と言ってくださり、2021年10月15日、東京都の予算での講習会が計画された。東京都職員に「樹幹注入は止めるべき。10月15日の講演を聴いて欲しい」と伝えた。すると「小林さんとは違う専門家の意見を聞いて対策している」と怒って電話を切ってしまわれた。そして、9月9日、東京都から「新型コロナの影響で御蔵島における講習会は延期」という文書が届いた。東京都の感染者数は、10月15日には30人以下で、講習会は開催できた。結局、12月上旬、御蔵島では、再び樹幹注入が実施された。東京都にとっては、私の講演は「不要不急」だが、業者による樹幹注入は「必要火急」なのであろう。森林ジャーナリストなら、こうした不条理を浮き彫りにする記事を書くべきだ。そんなことをしたら、私のように講演中止になるケースが増えるかもしれない。私は、基本的に講演料は辞退している。講演料を生活の糧とする人では、真の森林ジャーナリストにはなれないだろう。

獣の屠体のカスケード利用のため、いろいろな提案をしている。養魚に用いる餌は魚粉であるが、海の魚が減少して魚粉が高騰しているため、ブタの血液を養魚用の餌に混ぜることが検討されている。ウシはBSEの問題があるので使えないらしい。そこで「獣の屠体を養魚の餌に利用する」というアイデアを関係者に提案した。すると「獣では量が足りない」と返答された。そこで、イノシシやシカの駆除数を伝えたら「そんなに多いのなら魚粉の代わりになる」との返事が返ってきた。イノシシやシカを、まるごと大きなネジで破碎して細かくした骨や肉を、肥料として利用する試みがある。そこで、養魚用の餌にするため、イノシシ由来の肥料を購入した。その肥料は強烈な臭いがしたし、大きな骨が混じっていたので、養魚用にはできなかった。しかたなく、栗園に肥料として散布したところ、キンバエの大量飛来を招き、栗苗が枯れてしまった。こうした失敗が発明につながる。「この悪臭は使える」と気づき、木と竹だけの簡易柵の根元に散布した結果、イノシシの侵入が防げた。獣の屠体で獣を忌避できるかもしれない。

現場にいれば、アイデアはたくさん浮かぶし、実行もできる。日本では、現場にいる人が少なすぎるので、問題が解決しない。「百聞は一見に如かず」には続きがある。「百見は一考に如かず」「百考は一行に如かず」「百行は一果に如かず」「百果は一幸に如かず」「百幸は一皇に如かず」と続く。著者は、見聞きしたことを書いているに過ぎない。見るだけでなく、よく考えて行動し、成果を出して、その成果で個人だけでなく大勢を幸せにする必要がある。

【148～149頁】野生動物の利用・資源化という観点からは、利用するのは肉だけではない。まず考えられるのは、毛皮や皮革という資源である。毛皮は、解体時に必ず得られる。毛皮そのものは保存が効くので、ストックもしやすい。もちろん毛皮もしくは皮革に加工するには専門の施設と設備が必要だが、流通ルートを整備すれば一定の利益を得るのが可能だろう。ほかにオスジカの角も資源になる。一般には枝分かれした角がオブジェとなるほか、彫刻素材などに供されているが、隠れた付加価値商品として鹿茸（ろくじょう）がある。これは角が伸び始める春先の皮を被ったままの小さな袋角である。これが漢方薬の原料になるのだ。

【コメント】実家は町医者もしていたのでサイ角があった。サイ角は解熱剤で、スペイン風邪のときに活躍したそうだ。小学生の時、高熱が出て初めて学校を休んだ。父は、サイ角を削って飲ませてくれた。熱が下がり、翌日、登校したが、その高熱は麻疹が原因で、小学校が全校休校になってしまった。私が風疹ウィルスをまき散らしたのかもしれない。休校になったせいで、私も、父と同じく、小学校は皆勤になった。鎖国していた江戸時代に、美山町のような山村に、サイ角が輸入されていたことは驚きだ。

エジソンは思いついたことを実行する天才だ。私も、そうありたいと考え、頭に浮かんだ道具を、台湾で金型を起こして製品化してきた。戦前、日本で使われていたハエ捕りピンを強化プラスチックで再現した装置は海外でよく売れている。Youtube 動画も 13 万回以上再生されている。<https://www.youtube.com/watch?v=69zktNEhruU&t=90s>

鳥獣撃退器も改良を重ね、2 千台以上を現場に届けている。

https://www.youtube.com/watch?v=_ILay7V1YZM&t=25s

カシナガトラップも現場で 1 万基以上が設置された。

<https://www.youtube.com/watch?v=cJTtoFHmmpGY&t=62s>

私は、銭儲けのために道具を作っているのではないので、開発した道具が売れても利益は得ていない。Youtube での再生回数が伸びても利益は得ていない。しかし、そう思わない人は多い。長野県職員の O 氏（大学の同級生で獣害コーディネーター）は「小林は、サンプルといって自分が開発した製品を、あちこちに送りつけている」と私の上司に告げ口するようなメールを送ってきた。私が提訴した訴訟で、そのメールは証拠として利用した。都会だけで生活し、「田舎者」と侮蔑する言葉を使う人物には、私が懸命に道具を開発している理由が理解できず、銭儲けのために思えるのだろう。しかし、それはまさに「下衆の勘繰り」である。一方、協力してくれた台湾の C 氏は「日本人がシカに困っているなら、シカの角をナイフの柄にすべき。カナダで製造できる」と教えてくれた。

【150～151 頁】ジビエを普及させても、駆除数が増えて獣害対策につなげられるわけでない」と指摘してきた。原点に戻って獣害を抑える方法について整理しておこう。まず加害個体の頭数を減らすのが「駆除」である。昨今はこればかりが注目されてしまっている。だが、その前に作物などを柵で囲って害獣を近づけない「防護」があり、さらに被害を及ぼす場所に野生動物を引き寄せない「予防」がある。まず「駆除」は、猟銃や罠によって、害獣を殺すか捕らえる（たいてい殺処分する）。この手法の説明は繰り返さないが、「獣害の発生を抑える」という原点について考えておきたい。なぜなら獣害対策としての「駆除」という選択肢は、「駆除して個体数を減らす＝個体数が減れば獣害が減る」という単純な論法が前提となっているからだ。しかし全国各地で「駆除」が被害軽減につながったという報告はあまりない。これまでのデータによると、必ずしも個体数と被害量には相関関係が見出せない。とくにシカの場合、生息数を半分にしても被害はほとんど減らないようだ。かといって 8 割 9 割も駆除するのはほとんど不可能だろう。獣害は駆除だけでは解決しないことを示しているように思える。加えて重要なのは、「本当に被害を出している個体を駆除できるのか」という点だ。すべての野生動物が人里に出たいわけではない。動物にも個性があり、危険を冒して人里の餌を狙う個体ばかりではないのだ。警戒心が強く近づかない個体も多い。彼らは農作物の美味しさを知らない。もしくは知っていても危険

性と天秤にかけて農地を狙わない。専門家も、その点を指摘している。「シカやイノシシのなかでも農作物を狙う個体は決まっていて、彼らは山に餌が十分あっても美味しい農作物を知ると人里に現れます。だから奥山にいる個体を捕獲しても、被害は減りません」（国立研究開発法人農研機構西日本農業研究センターの江口祐輔さん）。

【コメント】野生動物を引き寄せないためには「餌を放置しない」ことも重要なのだろう。しかし、餌（食べ物）に注目していたのでは獣害は解決できない。動物は、「食うため」だけでなく「繁殖するため」「危険を回避するため」に動いている。人が暮らす里が、獣にとって安全になったから、獣が里に出てくるようになった。再び、獣にとって危険になれば、獣害は減らせる。獣害予防のためには、里での人の活動を増やすこと、犬や家畜を放し飼いにする、火を使うことが重要である。筆者は「8割9割も駆除するのはほとんど不可能だろう」と書いているが、上述した夜間捕獲を行えば、9割以上を駆除することも可能になる。夜間捕獲では、本当に被害を出している個体だけを駆除することになるので、獣害を根本的に解決できる。

江口祐輔氏のコメントを紹介しているが、江口氏は「堂山宗一郎・江口祐輔・上田弘則（2017）ニホンジカの超音波周波数域を含む純音刺激に対する行動. 農研機構報告 西日本農研 17 : 1-11. https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/files/warc_report17-2.pdf」に関わっている。この文献（論文ではなく審査を受けていない報告書）では「6頭の飼育中のシカに、安物のスピーカー音を聞かせた結果、どの周波数の音に対してもシカは警戒や忌避反応を示さず、農林地において音によるシカの防除は困難であると考えられた。また、市販の防除用超音波発生装置などの純音を用いた防除技術にも効果がほとんど無いと考えられた」と考察されている。6頭のシカに音を聞かせるのは、小学生の夏休みの宿題レベルの実験である。この実験で言えることは「超音波で逃げる個体がおらず、市販品に効果が有ることは証明できなかった」である。ところが、この報告書は、超音波撃退器を否定するのが目的であるため、試していない市販品の効果まで否定した。ユーソニックという超音波撃退器の開発者であるモハラテクニカ社のN氏は、この報告書について「民間が努力して開発した装置を、税金で飯を食う研究者が否定してはダメ。音は周波数が高くなれば（超音波になれば）音圧（デシベル）が下がる。ユーソニックは120デシベル以上の音が出るが、この報告書のスピーカーは70デシベルしか出ない安物で、そんな小さな音はシカには聞こえない。ユーソニックを野生個体で試さないの意味がない」と怒っていた。滋賀県で獣害に困っている人が、私が開発した鳥獣撃退を補助対象にすべきだと、滋賀県職員に進言した。すると滋賀県職員は、この報告書を取り出して「国の研究者は撃退器には効果が無いと論文で断言している」と主張し、補助金対象にしなかった。そこで、この報告書の著者達に電話で「市販品を試していないのに、全ての撃退器の効果を否定してはいけない」と指摘した。すると、江口氏ら著者3人もが「撃退器には効かないものが多いので、農家に注意喚起せねばならない。反論があるなら、論文でやって下さい」というような回答をした。「撃退器に効果が無い」ことを証明することは簡単だ。この報告書のように、餌付けして人慣れしたシカを使えばいいし、安物のスピーカーを使えばいい。しかし「撃退器に効果が有る」ことを証明するのは難しく、まさに「悪魔の証明」である。私は知恵を絞って、効果的で、安価で、使いやすい機種を開発してきた。しかし、怪我をしているシカのように警戒心がない個体は、撃退器の前をうろつく。撃退器で完全に獣害

を防ぐことは難しいのは事実だが、それは、柵でも同じである。民間の努力を無視して「撃退器は全てダメ」と役人が結論するのは、既得権益を守るための愚行である。私は、江口氏らに「撃退器には効かないものが多いから、効果が得られる機種を開発している。この報告書で否定したユーソニックは効果が認められ、トヨタは車の置き場に、近鉄は線路で使っている」と指摘した。それでも、この報告書はネットに置かれたままである。筆者は、江口氏を評価しているようだが、「同じ穴の貉」とはよく言ったものだ。

【152～153 頁】何より防護柵はメンテナンスが重要である。多大な手間とコストをかけて設置したのに、その後を放置すると、雑草や雑木に覆われて効果を減じる。1 ヶ所のほころびが全体に広がる。誰が定期的にメンテナンスを担うか決めておかないと、すぐ柵の役目が失われる。そもそも防護そのものを面倒がる農家も多いと聞く。兼業化しているうえに高齢化が進んだからだろう。「畑を柵で囲んだのに被害が出た」と言うので調べたところ、柵の出入り口を閉め忘れていたケースが意外と多いそうだ。閉めても鍵をかけないと、扉を揺すったり体当たりしたりして開けられる。サルの場合は、鍵そのものを器用に開けてしまう。また集落全体を柵で囲む場合も、一重ではすぐ破られる。分割して囲う必要がある。そもそも道路や河川は封鎖できないから、工夫も必要だ。なお林業地でも、植林したらその区域に柵を設けることが増えたが、地形が複雑なうえメンテナンスも滅多にできないから効果は出にくい。私の参加した植林地でも、その周りを全部防護柵で囲んだ。ところが、後にその柵の見回りに同行したら、各所に穴が空けられていた。「本当にシカ？」と思えるほど、金網をねじ切っていたり、支柱を倒したりしている。「この山のシカはベンチを持っている」という冗談が出たほどだ。

【コメント】学者や役人は「柵は効果的。柵が破られるのは農家のメンテナンスが悪いからだ」と言うが、そもそもメンテナンスできない道具は役に立たない。日本人は、プラスチックや鉄に頼り、鉄とプラスチックを使った柵が日本中に設置されている。学者、役人、ジャーナリストは、農山村の現状を知らないから、鉄とプラスチックの柵を推奨してきた。柵の設置には7割以上の補助金が付くが、撃退器には補助金が付かなかった。踏襲主義、既得権益のせいである。だから、農林家による獣害対策は、柵の設置がメインになっている。鉄とプラスチックの柵は、20年もすれば朽ち果ててゴミになるが、そのゴミの廃棄には多大の経費が必要になる。柵の設置には、お金がかかるし、手間もかかるし、見た目も悪いし、なにより環境にも悪影響を及ぼす。撤去が難しいので、土地管理の邪魔になり、結果として獣害を助長する。獣にとって安全な土地が増えた(=放棄された土地が増えた)ので獣害が増えた。鉄やプラスチックの柵を設置すれば、周辺の樹木や竹は伐採できなくなり、土地は放置され、獣害が助長される。撤去できない柵の設置→耕作放棄地の増加→獣の住処や餌場の増加→獣害の増加という悪循環が起こっている。農山村の過去から現在までの状況を知らない人は、この悪循環に気付かない。柵に頼るのは無策だ。そこで、鳥獣撃退器を開発した。南丹市が撃退器を貸し出す調査を行ったところ、好評で、南丹市と、その周辺地域では補助金対象になった。

スイスの山村では、栗園に木製柵が設置されていた。そこで、木と竹を使った柵を開発した (<https://www.youtube.com/watch?v=9vgoXJdYnvg&t=240s>)。アースドライバーで土に穴を掘り、その穴にボイド管(紙で作った筒)を木槌で打ち込み、その穴に間伐材から作

った丸棒を挿入する。そして、放置竹林から竹を切り出して 3.5m に切りそろえ、シュロ縄で丸棒に結びつけた。金属柵に比べて設置費は 10 分の 1、景観的にも美しい。竹と木を利用するので「竹林の拡大阻止」と「間伐材の利用促進」にも貢献できる。竹と木は、放置しても腐って自然に戻る。撤去が容易なので土地管理の邪魔にならない。木と竹の柵は意外と長持したし、人家近くでは獣の侵入が防げた。人家から離れた栗園では、シカの侵入を許したが、そのような場合は撃退器を設置したり、有刺鉄線を張り巡らせたり、下部だけを安価なネット（高さ 1m×長さ 50m のネットはコメリで 2000 円）で覆うなどの工夫もしている。実験中だが、鉄やプラスチックだけの柵と同様の効果は得られるはずだ。

【153 頁】最近はずりシェルターが使われる。苗木 1 本 1 本に筒状のカバーをかぶせるものだ。効果は高いが、苗が生長して筒から飛び出すと食われる。当たり前だが…。これも成長に合わせたメンテナンスが必要だ。そして設置費が高くつく。結局「防護」は、当事者意識がないと効果は限定的だ。

【コメント】ずりシェルターの販売を担っている方と、2021 年 8 月 28 日、京都市内の展示会で会った。私が「ずりシェルターは、京都府立大学でお世話になった林学科の H 氏が関わっていた」と言うと、その方は「私も京都府立大学の卒業生。林学科ではなく文学部。H 氏はバスケット部の顧問で、バスケット部だった私が販売を手伝ってきた」と教えてくれた。その方は私よりも 1 年後輩で、林学科出身者よりも現場のことを知っていた。私が京都府立大学に入学した当時、林学科と文学部とでは偏差値がずいぶんと違っていた。文学部出身者が獣害対策を担っていたら、日本の獣害はもう少しマシだったかもしれない。

【153～154 頁】最後に「予防」がある。最初から寄せ付けないことだ。農作物という「美味しい餌」を覚えている個体は繰り返しやってくる。なぜ味を覚えたのか。そうしたことを知らねばならないのだが、農家は意外にも無頓着である。里に来た動物が最初に狙うのは、収穫する農作物よりも農業廃棄物だ。農地には間引いたり出来の悪かった作物が捨てられ、カキやクリ、ミカンなど実を付けたままの果樹がある。田んぼの稲刈り取り後のヒコバエが生え、ときに穂まで実らせる。すでに野生動物が増えた理由として紹介したが、これらを餌とさせないことが「予防」である。

【コメント】筆者は「獣が里に寄ってきたのは美味しい餌のせいだ」と決めつけている。40 年前、シカやクマ、サルは見ることもすらくなく、イノシシも夜中に水田を襲う程度だった。今よりも、カキやクリは多かったし、出来の悪い野菜は水田に肥料として撒いていたが、それを食う獣はいなかった。化学肥料を使わなかった 60 年前、草を農地に撒いていたが、その草（最高の餌）を食う獣もいなかった。60 年前、集落での人間活動は活発だった。犬や家畜が自由に動いていた。煮炊きも風呂も火を使い、焚き火も頻繁で、集落には煙が棚引いていた。大学 1 回生の春（1985 年の春）、2 ヶ月ほどたって実家に里帰りの。久しぶりに集落に戻って「こんなにも焦げ臭かったのか」と驚いた。オクドサンや五右衛門風呂が残っていたし、農家も多く、夕方には焚き火の煙が昇っていた。そうした煙の香りは、安堵感を与えてくれた。森で暮らしていたサルは、草原に出て猿人→原人→旧人と進化した。旧人のホモエレクトス（北京原人）が、少なくとも 50 万年前に火を焚いた。その煙や火で、獣を遠ざけた。だから、人は、かがり火程度の明かりがあるほうが熟睡できる。私

が、煙の香りに安堵感を感じたのも DNA のせいだろう。都会で暮らす現代人は、化石燃料の臭いに馴れてしまって、人体に悪影響があるガソリンの臭いを好む人もいる。しかし、木が燃えて発せられる煙に対しては「洗濯物が汚れる」「喘息が酷くなる」「火災が怖い」などと毛嫌いする。煙の香りを嫌がる人も増えているのだろう。

1970年代に野良犬を駆除し、犬や家畜を縛り付けるようになった。過疎も進み、子供が外で遊ぶ声もなくなった。就農者が減り、獣を追い払う行為が減った。それによってシカ、クマ、サルが出没しはじめた。オクドサンや五右衛門風呂は壊され、1997年、ダイオキシン問題で焚き火もしなくなった。獣が最も怖がる火が、里から消え去った。江戸時代以前から、日本中でやっている焚き火がある。盆の終わりの焚き火（送り火）と、正月の終わりの焚き火（トンド焼き）だ。盆や正月は、野良仕事で外に出ることが減るため、獣が里に近づくことになる。盆と正月の終わりに火を焚くのは、獣を遠ざける風習が起源かもしれない。とんど焼きは「正月の終わりに村はずれで火を焚いたのが起源」とされている。

農山村の暮らしを知らぬ者は、獣が美味しい餌に惹きつけられて、里に出てくるようになったと決めつけている。里が獣にとって安全になったので、獣が里に出てくるようになったと考えている人は少ない。獣害を「予防」するためには、獣の餌を減らすことよりも、里を獣にとって危険な場所に戻すことのほうが重要だ。具体的には、人を増やし、火を炊き、イヌや家畜を放し飼いにすべきだ。

木を燃料として使わなくなったことは、地球温暖化やナラ枯れも助長している。京都議定書が締結された京都国際会館に隣接する宝ヶ池公園で、2011年、ナラ枯れ木を炭にしたことがあった。東大のK教授は「カシナガは近年になって海外からやっただ虫で、カシナガが運ぶ病原菌に抵抗力が無い木が枯れている」と主張したこともあった。しかし、私は「化石燃料に頼るようになって薪炭林が放置されて伐採されなくなったナラ類が大径化した。元々日本にいたカシナガは大径木でよく育つのでナラ枯れが拡大している」ということを多数の論文で示した。その後、江戸時代にもナラ枯れが発生していたことを示す古文書が発見されたり、DNA分析によってカシナガが古くから日本にいたことも判った。これらのことから、カシナガ外来種説は否定され、私が唱えたカシナガ在来種説が残った。カシナガが海外から来た害虫なら、数を減らすのは困難であるが、カシナガは日本にこれまでからいた虫なので、ナラ枯れ木（カシナガが繁殖している木）を炭や薪として利用すればナラ枯れは減らせる。この方法は、戦前までやられていた方法で、農薬を使わないので環境にも優しい。そこで、宝ヶ池公園でナラ枯れ木を140本伐採し、移動式炭窯で炭を焼いた。できあがった炭を活性炭にして宝ヶ池の水の浄化に使うというアイデアだった。消防署も賛同してくれたのだが、煙を見て驚いた市民からの苦情が殺到し、警官が何度も現場に来る事態となり、しかたなく中止した。ナラ枯れ木20tのうち2tしか炭にできなかった。残り18tを放置するとカシナガが出てきて新たな被害を起こす。そこで、実家に運び込んで、正月休みの間に割って薪にした。早くしないとカシナガが出てくるので、3日間で割った。その時の様子を近所の人が撮影してYoutubeにアップしたところ、40万回以上も再生されている。<https://www.youtube.com/watch?v=45DK2s3tt2s&t=9s>

この薪割り、殺人未遂事件による肋骨骨折の後遺症を緩和することも目的であった。薪割りによって肋骨を筋肉で覆った結果、痛みは和らいだ。ただし、以前から気になっていた振動病（白蟻病）は悪化した。できあがった薪は、末端価格にすると100万円くらい

の量で、製材所の経営に苦しんでいた親戚のO氏に「出世払いだ」と言って無償で譲った。薪を取りに来た青年も梅棹忠夫博士の孫であった。そんな縁もあり、梅棹忠夫博士が建設した建物で、焼栗とワインのイベントを開催した。ヨーロッパでの収穫祭は、伝統的に、栗とワインが主役である。それは「サンマルティーノ」と呼ばれるイベントで、薪が大量に使用され、焼栗に使う鍋ではジビエも焼かれる。アメリカでは、アジアから持ち込んだ栗苗についていた胴枯病菌で栗が絶滅した。栗がないから、収穫祭では、栗の代わりにカボチャが用いられるようになったのかもしれない。いずれにしても、東京でのハロウィーンは下品で、時代祭や葵祭、祇園祭をする京都ではあり得ない。そのことを青山でブティックを経営するHさんに伝えたら「あなた。この店でサンマルティーノをしなさいよ」と言ってくださった。京都丹波栗の会を立ち上げていたので、令和元年11月23日、会員6名で、2台の車で丹波栗と焼栗機を運び込み、サンマルティーノを開催した。4時間ほどの会だったが、Hさんを慕う著名人など大勢が参加して下さった。キーハンターという一世を風靡したドラマのファンである丹波栗会員は、そのドラマに出ていた女優さんとツーショットの写真を撮っていた。私は、本田宗一郎氏の息子さんと農山村問題について議論できたことが嬉しかった。東京で暮らす息子も、このイベントに参加して丹波栗のすごさを知り、たまに京都に戻って焼栗をするようになった。サンマルティーノの様子は、京都丹波栗の会のHPにも掲載している。後で気づいたのだが、会場のブティックの玄関に、瀕死の栗樹があり、別の日、息子と2人で、クリタマバチを除去したり、私が開発したメイカコート（テッポウムシ予防樹脂フィルムの名で売られている資材）を塗布した。すると、その栗樹は元気になった。その帰途、車で聞いたラジオ番組で、上述した「愛と意志が強ければ運がむいて縁ができ、縁は恩でつながる」を聞いて納得した。会場を無償で貸して下さいましたHさんは、東京のど真ん中で育ったのに「日本の茅葺き民家は守る必要がある」と言うような方で、日本のジビエも好物である。

農林業で、廃棄物を燃やすことは例外的に許されている（衛環第78号）。なぜなら、病虫害を駆除するためには、農薬を使うよりも火を使うほうが確実に環境にも優しいからである。クリ栽培では焚き火は必要である。枝やイガを燃やした灰は、肥料になり、化学肥料よりも環境に優しい。クリタマバチやクスサンのような枝葉の害虫、シロスジカミキリのような幹の害虫、モモノゴマダラノメイガのような実の害虫、いずれも、枝葉や幹、イガを燃やすことで駆除でき、農薬散布よりも効果的である。だから、私は、しょっちゅう焚き火をしてきた。もちろん消防署に届けて実施している。しかし、焚き火をすると、警官に叱られることがある。環境省が出した「衛環78号」の通達内容を役人（市町村職員や警官）は理解していない。火を焚けば、事件とされ、罰金刑などが科せられる事も多い。

警官に焚き火の必要性を説明しても理解してくれなかったので口論になったことがある。口論している間に大きなサクラの枯木に類焼した。私は「作業の手を止めるから類焼した。消防署に通報して消してもらえ」と言った。消防署が出動すると有事になり、警官は始末書を書かねばならない。警官は「なんとかしてくれ」と私に懇願した。そこで、家からチェーンソーを持って来て、警官達の目の前に古木を倒した。その迫力に驚いた警官達に「林業では焚き火は必須。俺は林業を小さい頃からやってきたので火の扱いにも慣れている。素人がプロの仕事に口出しするな」と怒った。警官達は、そそくさと帰っていった。ただ、その後も、同じ警官と口論になることがあった。そんなことが続いていた中、

2021年2月12日、耕作放棄地で栗の剪定枝を燃やしているとき、警官達は私服でパトロールして私の焚き火に気付く、制服に着替えてやってきた。そして、少しでもビニールが混じっていたことを理由に事件扱いにした。現場で4時間、警察署で10時間以上も取り調べを受けた。怨恨からの取り調べであるから、5人の警官は「罪を認めろ」と強引に要求した。警官が取調中に興奮し、バインダーを投げつけた。それでも「湿ったビニールが混じっていたが、あれはマルチの一部で排除できなかった。火にくべて乾燥してから取り除いていた。ビニールを燃やすつもりで焚き火したのではない」と容疑を否認した。そして、衛環第78号の第一二（廃棄物の焼却禁止）の以下の内容を説明した。

***ここから

- ・焼却禁止の規定は、これまで行政処分では適切な取締りが困難であった悪質な産業廃棄物処理業者や無許可業者による廃棄物の焼却に対して、これらを罰則の対象とすることにより取締りの実効を上げるためのものであることから、罰則の対象とすることに馴染まないものについて、例外を設けている。
- ・農業、林業又は漁業を営むためにやむを得ないものとして行われる廃棄物の焼却としては、農業者が行う稲ワラ等の焼却、林業者が行う伐採した枝条等の焼却、漁業者が行う漁網に付着した海産物の焼却などが考えられる。
- ・生活環境の保全上著しい支障を生ずる廃ビニールの焼却はこれに含まれるものではない。

***ここまで

この記述によると、排除できない（少量の）ビニールの混入は許されている。しかし、警官は「廃ビニールの焼却はこれに含まれるものではない」との部分から「ビニールは1gでも混じってはいけない」と解釈していた。環境省に確認したが「農林業者は従前どおり焚き火はできる。環境に多大な影響を与えるビニールハウスのビニールのような大量のビニールは燃やせない」と説明してくれた。その環境省職員に「警官や市役所職員は、焚き火に1gでもビニールが混じったら違法だと思い込んでいる」と伝えたら「本当ですか」と驚いていた。警官は「必ず書類送検する」と言って、その後も、私を警察署に呼び出した。そこで、京都府警本部に「不条理な取り調べを受けた」と陳情した。その後、半年以上、音沙汰がない。農林家による焚き火は、農薬や化学肥料を減らすことになり、化石燃料で焼却するよりもSDGsにもかなう。しかし、環境教育が欠落している日本では、警官はSDGsという用語すら知らなかった。筆者が、焚き火の禁止が獣害の要因であることに気付かないのも、環境教育を受けてないためであろう。しかし「日本唯一の森林ジャーナリスト」と自称しているのなら、焚き火の禁止によって、林業者や造園業者が困っている現状は世間に伝えるべきだ。

私の焚き火が事件になったことについては、まだ解決していない。私を取り調べた警官は「小林さんは公務員であり、農業者じゃないので焚き火は犯罪になる」と言った。公務員が農業を兼業できることを知らないのだ。私が公務員と農業を兼業している事実は、書類送検された場合、検察官に話す内容である。おそらく、それを知った検察官は、私を有罪にすることはできないだろう。農業と兼業している事実を警官に話さないのは、焚き火を犯罪行為と決めている状況を改善するためである。水戸黄門という時代劇では、印籠を先に見せたりしない。ウルトラマンでも、ピンチになってからしかスペシウム光線は放たない。訴訟で勝つためには、証拠が重要であるが、決定的な証拠は最後に出したり、場

合によっては、ちらつかせるだけで提出しないことも有効である。私に心労（新幹線を止めてしまうほどの）を与えた上司のK氏は、部下（私の同僚）の自殺について「あの自殺も検証していない。職場内の喧嘩が自殺に影響したが、それを認めると、京都府組織が悪かったことになる。俺には組織を守る義務がある」と言った。京都府組織を守るために公務災害であることを隠蔽したのではない、自分を守るためだった。この不条理な行為によって、遺族は自殺原因が判らず、遺族補償年金や遺族特別援護金なども受け取ることができなかった。あまりにも酷い発言なので、録音しておいたが、訴訟では、K氏ら被告は「そんなことは言っていない」と主張したため、「言った言わない」が争点になった。この場合、訴訟を早く終えたい弁護士なら、その会話記録を提出するだろう。しかし、その会話記録を提出したら「小林に誘導された」と反論されるだけである。そこで、最後まで「会話記録がある」と主張ながら、その証拠は提出しなかった。すると、被告側は、会話記録が無いと判断し、嘘をつきとおした。裁判は長くなったが、証拠調べ（関係者の尋問）が終わり、判決を待つだけになった段階で、実際の会話記録を Youtube に限定アップした。そして、裁判官に「会話記録を Youtube に限定アップした。これを聞いていただければ被告に非があることは判ってもらえる。これほどの証拠があるのに、私が敗訴するなら、三権分立の原則が日本で守られていないことになる。裁判所に訴えても無駄なら、世間に問うため、限定を解除して公開する」との上申書を提出した。それが功を奏したかは判らないが、多くの弁護士が「絶対に勝てない」と言った訴訟で一部勝訴を勝ち取った。

【154 頁】 農業廃棄物を放置しない、餌になりそうなものは全部取る、農地周辺でシカやイノシシを見かけたら必ず追う、といった措置が重要だ。野生動物に人里は危険だと思わせ、何より農作物の「美味しさ」を教えないようにしなければならない。そうした知識を身につけた人に与えられる資格もある。農作物野生鳥獣被害対策アドバイザー（農水省）、鳥獣保護管理プランナーと鳥獣保護管理捕獲コーディネーター（環境省）などだ。自治体でも研修を行い、農家に指導と普及活動を行っている。

【コメント】 農水省は、2006年7月1日から、野生鳥獣による農作物被害防止対策を効果的に実施するため、野生鳥獣の生態・行動や農作物被害防止対策に関する専門的な知識や経験を有する者をアドバイザーとして登録し、地域の要請に応じて紹介する取り組みを開始した。2021年現在、221人が農作物野生鳥獣被害対策アドバイザーとして登録されている。しかし、本当に専門的な知識を有しているのだろうか。農作物野生鳥獣被害対策アドバイザーは、地方農政局、地方公共団体、公的試験研究機関、大学、その他これらに準ずる公的機関が実績等から判断し、野生鳥獣の生態、行動等に関する専門的な知識を有すると認める者又は野生鳥獣による農作物被害防止対策に関する相当の知識及び経験を有すると認める者をアドバイザーの候補者として農水省に推薦し、農村振興局長が、推薦者が要件を満たすと判断した場合に登録している。このアドバイザーの中には、大学の同級生でナラ枯れ研究を共同した人物もいるが、その人物は都会でしか生活したことがなく、獣害対策に役立つ助言ができるとは思えない。受験勉強に励み、資格によってしか自分の価値がアピールできない人物では、獣害対策に有効な助言はできない。もし、農作物野生鳥獣被害対策アドバイザーが有意義なら、これほど獣害は深刻になっていないはずだ。

東京ビックサイトで、鳥獣撃退器を展示した際、1時間ほど獣害について講演した。獣

害の歴史、獣害の増加要因、鳥獣撃退器やドローンを使った撃退などを説明した。その講演は好評だったようで、その後、3度も、展示会で講演することになった。農作物野生鳥獣被害対策アドバイザーの中に、私のような講演ができる人はいるのだろうか。

【155 頁】昔の農山村集落では、イヌの放し飼いやウシなどの放牧が行われていた。それは野生動物を追い払う効果がいくらかあったからだろう。番犬もしくは大型動物の存在が「防護」と「予防」の両面を持っていたのである。そこで放棄農地や森林にウシやヤギを放牧することで獣害発生を減らす試みも行われている。草刈り効果もあるうえ、大型動物の気配が、野生のイノシシやシカの警戒を呼び起こすのである。

【コメント】1685年、生類憐れみの令が発布され、獣を殺すことができなくなった結果、シカやイノシシの個体数は増えた。今より多かったかもしれない。今より少なかったとしても、当時の農山村では、ほとんどの人が農林業に従事していたのだから、獣害は、今より激しかったはずである。それが証拠に、多くの農山村では集落を取り囲むシシ垣が設置された。明治時代になって、日清・日露戦争に徴兵された民間人が銃の扱いを覚え、しかも、安価で高性能な村田銃が出回った。明治政府は、狩猟を奨励したので、獣は銃殺されて一気に減った。獣害がなくなるとシシ垣も崩壊した。シシ垣がなくても、大勢が獣を追い払ったし、家畜や犬もいたし、獣が怖がる煙の香りが常に漂っていた。半世紀前まで、農山村は、獣にとって危険な場所だった。それが、人口減少、野良犬の駆逐、放し飼いにされる家畜や犬の減少、焚き火の禁止によって、獣にとって安全な場所になった。筆者は「イヌの放し飼いやウシなどの放牧が、野生動物を追い払う効果がいくらかあった」と書いていることから、犬や家畜が獣を追い払っていた効果を軽視している。そもそも、野生動物が最も怖がるのは人である。とくに、人が火を使わなくなったことが大きく影響しており、1997年の焚き火の禁止を契機に全国で獣害が激烈になった。

筆者は、実践せずに、見聞きしたことを書いているが、私は実践してきた。20年ほど前、栗園でヤギを飼う試験に関わったが、餌やりが大変すぎた。15年ほど前、獣害対策として放置竹林にウシを放牧したが、ウシが風邪を引いて死んでしまった。そんな経験から、訓練したイヌを使うべきだと考え、丹波栗栽培者には「獣害が酷ければ、栗園内で猟犬を放し飼いにすればいい」と提案した。実行した人もいるが、猟犬も栗園だけにいると体調を崩して死ぬことがあった。また、猟犬を飼うのは経費もかかる。ヒツジは草しか食べないが、ヤギは草の他に栗の樹皮や実も食べる。スイスの栗園ではヒツジを放牧し、草刈りと獣害防止を図っていた。そこで、2頭のヒツジをレンタルして放牧してみた。カワイイので、地域の人気者にはなったが、2頭だけでは草刈りには不十分だった。また、道に糞をまき散らすので、その掃除に苦労した。さらに、日本の夏はヒツジにとって暑すぎた。ヒツジが行方不明になったので、近所の人にも手伝っていただいて捜索したら、由良川近くのカヌー格納庫に潜んでいた。格納庫はコンクリート製で、中がヒンヤリしていた。ヒツジは、その中で熱さをしのいでいた。2ヶ月間レンタルする予定であったが、死んだり、行方不明になると10万円を支払う契約だったので、1ヶ月間で返した。既に愛着が沸いていたので別れるのが辛かった。実践しながら、いろいろな資材も開発した。猟師、学者、役人、農林家、メーカー社員など、多くの人と議論した。農作物野生鳥獣被害対策アドバイザー、鳥獣保護管理プランナー、鳥獣保護管理捕獲コーディネーターで、私ほど実践し

た人、私ほど多くの人と議論した人はいるだろうか。資格に税金を使うくらいなら、獣を追い払う訓練をしたイヌを獣害に困っている地域にレンタルすべきだ。松茸を探し出す訓練をしたイヌなら、私でも年に50万円払って借りる。

【155 頁】最後に、新しく考え出されたシカの駆除方法も紹介しておこう。静岡県農林技術研究所森林・林業研究センターが開発した硝酸塩入りの餌を食べさせる方法だ。シカやウシなどの反芻動物はいったん飲み込んだ食べ物を口の中にもどし、噛み直す動作を繰り返す。そしてかみ砕いた植物細胞などを胃内の微生物に分解させるのだが、その過程で硝酸塩が硝酸イオンに変わる。この硝酸イオンが赤血球のヘモグロビンを酸素運搬能力のないメトヘモグロビンに変えると、酸素欠乏症に陥るのだ。そこで、硝酸塩入りの餌を散布し、シカに食べさせることで死に至らしめる作戦である。

【コメント】静岡県の研究所の方法は、毒殺として批判されたが、批判した人が批判を受ける事態となった。「獣害は農山村の大問題。実情を知らぬ者が批判するな」という批判の声が上がった。そこでYahooがアンケートした結果、この方法に賛同する人のほうが多かった。この方法が学会で口頭発表された際、居合わせた私は「獣害は柵による防御と、猟による駆除しかやっていない。新しい取り組みが必要だ。期待している」とコメントした。その後、開発者と電話で議論した。開発者は「硝酸塩は毒物ではないので毒殺ではない」と言っていた。ただし、硝酸塩が混じった餌を食べたシカは、いつどこで死ぬか判らないので利用が難しい。軒先で死なれても困る。この方法は普及しいだろうが、既得権益のために新しいことに取り組みにくい中で、「新しい方策が必要だ」という一石を投じた。

【158～159 頁】これまで、日本全国で獣害が苛烈を極める様子を紹介してきた。ようやく事態の深刻さに世間の人々も気付き始めて、行政も獣害対策に取り組むようになってきた。ただ、その際に行われる説明に、多少の違和感がある。というのは「これほど獣害が増加したのは日本史上初めて」で、獣害問題の裏には「現代の日本が、自然界を大きくかえてしまったからではないのか」と、野生動物が増えた原因を現代社会に求める傾向にあることだ。その点は、研究者も同じような言葉を発しているケースが少なくない。本当に「日本史上初めて」だろうか。かつて日本人と野生動物は上手く棲み分けて、それぞれが平和に暮らしていたのだろうか。それなのに人間が奥山を開発したことでバランスが崩れ、動物はやむを得ず人里まで出没し始めたのだろうか。現代の農作物に対する獣害（主にイノシシやシカによるもの）が指摘されるようになったのは、1980年代以降である。それ以前にもニホンカモシカの植林地被害が問題になったりもしたが、まだ奥山に限られていた。農作物被害でも、まだ農家の我慢できる範囲内に収まっていた。戦前も、獣害問題が強く取り上げられた形跡は見当たらない。しかし時代をさらに遡り、江戸時代の様子をうかがうと、現代とまったくそっくりな、むしろ今以上に獣害が苛烈を極めていた状況が浮かび上がる。「鉄砲を手放さなかった百姓たち」（朝日新聞出版）によると、江戸時代には武士より農民の方が多くの鉄砲を持っていたそうだが、その理由は獣害対策だった。この本では農山村から出された多くの行政文書から実例を紹介しているが、なかには「田畑の6割を荒らされた」「農作物が全滅した」という嘆願書が並び、年貢が納められなくなって大幅に減免してもらった記録もある。だから、藩や代官に駆除のため鉄砲の使用を願い出

ているのだ。また藩を上げて害獣を駆除した例もある。各地でイノシシやシカを大々的に駆除した記録があるのだ。それは農民だけに任せず、侍も全面に出て行く大作戦だった。たとえば東北の秋田藩では、男鹿半島でシカの駆除事業を展開した。記録では1712年に3000頭、1751年に9300頭と捕獲したが、1772年にはなんと2万7000頭も獲ったという。また弘前藩も江戸時代から継続的にシカをとり続けて、1910年に絶滅宣言を出している。対馬藩でも、1700年から9年がかりで「猪鹿追詰（いじかおいつめ）と名付けられた全島挙げての駆除が行われ、8万頭以上を駆除しイノシシを絶滅に追い込んだ。シカは完全に駆除せず一部を残した。この時代は、徳川綱吉が将軍で「生類憐れみの令」が出ていた時期である。

【コメント】この部分は参考になる。江戸時代の方が、獣害が激しかった可能性については、山林（2013）に以下のように記述した。

***ここから

江戸時代の獣害の深刻さは定かではない。しかし、知井村史には水稻の収穫が皆無になった事例も紹介されている。現在では、それほど酷い獣害は聞いたことがない。また、「庄屋狩り」で素人が50頭近くを捕獲した事実や、重機がない時代にシシ垣を設けて集落を獣から守っていたことを考えると、江戸時代の獣害は今よりも深刻であった可能性が高い。シシ垣の土木工事量を試算してみたが、日本中の集落周辺に、高さ2m×幅1mの土塁を設けた場合、その土木工事で発生する土の量は万里の長城を上回った。私が暮らす集落にはシシ垣の痕跡があり、重機の操作に慣れている若者が多いため、シシ垣の復活を提案したことがある。しかし、経費が膨大で諦めてしまった。野生動物による被害額がそれだけ少ないことになる。明治時代になって鉄砲の所持が自由となり、シカをはじめとする野生動物は絶滅の危機に瀕した。百年以上も獣害に悩まされることがない時代が続いたため、シシ垣の消滅と共に、過去の獣害も忘れ去られたのであろう。江戸時代の人達がどのような対策をしていたのかを熟慮せずに、小手先の対策を行っているのが現状である。柵が使えたのに、それを用いずにシシ垣を建設した江戸時代の人々が、柵で囲まれた現在の集落を見れば、「そんな小手先のことで獣から里は守れないぞ」と言うであろう。野生動物の保護も重要だが、先人達がやっていたように、人が暮らす場所と野生動物が暮らす場所をシシ垣などで分離することが先決である。また、それでも侵入した獣は捕って利用（食べる）すべきだ。自然保護団体が野生動物の絶滅を心配するのもいいが、農山村での暮らしや日本文化の喪失、希少植物の絶滅も心配して欲しい。

***ここまで

「庄屋狩り」とは、村人が総出で、シカやイノシシを追い立ててシシ垣に落として槍で突いて仕留めた猟である。鉄砲を持つ者が数名いたが、それは、獣が反撃して危険なときに使用するためのものだった。

江戸時代の凶作は、火山の噴火による冷夏や、中国大陸からのウンカの飛来によって発生することが多かった。美山町では、気象害や虫害による凶作の場合は減免されなかったが、獣害による凶作は減免された。そのため、農民は、よほど困った時、寺の住職に依頼して「獣害なので減免して欲しい」という文書を書いてもらって役所に提出した。気象害や虫害は、自然現象であり、誰の責任でもないが、獣害は役人の責任だったのであろう。江戸時代の人々が、現在の日本の獣害を見たら、「役人は、なにをしているのだ。消防団

や自衛隊があるのだから、一気に獣を駆除すべき」と言うだろう。今の役人は「獣害も自然現象で、私達には責任は無い」と考えているが、丹波栗栽培者は「獣害は、役人の怠慢で起こった人災だ」と考えている。

江戸時代、減免を直訴すると死罪になることもあった。美山町内久保には、減免を直訴した人がいた。その人は、死罪を言い渡され、ムシロに撒かれて由良川に流された。ただし、ムシロの中から3本の指を出して3割の減免を求めたため、その減免は認められた。おそらく、直訴人と役人との間で合意があったのだろう。直訴人を死罪にせず減免を認めたら、減免の直訴が頻発して収拾が付かなくなる。かといって、命がけで直訴した人を簡単に殺すわけにもいかない。役人は「ムシロの中から指を3本出せ。それで減免してやる」と約束した可能性がある。その証拠に、直訴して死罪になった人の石碑が建立され、毎年、その人を偲ぶ祭事が行われている。大庄屋であったご先祖様が、この事件にどのように関わったかは不明だが「直訴人側に立ち、役人と交渉した」と想像している。

シシ垣は、かなり昔からあった。弥生時代の村には、周囲に溝があり、環濠集落と呼ばれている。私の焼栗を買いに来た人が、栗について質問するので回答していたら、「話が面白いので、私の職場で講演して欲しい」と言った。そして、実際に、2018年2月24日「縄文人と栗」というテーマで講演するため、滋賀県守山の下之郷遺跡（環濠集落跡）に行った。講演会場の説明パネルに「環濠は敵の侵入を防ぐために建設された」と書いてあったので、急遽、講演前に、以下のように指摘した。

***ここから

現代人には、古代人が作った環濠の役割もわからない。私のように限界集落の区長をしたらわかる。この程度の溝では人の攻撃からは守れない。そもそも、弥生時代は、原始共産制に近く、今より平等な社会で、集落を襲う略奪行為はなかった。今も昔も、最も怖いのは火災である。食料を備蓄する「村」と食料を獲得する「森」の両方が焼けたら、たちまち暮らしが成り立たなくなり、移住しなければ餓死することになる。環濠は「村」と「森」を隔てる防火帯であった。また、シカやイノシシは重要な食料で、かつ、農作物を食い荒らす害獣でもある。環濠は江戸時代まで存在していたシシ垣と同じで、獣から農作物を守るための防護壁であり、かつ、獣を効率よく捕獲するための装置であった。

***ここまで

この説を聞いた人が「環濠からは武器が見つかる」と反論したので「武器なら我が家にも、槍、日本刀、弓矢など多数が残っている。それらは戦争するためのものではなく、葬式などの祭事で使う道具だ」と教えた。また「環濠は3重で、外周が浅く、内側が最も深く、内側の溝には獣を落とすための縦穴があったはずだ。その縦穴からイノシシやシカの骨が出てきただろう」と指摘したら「確かにそうだ」と返事があり、納得された様子だった。「小林さんは、まるで、過去を見てきたように歴史を語る」と言う人がいたので、「江戸時代に建てられた重要文化財で暮らし、縄文人のように栗を栽培し、弥生人と変わらぬ方法で農業もしている。過去を見てきたのではなく、過去にいる」と返答した。講演時間は3時間に延長され、講演後の質疑応答は2時間以上になった。

生類憐れみの令は、綱吉の悪政の象徴だが、ルーズベルト大統領が大恐慌による不況を克服するために実施したニューディール政策（社会経済政策）のように、民に仕事を与えるためのものだった可能性がある。エジプトでのピラミッドの建設や、中国での万里の長

城の建設も、そのような役割があったかもしれない。いずれにしても、シカやイノシシを一切殺してはならないと決めれば、シシ垣を完璧にするための大規模公共事業が不可欠になる。戦国時代が終わって、戦での武功を立てられなくなった役人や、城建設に関わらなくなった役人にとって、シシ垣の建設は、就労の場になったはずだ。

【162 頁】今は希少種でも、数が増えると被害を発生させる動物は多いのだ。

【コメント】獣害が激しくなった頃から、ナラ枯れも各地で拡大した。ナラ枯れは、カシナガによる物理的破壊と、カシナガが持ち込むナラ菌という病原菌によってブナ科樹木(主にナラ類)が集団的に枯れる被害である。化石燃料や原発に頼るようになり、薪炭林が放置され、ナラ類が大径化した。カシナガは、ナラ類大径木を利用して爆発的に増える。どこにでもいるカシナガが、数が増えることでナラ枯れを発生させている。このように「ただの虫」が増えることで虫害を起こすケースは多い。

筆者は「餌が増えたから野生動物が増え、獣害が増えた」と主張している。一方で「野生動物の数を減らしても獣害は減らない」と記述している。これが矛盾していることに気付いていない。実際には、餌が増えたから野生動物が増えたのではない。ナラ枯れも竹の拡大も、過疎化(都市人口率の増加)が要因である。獣害も、過疎化によって人間活動が低下したことが要因である。限界集落は、獣にとって安全だから、獣が頻繁にやってきて獣害を受けるようになった。ただし、増えた野生動物を駆除して数を減らしても、集落が安全であれば、獣はすぐに増えるので獣害は減らない。

ちなみに、新型コロナによるパンデミックも、過疎化(都市人口率の増加)が要因である。横軸に「各国の都市人口率」、縦軸に「各国の人口 10 万人当たりコロナ陽性者数」のグラフを作成してみたら、それは一目瞭然であった。統計的にも「都市人口率が高い国ほどコロナ陽性者数が有意に多い」という結果になった。先進国でコロナ陽性率が高いのは、都市人口率が高いためであり、アフリカ(南アフリカを除く)や、太平洋の島々でコロナ陽性率が低いのは、都市人口率が低いためである。日本でも、東京、大阪、横浜、名古屋、福岡、札幌などでコロナ陽性者が先行して増え、それが中核都市に拡大し、やがて美山町のような過疎地にまで広がっている。日本でも、大都市が無ければ、これほど陽性者数が増えなかったはずだ。獣は過疎地域で増えやすいが、ウィルスは過密地域で増えやすい。

【163~165 頁】なぜ明治から昭和にかけて野生動物は少なかったのだろうか。原因の一つとして考えられるのは、幕藩体制下にはあった銃規制や駆除の規制が明治政府によって撤廃されたことがある。そのため「獲り放題」になった。明治政府は改めて規制をかけるのだが、そのタイムラグの間に多くの野生動物が駆逐されたと考えられる。さらに獣害対策だけでなく、食肉として鳥類のほかウサギ、シカ、イノシシなどが狙われた。江戸時代も肉食はこっそり行われていたが、明治に入ると公に奨励されるようになった。とはいえ家畜の肉はあまり出回らず、ジビエが重宝されたのである。狩猟には、高性能の銃が導入された。村田銃と呼ばれる猟銃は命中精度が高く、次弾発射までが早くて使いやすかった。これは薩摩藩の村田経芳が開発した小銃で、初の国産小銃として陸軍に採用された。それが 1880 年ごろから民間に払い下げられるのだが、火縄銃が中心だった狩猟が一新され、効率が上がった。一方で、毛皮需要が高まったことも外せない。毛皮は、欧米への輸出商品

として人気だったうえに軍事物資としても重要で、その調達のため野生動物の捕獲が奨励された。とくに日本軍が大陸へ侵攻すると、防寒用軍服などに毛皮は重要だったのだ。1880年代には軍用に毛皮を調達するための制度がつくられ、毛皮市場も形成された。現在の日本猟友会につながる組織が結成されたのもこの時期である。国の主導で狩猟者の組織化が進められたのだった。毛皮の対象となったのは、ツキノワグマにヒグマ、カモノハシ、シカ、キツネ、タヌキ、ウサギ、イタチ、オコジョ、カワウソなど多岐に渡る。よい毛皮のとれる動物は、軒並み狙われた。さらにラッコやアザラシなど海棲哺乳類も対象になった。1910年代になると、農家が副収入源として毛皮動物の養殖を始めている。小学校によるウサギの飼育も行われるようになった。現在では「命の教育のため」とされる生き物の飼育も、元は毛皮の生産事業だったのである。それというのも、野生動物が減ったからだろう。そこで在来の動物だけでなく、積極的に優秀な毛皮用動物が導入される。アナウサギ、ヒツジのほかミンクやヌートリアなどが持ち込まれて養殖対象になった。それでも毛皮は足りず、太平洋戦争中には飼い犬の供出命令まで出されている。結果的にニホンカワウソを絶滅に追い込み、逆に導入したミンクやヌートリアが逃げ出したり放逐されたりしたことから、野生化して侵入的外来種になってしまう。ともあれ野生動物は徹底的に捕獲され利用された。それが生息数を著しく落とす元になったのは間違いない。しかし、それだけでは説明がつかない。すでに幕末から野生動物の減少は進んでいたからだ。もっと根源的な理由として、日本の山野が荒廃したことが大きいと考えられる。それは近年進んだ里山の研究からも浮かび上がる。里山は必ずしも人と自然の調和の取れた美しい空間ではなく、常に人の過剰利用で荒れていた。日本人が思い描く「日本の原風景」の里山は、昭和初期まで存在しなかったというのだ。山野の荒廃は古くから進行していた。建築や道具の素材のほとんど、そして燃料も木質バイオマスに頼っていた。とくに都市が発達すれば森林も荒廃していく。住居だけでなく、寺院や宮殿、城を建築し、土器や瓦・陶器の製造、製塩、金属の精錬などの燃料に薪が求められた。もちろん炊事や暖房などの日々の暮らしにも薪が必要だった。それは周辺の森から木が大量に採取されることを意味する。人口が少なければ、自然界の回復力で復元するのだが、時代が進むと過剰利通が自然を破壊してしまう。

【コメント】この部分も参考になる。これほど過去の情報を収集したのに、なぜ「過疎が獣害の要因だ」と気付かないのだろう。

明治から昭和にかけて獣が激減したのは人口増も影響している。明治維新時の人口は3300万人だったが、100年後の1968年には3倍以上の1億人に達した。人口が、これほど急増すれば、獣を狩って肉や毛皮にする量が増えるのは当然である。当時の燃料は木質バイオマスだったから、人口増は、山野を荒廃させ、禿げ山も増やした。

日本列島にホモサピエンスがやってきたのは3~4万年前。それ以前には、類人猿や原人、旧人も日本列島にはいなかった（ことになっている）。日本には、2~3万年前までは、ナウマンゾウ、オオツノシカ、ヘラジカ、バイソン、牛の原種であるオーロックス、ヒョウなどがいた。北海道にはマンモスもいた。これらが絶滅したのは、環境変化が要因だが、ホモサピエンスが狩ったことも影響したはずだ。現在の日本では、外来種と家畜を除くと、サル、ウサギ、ヒグマ、ツキノワグマ、タヌキ、キツネ、テン、イタチ、アナグマ、ヤマネコ、シカ、カモシカ、イノシシ、キツネなど大型哺乳類は15種類くらいしか生息していない。これらは、森でも生活できる種である。哺乳類にとって最適な場所は森ではなく、

アフリカのサバンナのような草原である。樹木は背が高く、獣が食える葉や実は高い場所にあるので届かないが、草原の草は、食べやすい地面に生えている。日本列島で、ホモサピエンスが草原の支配者になると、草原でしか暮らせない哺乳類（ゾウやバイソンなど）は絶滅し、森でも暮らせる哺乳類（シカやイノシシなど）は、森へと避難した。森を主な生息場所にするのはカモシカくらいで、その他の種は、しかたなく森に逃げ込んだ。ホモサピエンスが里で増えたために獣は森へと逃げたのだから、里のホモサピエンスが減れば、獣が森から里に戻ってくるのは当然だ。実に簡単なことなのだが、著者のように都会で暮らす人には、農山村での人口減のすさまじさが想像できないのだろう。

3 万年前、どうやってホモサピエンスが日本に渡ってきたのかは謎である。この謎を解明するため、人類学者や考古学者が、古代の技術や道具で製作した木船で、台湾から沖縄へ渡海する実験に挑んだ。6年間の挑戦の末、ついに200kmの航海に成功した。ガマを使った舟での挑戦には失敗している。日本の学者は、都会で生まれ、受験の訓練をしてきた人が多いためか、発想が貧弱だ。海を渡る方法は船だけではない。そもそも見えない陸に向けて船をこぎ出すバカがいたとしても、そんなバカに、子供が産める若い女性がついていくはずがない。むしろ、ピノキオのようにクジラに乗って運ばれた可能性のほうが高い。仏教では、天上→人間→修羅→畜生→餓鬼→地獄の六道がある。人間は、他者に哀れみの心を抱くが、畜生は抱かない。オオカミは捕まえたウサギを食うときに「痛いだろう」とは思わない。しかし、ホモサピエンスは、獲物に対して哀れみを抱き「いただきます」と手をあわせて食す。哀れみを感じない人間のことを「あん畜生め！」と怒るのは、そのためだろう。人間は、他者に施しをすると見返りを求めるが、天上人は見返りを求めない。人間は陸上で頂点に立った哺乳類であり、クジラは海中で頂点に立った哺乳類である。クジラは溺れているアシカを助けることが知られている。見返りを求めない施しなので、クジラは天上人に該当する。台湾沖で釣りをしていて遭難した場合、当時、人間は捕鯨（都会を照らすための油の採取が捕鯨の目的だった）をしておらず、大量にいたクジラは人間を敵とはみなさず、溺れている人間を助けて日本列島に運んだ可能性がある。「舟をこいで日本列島に渡った」という可能性と「クジラに運ばれて日本列島に流れ着いた」という可能性の、どちらが高いかは、スーパーコンピュータを使えば検証できるはずだ。

【165～166 頁】私の住む奈良と大阪の境に横たわる生駒山地で行われた花粉分析では、12世紀をピークに二次林化（原生林が破壊され、自然に、あるいは人為的に再生すること）が急速に進み、マツ林に変わったことがわかっている。マツは痩せた土地に最後に生える樹種だ。さらに江戸時代には中腹まで棚田や段々畑が開墾され、草山化が進行した。私の幼い頃、見上げた生駒山の尾根筋は草原だった記憶がある。そんな状況は、全国の山野でもみられたのだろう。

【コメント】「マツは痩せた土地に最後に生える樹種だ」との記述は正しくない。海岸や岩場のような極端に痩せた土地ではマツしか生えないが、肥えた土地にもマツは生え、その後、異なる植生に遷移する。その場所の植生が時間経過とともに移り変わることを「植生遷移」と呼ぶ。裸地→コケ植物や地衣類の侵入→1年生植物の草原→多年生植物の草原→陽樹（マツなど）を主とした森林→陰樹を主とした森林→極相林と進むのが一般的である。マツは、植物遷移の途中段階で生える植物であり、最後に生える樹種ではない。

大学の卒論のテーマは花粉分析だった。人口が増えて都市が形成されるとマツ花粉が増えることは、各地に共通している。奈良時代や平安時代、都が置かれた地域ではマツが増え、12世紀には全国的にマツが増えた。マツ林は、人の暮らしにとって都合が良いので、人為的に維持されていた。マツ林内の木は燃料になるし、落ち葉は肥料になる。マツ林からの収奪を継続したため、陰樹が育たず、植生遷移がマツより先には進まなかった。マツタケは、貧栄養な土壌を好むため、落ち葉が掻き取られたマツ林に発生する。マツタケが減ったのは、山村の過疎化や燃料革命、化学肥料の導入によってマツ林からの収奪を止めたことで土壌が富栄養化したためである。かつては人がマツ林から栄養を収奪していたのでマツタケが異常に多かったのだ。マツタケを増やすために「地かき」という落ち葉（や落ち葉が腐った相）を掻き取る作業をする。ただし、今は、シカがマツタケを食うようになったので「地かき」してシロ（マツタケという子実体を発生させる本体）が形成されても、マツタケの収穫量は増えない。

森林ジャーナリストなら、植物遷移は知っておくべきだし、松茸の減産や獣害の増加も、過疎化や燃料革命が影響していることを知っておくべきである。就職した頃に関わった松茸の動画をアップしているので、それを見れば理解できるはずだ。

<https://www.youtube.com/watch?v=Q4H86nRtb9A>

【166 項】現在の獣害の増加は、荒れ果てた森林が回復するとともに、野生動物が増加した結果として起きたとも言える。動物が増えたことは異常ではなく、「ようやく江戸時代前期と同じ程度までもどった」と考えるべきだ。むしろ、獣害の少なかった100年ばかりの間が異常な時代であったのだ。

【コメント】「動物がようやく江戸時代前期と同じ程度までもどった」との考察は正しい。しかし、その原因として「荒れ果てた森林の回復」を挙げているのは間違いである。江戸時代に書かれた山の絵図からも、江戸時代には禿げ山が多かったと考えられる。しかし、それは都会周辺の山野である。美山町芦生のような奥山は、江戸時代以前から森であった。針葉樹が植えられた場所もあるが、禿げ山のように荒れたことはなかった。芦生でも、江戸時代には獣害が激しかったことが町村史からも明白である。しかし、芦生の獣害は、明治から昭和初期までは少なく、1980年代以降になって増えた。芦生の森は、江戸時代以前から現在まで大きな変化がないのに獣害は他の地域と同様の経過を辿っている。それは、芦生の里が大変化しており、その大変化が他の地域と同様の経過を辿ったからである。芦生の里も、江戸時代には人口が少なく、狩りも禁止されていたので獣が多かった。住民は、シシ垣を設け、それでも獣害が多い場合は役所に願い出て「庄屋狩り」をした。明治になって人口が増え、イヌや家畜が殖え、鉄砲も自由に使えたので、芦生の里は、野生動物にとって危険な場所となり獣害は激減した。しかし、芦生の里でも、1960年代に始まった燃料革命によって「炭や薪といった木質バイオマスの供給源」という役割を失った。農林産物の生産に切り替えたが、1985年のプラザ合意によって為替が円高になり、海外から安価な農林産物が流入して「農林産物の供給源」という役割も失った。芦生の里でも、炭鉱閉山のように一気に人口が減った。1970年代に野良犬が駆逐され、1997年には焚き火が禁止され、芦生の里は、獣にとって安全な場所へと大変化した。だから獣害が増えた。筆者は、獣が暮らす森の変化に着目しているが、獣が出没する里の変化に着目していない。原発事

故で放射線量が高くて人が入れなくなった里がある。その里（と周辺の森）の植生は大きく変化していないのに、人間がいないから獣が増え、日中でも闊歩するようになったのだ。

ナラ枯れでも同様だが、都会で暮らしているから原因が理解できないのだろう。また農学部卒の数学力の低下も気になる。実家には、夏休みに大勢の従兄弟が来てくれた。小学校低学年の私に、「鶴亀算」の問題を出してくれてが、私は、独自の方法でその難問を解いた。この数学力は仕事の役に立ってきた。森林・林業を理解するために数理モデルを作成してきた。ナラ枯れでは、その数理モデルを論文にした。この数学力は、日常生活の中で発生する疑問を解くことにも利用してきた。

2013年、父が73才の時、父の妹6人は全員が元気であった。長女が91歳、六女でも79才と高齢であった。「これは金さん銀さんくらい珍しいのでは」と考え、厚生労働省に「7人の妹弟の全員が活着している確率はどの程度か？」と質問した。すると職員は「求められない」と返事した。7人全員の同時生存確率を算出するという難題にチャレンジしようと思った。数学が得意そうなナラ枯れ研究者にも、その難問を投げかけたが、回答はなかった。そこで、寿命の権威である鬼頭宏博士に相談した。鬼頭博士の助力もあって、厚生労働省人口動態・保険社会統計課のS氏が、日本人の生命表（印刷物）を送ってくれた。そして、2013年12月28日～2014年1月5日の正月休みを使って「性別」と「生年月日」を入力すると、その日まで生き残った確率を求めるソフトが開発できた。そのソフトを使えば7人全員の同時生存確率が算出でき、その値は0.108%であった。意外に高い確率であったが、1年後には（7人全員が1年生き延びれば）、その確率は0.067%、長女が100歳になる9年後には200万分の1の確率になることが判った（残念ながら長女は94歳で他界した）。生命表の膨大なデータは数値としては存在せず、印刷物をスキャンして数値にするソフトも開発した。そして、生命表に2箇所だけ誤りがあることを見つけた。厚生労働省のS氏は、私が短時間で生命表を数値化したことに驚いていた。この道楽に協力して下さった鬼頭博士は、縄文時代から江戸時代までの人口を以下のように推定されている。

***ここから

文時代後期は26万人（自然物採集のみ）

弥生時代後期は59万人（中国から稲作が伝わったので人口が急増）

奈良時代は550万人（公地公民で農地が急増）

平安時代は644万人

鎌倉時代は757万人

室町時代は818万人

戦国から江戸時代（1600年代）は1227万人（農地を増やして年貢米取り立て）

***ここまで

現在、日本の人口は減ってきているが、それでも1億2千万以上である。1600年代に比べれば10倍になっており、これは完全に人口爆発である。筆者は、数字に弱いためか、この人口爆発の影響が理解できていない。理解していたら「餌が増えたので獣が増えた」というような戯言は書かず、「里で人が減ったから獣害が増えた」と書くはずだ。

【168～169頁】おそらく山野の緑が回復してきた1960年代頃から野生動物の数は回復傾向に入ったと思われる。それは自然が回復する過程でもあった。また、社会情勢も変化を

見せた。木材不足が続くなか、木材輸入が解禁になった。外貨準備高も増えたからである。まずアメリカやソ連から木材が入ってくるようになり、さらに東南アジアから熱帯木材が大量に輸入されるようになった。そこにドルショックが起きて、為替が円高基調になる。すると輸入木材の価格は大幅に下落した。また高度経済成長が続くことで、人が町に出るようになり、農山村の過疎化が進み出した。その結果、あれほどの熱意で植えられた植林地は見捨てられるようになった。農業も米あまりから減反政策に転じ、稲作も抑制された。まず対象となったのは耕作が不利な棚田などの山裾の農地だ。耕作放棄地はすぐ雑草が生えてブッシュ化・森林化した。同じく雑木林も、草刈りも薪採取もせず放棄されていった。おかげで山には木が密生するようになる。ここまで条件を整えば、野生動物にとって絶好の生息場所の誕生だ。餌はある。隠れ家もある。しかも美味しい餌のある農地のすぐ側まで潜むブッシュが広がっている。人は減って、見回りもあまりされない。動物側も農作物を狙いたくなるだろう。数も増えて、新たな餌場を求めなくてはならない。かくして獣害が多発し始めたのではないか。

【コメント】筆者は、木材輸入や円高のことを理解していない。木材輸入が増えたのは「木材不足」が原因ではない。木材価格が下落したのは「ドルショックが起きて為替が円高基調になった」からではない。上述したとおり、アメリカは、日本人を恐れ、太平洋戦争前から日本人を研究していた。そして、戦後、日本人を森から遠ざけた。文部科学省の指導要領で、どこの地域でも同じ教育を行い、若者の価値観を同じにした。ロボットに仕立てられた日本の若者は、港がある都会（特に太平洋ベルト地帯）に殺到した。日本は、世界中から燃料や原料を買って港に集め、それを組立てた製品を港から輸出する加工貿易を行った。日本人は、手が器用で勤勉だから、家電製品や車、飛行機、コンピュータなど、性能が良い品物を安く作った。日本は安価な工業製品と、安くて美味しいオレンジや牛肉などを大量にアメリカに輸出するようになった。しかし、アメリカは、外国に輸出できるようなものが少なかった。アメリカへの輸出額と、アメリカからの輸入額のバランスが崩れ、対日貿易赤字が膨らみ、日米貿易摩擦が生じた。アメ車が売れなくなり、デトロイトの労働者が、日本車に火を付ける暴動も起こった。アメリカなどから「日本はもっと輸入しろ」との圧力がかかった。しかし、米を輸入すると、日本の米農家が怒り、自民党は支持基盤を失う。だから、日本には多くの木材があるのに、木材の輸入を始めた。それでも、日本の輸入額は増えなかった。アメリカには「日本から輸入品に関税を掛ける」という選択肢があったが、それをすると自由貿易が損なわれる。だから円高にした。資本主義発展の理論的支柱となったアダム・スミスの国富論では「神の手」という言葉が使われているが、それは「市場にまかせろ」という意味だろう。しかし、対日貿易赤字を減らすために各国が協調して市場介入して故意に円高にした。プラザ合意は、1985年9月22日、先進5ヶ国の蔵相・中央銀行総裁による会議によって発表された。日本からは竹下登蔵相が参加し、会議は20分程で合意に至る形式的なものだった。プラザ合意は、対日貿易赤字を減らすために円高に誘導するものであり、合意の発表後、数日間で急激に円高になった。地方出身の竹下登議員は、プラザ合意によって地方が崩壊するのを恐れ、地方で活躍する議員を集めた。その中に、野中広務氏も含まれていた。1980年頃、栗1kgは、日本では500円程度で売られていた。アメリカでは3ドル程度（1000円）で売られていただろう。これでは、アメリカの栗を輸入する日本人はいない。しかし、1ドル360円に固定されていた為替レ

ートを、1ドル100円にすれば（円高にすれば）、アメリカの栗は1kgが300円（3ドル=300円）で買ってしまうので、日本に輸入して売ることができる。このような仕組みで安価な農林水産物が大量に輸入されるようになり、日本の農山村は疲弊し、就農者だけでなく、人口そのものが減って、獣が農山村に出没するようになったのだ。

シカとイノシシは増えているので「森が回復して餌が増えて数が増えた」という考察は成立する。しかし、ウサギとキツネは減っている。キツネが減ったのは、餌であるウサギが減ったことで説明できる。ウサギは、森が回復して餌が増えたら増えるはずだ。筆者は、「餌が増えたから獣が増えた」と主張しているのだから、ウサギが減った理由について言及すべきである。ウサギは、シカやイノシシが増えすぎたために減ったのかもしれない。シカやイノシシはウサギを食わないが、3者とも同じ草食動物なので、種間競争はある。人口の減少、犬や家畜の減少、焚き火の減少などによって里（と周辺の森）がイノシシとシカにとっては安全になった。しかし、小柄なウサギにとっては、大きなイノシシやシカがうろつく里（と周辺の森）は、引き続き危険な場所なので、増えなかったのだろう。「シカとイノシシにとって安全な場所が増えた→シカとイノシシが増えた→ウサギはシカやイノシシが怖くて増えずに減った→ウサギを餌とするキツネが減った→キツネに追い立てられてきたシカやイノシシは安心して暮らせるので増えた」という悪循環に陥っているのかもしれない。また、薪炭林施業が減ると伐根からの萌芽枝や下草が減るので、こうした植物を餌にしていたウサギは減ったのかもしれない。

【170頁】当初は荒れた植生が回復していく過程だった。はげ山に草が繁り低木のブッシュから高木が生えてきた。そして落葉広葉樹林になり、野生動物や昆虫なども数を増やして「豊かな自然」がもどってきた。それが放置されることでさらに遷移が進み、照葉樹が増えてきた。照葉樹林は、林内が暗くなりがちだ。明るい森に適応していた草花や昆虫にとっては棲みづらくなってきた。マツ枯れも発生した。これはアメリカから侵入したマツノザイセンチュウがマツノマダラカミキリに媒介されて引き起こすが、残されたマツが一斉に枯れ始めた。さらに現在はナラ枯れが広がっている。こちらはカシノナガキクイムシとナラ菌によって、ブナ科のミズナラやコナラなどがどんどん枯れていく現象だ。とくに太い木ほど虫が入りやすい。しかも枯死後にカシナガが大量に飛び立ち、周辺の木へ伝播する。ナラの木が多い山は全山が枯れ木に覆われたかのようだ。こうして植生が大きく変化しつつある。植生が豊になっていた1980年代と比べると、現在は劣化し始めたのかもしれない。これによって野生動物の生息にはどんな影響が出るだろうか。

【コメント】「ナラ枯れによって獣の餌であるドングリを失わせるナラ類が消失し、森での餌を失った獣が里に出没するようになった」と考えている人もいる。しかし、ナラ枯れのない地域でも獣は出没している。そもそも、ナラ枯れと同じ現象は、韓国、南ヨーロッパ、北米、南米、オセアニアなど、世界各地の中緯度地域で同時多発している。私は「薪炭林放置によってナラ類が大径木化したことが要因である」と森林学会の総説で主張した。膨大な実験データと、数百の論文を引用して考察したものであり、大径木化説は定説となり、酸性雨、温暖化、ナラタケ病などが原因とする説は排除された。しかし、都会で暮らす人は、薪炭林が奥山に多かったことを知らず、薪炭林と里山を混同しているため「里山の放置がナラ枯れの要因」と言うようになった。「里山」という文字を使えば、研究費が

ットしやすい事情も関係しているかもしれない。「里山」という言葉は、四手井綱英先生が広めたもので、集落に近い「農用林」のことをさす。薪炭林のうち、薪に比べて軽い炭を焼く場所は、芦生の森のような奥山であった。そうした奥山は最初に放置され、木も大きくなっていったから、ナラ枯れは、奥山で最初に発生してきた。「薪炭林放置によるナラ類の大径化」は、ナラ枯れの要因であるが、それは「燃える物が多いほど火事が増える」と言っているのと同じで、発火原因は説明してない。総説で「温暖化が影響している」と書いたのは、温暖化が発火原因であると考えてきたからだ。森林学会長でもあったK博士は「温暖化がナラ枯れ増加原因と言われたこともあるが、昔から寒冷地で発生していた被害であり、被害増加と温暖化との関連性を示すデータはない。この仮説は防除ができないとの誤解を生み、里山管理のあきらめに直結しかねない」と指摘した。確かに、科学的に温暖化の影響を証明するのは難しいため、誰もチャレンジしてこなかった。そこで、ナラ枯れが発生しやすい気象条件を把握するため、舞鶴市と京都市における毎年のナラ枯れ被害量と、その年の気象条件との関係を解析した。この解析の結果、冬の最低気温が高い年にナラ枯れが増える傾向が認められた。これは、クリの凍害と共通している。水に何かを混ぜると水が凍る凝固点は低下する。砂糖水は真水よりも凍りにくいので、クリのような落葉広葉樹は、樹液の糖度を増すことで耐凍性を獲得している。温暖化で、冬の最低気温が高くなると、クリは春が来たと思いき水分を吸い上げて耐凍性を失う。その後、氷点下の気温に曝されると幹が凍って枯れることもある。だから、冬の気温が高い年ほどクリの凍害は発生しやすい。ナラ枯れでも、栗の凍害と同様に、冬の最低気温が高いと、ナラ類の幹が凍って衰弱している可能性がある。この解析では、カシナガ活動時期（6～7月）の最低気温が高い年ほど、被害が多くなる傾向も認められた。そこで、カシナガが飛びやすい気象条件を把握するため、カシナガトラップによる毎日の捕獲数と、その日の気象条件との関係を解析した。その結果、カシナガは、梅雨や秋雨のような雨期（餌である酵母が育ちやすい時期）に活発に活動することが判明した。また、気温18℃以下では活動が鈍くなることも判った。つまり、温暖化で、梅雨や梅雨期の気温が18℃以上になる日が増えたことがナラ枯れを拡大していることが示唆された。この他に、温暖化で虫の脱出時期が1ヶ月以上も早くなっているため、ナラ類が展葉してから直ぐの無抵抗の時期にカシナガの攻撃を受けるようになったこともナラ枯れの拡大要因かもしれない。いずれにしても、ナラ枯れの発生と拡大に温暖化が深く関与していることは間違いない。

ナラ枯れは、北海道と沖縄を除く全国に拡大したことから、多くの学者が研究に取り組んだ。しかし、ナラ枯れの原因について、上記ほど深く考察した研究者は少ない。有効な防除法を開発した人も少ない。そもそも、都会で暮らしていたのでは直径1mを超える大木を切り倒せないため、防除法を開発するのは難しい。私は、ナラ枯れを研究するため、野外作業（大木の伐採）、樹種の同定（ミズナラとコナラの区別）、昆虫の同定（キクイムシの分類）、菌の操作（ナラ菌や酵母の培養）の全てをこなした。数学力を活かして地形解析を行い、ナラ枯れが発生しやすい場所を解明した。また、物作りが得意なので、カシナガを透明のビンで飼育して生態を解明し、防除資材も手作りで開発してきた。こうした技術も重要だが、限界集落に暮らして常に現場にいたので、古老の考えを聞くことができたことが役立った。古老達は「こんな被害は昔からあった。薪炭林として20年サイクルで伐っていればナラ枯れは起こらない。木を切らずに太らせたのでナラ枯れが発生するよ

うになった」と教えてくれた。それを科学的に証明して論文にただけである。獣害も、古老達と議論してきた。都会で暮らす人は、田舎者をバカにする傾向があるが、カイコから糸をとって絹を作って着物にしたのは田舎者だし、かぶれるウルシから樹液を採取して漆器を作ったのも田舎者だ。田舎者をバカにしていると、私にバカにされる本や論文を書いてしまうことになる。この本はマシだが、ナラ枯れの本は論外である。

【171～172 頁】東京だって、結構な野生動物が棲んでいるのだ。どうやって都心にまで到達したのか疑問を持つ人もいるが、実は河川敷や緑地帯を通ることで、郊外から都心まで比較的目立たずに侵入できる。もちろんこういった兆候は東京に限らず、大阪や名古屋、福岡、札幌といった都会でも起きている。試みにインターネットで各都市名とイノシシやクマなどの野生動物の名を打ち込んで検索すると、目撃情報はいくらかでも出てくる。野生動物の出没自体がニュースになっているのだ。都会で暮らす人々にとって、野生動物の出没はやはり非日常性があるのだろう。

【コメント】ニュースになるかどうかは「非日常性」だけでなく「視聴率」が大きく影響する。獣害のような農山村の問題がニュースになりにくいのは、一般の方の関心が低く視聴率が稼げないからだろう。東京で 5cm の雪が積もったら報道されるが、美山町で 50cm の雪が積もって集落が閉ざされても報道されない。東京に 5cm の雪が積もるのに比べて、美山町に 50cm の雪が積もるほうが非日常的だが、美山町のことを報道しても関心を持つ人は少ない。都会でイノシシが暴れたら大騒ぎになって報道されるが、美山町でイノシシに襲われて死んでも報道されないのは当然だ。

京都府立大学で、クマの目撃情報を収集するサーバー管理に関わった。都会で暮らす人は、クマを目撃すると驚いて目撃情報を提供するが、山村で暮らす人は、クマを目撃しても驚かず、目撃情報を提供しない。だから、クマが珍しい綾部市では目撃情報が多く集まるが、美山町での目撃情報は少ない。そもそも、美山町では、スマホやパソコンを使って情報発信できる人は綾部市よりも少ない。「目撃情報が多い場所ほどクマの出没数が多い」と考えるのは間違いである。目撃情報の収集は費用対効果が低い事業である。

【172 頁】この流れで想像すると、野生動物が地方都市から大都会へ進出を果たす可能性が高い。生息数が増えていけば、自らのホームレンジ（行動圏）を確保するため新天地を探すようになる。最初のターゲットが里山だったのは、奥山に隣接し、餌も多くあり、なおかつ人間の減少が始まっていたからだ。山間の集落の次に狙うのは地方都市であり、さらに中核都市、そして大都会へと拡大していくのではないか。

【コメント】筆者は「野生動物は大都会に進出する」と推察しているが、大都会が過疎地のように空き家だらけになるまでは、シカやイノシシは進出しない。ハクビシンやアライグマのような外来種は大都会にも進出しているし、アナグマ、キツネ、コウモリのように隠れるのが得意な野生動物は大都会に進出するだろう。コウモリは、人類のパンデミックを起こす可能性のあるウィルスを多数保持している。コウモリが都市に近づくと、新型コロナのような感染症が次々に起こるだろう。

シカやイノシシが大都市に簡単に進出できないと考えるのは、2010 年頃から京都市市街地でもシカが出没するようになったが、それは北山通り以北で留まったからだ。京都市の

宝ヶ池公園では、シカが日中でもうろうろし、触ることができる。北山通り以北にも夜間に出没するようになり、上賀茂神社の摂社である大田神社のカキツバタ群落がシカの食害を受けた。このカキツバタは万葉集にも謳われた 1000 年以上の歴史を持つ国の天然記念物である。府立植物園職員が、花が咲かなくなった原因を検討したが「シカの食害だけではない」と結論し、真相は不明であった。

<https://www.sankei.com/article/20160514-I4JJFZ5LSVN6VFH7OLYLBUGOTM/>

大田神社の宮司さんが、私が開発した鳥獣撃退器に関心を持ってくださったので、2016年5月7日、現場に行った。頑丈な柵が設置されていたが、一部が破損していたので、とりあえず撃退器を設置した。しかし、シカの食害だけが原因ではなさそうなので「新鮮な水が流入するように水路を掃除すべき」と助言した。何が幸いしたのかは判らないが、翌年以降は花が咲くようになった。北山通り以北でシカが出没するようになり「北大路通り以南でも出没するようになる」と予想したが、そうならなかった。やはり、獣は人気の多い危険な場所は避けるのだ。

【173～174 頁】街路樹や公園、空き地などは、草木が茂った餌の供給源だ。加えて大量の残飯。ゴミ収集場は餌場となる。一時期、カラスの被害が続出したことで最近では網をかけたりカゴに入れたりするようになったが、まだまだ漁れる場は多くあり、野生動物にとっては絶好のグルメ・スポットとなる。これは農村の農業廃棄物と同じく、野生動物の誘引効果が高い。加えて、人間が餌を与えるケースも馬鹿にならない。ノライヌ・ノラネコに限らず、イノシシやシカ、ときとしてクマやサルにまでわざわざ餌を用意して与える人がいる。ペット感覚で食べる姿を楽しむのだろうが、思慮の浅い行動だ。これこそ都会に野生動物を招く元になる。

【コメント】農村での農業廃棄物や都会での生ゴミは、確かに獣の餌になる。しかし、農業廃棄物や生ゴミは、かなり以前から大量にあったが、獣は増えなかった。獣は、安全に得られない餌を漁ることはしない。農山村が獣にとって安全になったので獣害が増えたが、都会には人や車が多く獣にとって危険なので獣害は少ない。

獣を捕獲するために餌付けをする学者がいるが、これこそ農山村に獣を招く思慮の浅い行動だ。森林ジャーナリストなら、一般の方を批判するのではなく、学者や行政がやっている愚行を批判すべきだ。

【175～176 頁】イノシシやサル、そしてクマなどの大型で危険度の高い動物も、都会への進出を企てている。神戸のように山が近いと繁華街にまでイノシシが出没する。クマが住宅街に姿を現して騒動になることも東北や北海道では珍しくなくなった。出勤される警官も困るだろう。建築物の密集する都会では追跡さえ苦戦を強いられる。問題は、都市の住民は農山村以上に野生動物について知識がなく、対応の仕方を身につけていないことだ。むしろ警戒心なく近づき、手を伸ばす人までいる。その行為の危険性について気づいていない。仕方なしに駆除したら、安全圏に住む住民から「動物を殺すな」という苦情が殺到する有様だ。あまつさえ、こうしたニュースを伝える番組で素人のコメンテーターは「悪いのは動物ではなく、彼らの生きる場所を奪ってきた人間」という怪しげなコメントを出す。そして「カワイソウ」という感情だけで駆除に難色を示す。生息数が増えていること

を理解せず、また人と接触することの危険性に類被りしたまま、思いつきのコメントをばらまく。

【コメント】素人コメンテーターに対して「思いつきのコメントをばらまく」と批判しているが、この本にも「素人の思いつきのコメント」が多く、まさに「目くそ鼻くそ」である。そもそも、ホモサピエンスが獣の生息場所を奪ったことは事実だ。また、ホモサピエンスが、自分たちの都合で獣の命を「駆除」と言って奪っているのも事実だ。そして、哀れみの心を持つホモサピエンスが、弱い立場の獣が殺されることに対して「カワイソウ」と思うのは本能である。「カワイソウ」という感情だけで駆除に難色を示すことを批判するのではなく、「カワイソウ」という感情が沸かない解決策を提案すべきだ。上述した夜間捕獲、すなわち、消防団が関わって夜間捕獲を実施し、得られた美味しい肉を食料に困っている地域に送るというアイデアは、具体的な解決策である。

【177～179 頁】1950年代の後半、旧ソ連の遺伝子学者ドミトリ・ベリヤーエフは、キツネの家畜化実験に着手した。…略…人になつきやすい個体だけを選んで次の世代とした。それが2代目3代目になると、ほとんどのキツネが人に対して友好的になった。4代目は劇的な変化が見られるようになった。イヌのようにふるまう個体が現れたのだ。尾をふり、クンクン鼻を鳴らし、子イヌがするように研究者たちをペロペロと舐めるようになった。積極的に人間との接触を喜ぶのである。さらに身体的特徴に変化が現れた。まず耳は垂れるか垂れがちになった。この特徴はイヌやネコ、ブタ、ウマ、ヤギなどの家畜に見られる特徴である。それに尾がイヌやブタで見かけるように丸まった。世代が進むと骨格の変化も見られるようになる。四肢や尾、鼻や上あごが小さくなり、頭は大きくなった。一言で言えば「カワイイ」見かけになったのだ。繁殖も、野生のキツネより一月早く生殖可能になり、繁殖期間も長くなった。期外に交尾するケースも見られたほどだ。こうした変化は「ネオテニー（幼形成熟）」と呼ばれる。幼児の特徴を保持したまま成熟する現象だ。動物行動学者のコンラート・ローレンツ博士は、子ども時代の動物の身体的な特徴を「ベビースキーマ」と定義する。それは身体に比して頭が大きい、おでこが出ている、鼻が短い、大きな目が顔の下の方についている、あごが小さい、手足が短い、ぎこちない動き、といった特徴がある。たいていの動物の赤ちゃん時代の姿としぐさだ。それは親（成獣）に、養育行動を引き出すためだろうと指摘している。

【コメント】「カワイイ」という感情には、脳内ホルモンのオキシトシン（愛情ホルモン）が関与している。コロンブスが新大陸から持ち帰ったものは多いが、タバコと梅毒は人体に害がある。コロンブスが新大陸を発見する前、人は一夫一妻だけでなく、サルやシカのようにハーレムをつくって暮らす者も多かった。船や機関車の発達に伴って商工業が盛んとなり都市が拡大、大勢が人口密集地で暮らすようになった。人口密集地で、ハーレムの暮らしをすると、1人の男性が大勢の女性と交わることになり、梅毒感染者が増える。世界でも屈指の大都市であった江戸でも梅毒が蔓延し「骨から見た日本人」という本は、江戸市中の人骨調査では江戸の梅毒患者は50%を超えていたと推測している。杉田玄白の患者も7割以上が梅毒患者であった。こうした梅毒の蔓延は、一夫一妻性を好む（オキシトシンを分泌しやすい）遺伝子を持つ人の割合を高めたはずである。大名は、正室の他に側室を持つのが通常だが、前田利家は、一人の妻しか愛さなかった。前田利家はオキシトシ

ンが分泌しやすい人物だったのだろう。オキシトシンは、赤ちゃんが乳頭を吸引するとき分泌が促進されるが、男性でもセックスのときに分泌される。また、性別に関係なく、可愛い動物や孫に触れたとき、好きな人と見つめ合ったときにも分泌される。女性は、年をとると男性ホルモン（テストステロン）の分泌量が増え、ヒゲが生えて攻撃的になる。一方、男性は、年をとるとテストステロンの分泌量が減り、活力を失い、イライラするようになる。だから、熟年離婚が増える。アメリカでも離婚が社会問題となり、カウンセリングが行われている。カウンセリングにやってきた夫婦は、個室に案内され、助言者がスピーカーでアドバイスする。夫婦が個室にいると喧嘩が始まる。するとスピーカーから「手をつないで喧嘩を続けてください」との指示がある。手をつなぐとオキシトシンが分泌されて喧嘩が収まる。助言者は「明日からは喧嘩したら手を繋いでくださいね」と言う。これが効果的なカウンセリングらしい。妻が怒っているときにパソコンに向かっていたら、突然、ちゃぶ台がひっくり返った。ちゃぶ台は、夫がひっくり返すものだが、妻が先に、ひっくり返した。妻によると、何にかに腹が立って訴えているのに、私がパソコンのキーボードを叩き続けたので、怒りが爆発したそうである。「カニココヤ！」と意味不明のことを叫んでいた。「カニココ」とは、京都で古くから使われていた言葉で「集中し過ぎて周りが見えない状況」を揶揄する言葉らしい。妻は「チョチョコバル」（ヤンキー座り）という美山では老婆しか使わない言葉も知っていたが、これも京都で古くから使われていた言葉らしい。妻が怒ったとき、私が妻を見つめて話を聞けば、ちゃぶ台はひっくり返らなかった。43歳で、オキシトシンの役割を理解した私は、妻に「今後は喧嘩したら触る」と言ったら「気持ち悪い」と言われてしまった。手遅れだった。新型コロナ騒動のかなり前から、妻との距離はソーシャルディスタンスで、喧嘩も減った。

【180 頁】環境省によると、保健所などのイヌ・ネコの引き取り数は年間9万頭あまりで、年間殺処分数は3万8000頭程度（2019年）だが、約6割は引取先が見つかるそうだ。里親探しをする団体などの涙ぐましい努力のおかげだろう。ベビースキーマの魅力に取りつかれた人々の活動と言えるかもしれない。しかしシカやイノシシは、どちらも年間60万頭前後を駆除していることを思えば、複雑な気持ちになる。動物の命が人間の好き嫌いに左右されているのだから。

【コメント】欧米では、飼えなくなったペットを殺処分する愚行は減っている。スイスでは、老人がペットを手に入れる際、次の飼い主を明記する必要がある。ペットの売買が認められていない国もあるらしい。日本人は、食料を捨て、自殺者が多く、家畜やペットを縛り付け、ペットを売買し、飼えなくなったペットを殺す。原発事故で苦しんでいる人がいるのに原発を再稼働したり、年金欲しさに死んだ親の遺体を隠す人までいる。ほんの少し前まで、日本人が世界で最も命を大切にしていたのに、今は、世界で最も命（と自然）を粗末にする国民になっている。これはGHQによって、日本国民を森から遠ざけた結果なのだろう。命を粗末にするから獣からのしっぺ返しを受けているのかもしれない。

【181 頁】やはり人は、目にした動物（それがアニメであれ、動物園の展示であれ）に対しては愛着を持ち、なんらかの行動を起こすようだ。そこには「カワイイ」感情を刺激する動物に対する人間のリアクションが読み取れる。逆に言えば、人はなんらかの形で触れ

合った動物に対して「カワイイ」という感情が生じるようだ。

【コメント】人が触れた動物に対して「カワイイ」という感情が生じるのは、触れるとオキシトシンが分泌されるからだ。イヌがオキシトシンを分泌することも、近年、発見された。クジラやイルカもオキシトシンを分泌するはずだ。もしかしたら昆虫、いやミドリムシでさえも同様のホルモンを分泌しているのかもしれない。何度も瀕死の重傷を負ってきたが、優しい気持ちで身体に触られると嘘のように痛みがやわらいだ。触るとオキシトシンが分泌されるようだが、触られても何かが分泌される。「手当」とはよく言ったものだ。

【181～182 頁】実際に人が野生動物と共存している例を探すと、なくはない。有名なのは奈良のシカだろう。1000 年以上も両者は共存してきた。人はシカを神の使いとする信仰を持ち、保護してきた。…略…市民が住宅街に出没したシカを見かけても、騒がずそっとしておく。庭木を食われたら追ひ払うが、駆除しろとは思わない。

【コメント】実は、奈良公園のシカも駆除されている。京都府木津町の浄瑠璃寺は、奈良公園から直線距離で 4km ほどしか離れていない。ここでのナラ枯れ防除活動に、近所の猟師さんにも協力してもらった。その方によると、浄瑠璃寺周辺で駆除するシカは、角を落とされたシカ（奈良公園からやってきたシカ）も含まれている。同じシカでも、京都府側で殺すと奨励金がもらえるが、奈良県側で殺すと罰金を支払うことになるそうだ。

【183～184 頁】近年、欧米から「アニマルウェルフェア」の理念が入ってきた。直訳すると「動物福祉」だが、国際獣疫事務局は「動物が生活している環境にうまく対応している状態」と定義している。適用されるのは家畜のほか動物園や水族館などの展示動物、研究のための実験動物、一般家庭の愛玩動物（ペット）、そして野生動物だ。いわゆる動物愛護とは違って、人間が動物を利用することや殺すことを否定していない。たとえば家畜や家禽は、最後は食肉にするわけだが、飼育中は快適に生きてもらい、苦しめないよう屠畜すべきだとする。死ぬ寸前まで生き物としての尊厳を持って育てるという発想だ。そこではニワトリのケージ飼い（狭い空間に閉じ込め運動させない状態）は否定されている。同じことはウシにもブタにも適用されて、不衛生で苦痛を与えるような環境で飼育してはいけない。家畜だけでなく展示動物や研究実験動物、ペットも同じだ。動物園・水族館などで動物を展示して一般人に動物を知ってもらうために飼育するのは認めつつも、芸を仕込むことが問題視されるようになった。科学的な研究や薬剤の製造に動物実験が必要なことは認めるものの、その数を最小限にすること、無駄な実験をしないこと、そして実験動物の飼育にも十分な配慮が求められる。さらにイヌ・ネコなどペットで見られる多頭飼い（とその崩壊）も虐待とされる。これらをひっくるめて「アニマルウェルフェア」と呼ぶ。しかし、こうした考え方が野生動物にも適用されることは、あまり知られていない。たとえば、害獣の駆除は認めるが、できる限り苦痛を与えないよう即死させることが求められる。一例を挙げれば、くくり罠は足を締めつけて捕まえるが、すぐに死なずに暴れて骨折するなどの苦痛を与えるので否定的だ。もっともレジャーとしての狩猟を認める点は、いかにも欧米流のご都合主義がかいま見えるが、すでにアニマルウェルフェアの理念は世界的に広がっている。オリンピック・パラリンピック開催地で選手に供する食事の素材（食肉）は、この基準に乗っ取らねばならない。日本の養豚や養鶏は基準に合わず、東京オリパラ開

催時に国産品を供給できないと心配されたこともある（結局、日本独自の飼育基準を決めてスルーしてしまったが）。2018年、アメリカのカリフォルニア州では、家畜・家禽を檻に入れる場合に十分な空間の確保を求める住民投票が行われ、62.66%の賛成票を集めて可決した。そして違反した飼育環境で生産した肉や卵の販売は禁止された。ニューヨーク州では、2017年にゾウ保護法が制定され、サーカスなどでゾウを登場させることが禁止された。フロリダ州では、グレーハウンド犬のレースが禁止された。アイオワ州は、動物法的保護基金絶滅危惧種法に違反する動物園を訴え、農業省はその動物園の免許を取り消した。アニマルウェルフェアのほかに、動物が人間並みの権利を主張できる「ノンヒューマンパーソンズ」という「格」を認める動きも世界では広がっている。

【コメント】キリスト教は「神と似た姿をしている人間が動物を支配する」という考えであり、欧米では動物を虐待していた。一方、かつての日本は、動物を愛護し、邪魔なはずの獣と共存していた。今は、欧米では、動物を愛護するのでフォアグラ生産は禁止され、動物を愛護しない日本でフォアグラが生産されているらしい。フォアグラの生産方法は以下のとおりで、これを知ってから好物のフォアグラを食べる気にならなくなった。

<https://www.hopeforanimals.org/foiegras/219/>

***ここから

卵から孵った瞬間、フォアグラ生産に適さないメスは生きたままミンチにされるなどして殺される。オスは肝臓肥大に耐えられる体力をつけさせられるために3ヶ月間屋外で飼育された後、小さな檻に入れられ、羽を伸ばすことも、立ち上がることも、向きを変えることすらできない状態で拘束される。そして、強制給餌が、1日に2~3回、3~4週間続けられる。強制給餌は、鳥の頭とくちばしを手で掴み、大量の餌（蒸したとうもろこしと油性混合物）を鉄パイプを通して強引に胃に押し込まれる方法で実施される。この残忍な行為によって鳥の健康は破壊され、標準サイズの10倍に膨れあがった肝臓が気囊と肺を圧迫して呼吸困難を起こす。パイプによる裂傷、慢性肝臓病、強制給餌による窒息などで死亡率は通常の20倍になる。強制給餌を受けている鳥は汚物で覆われる。そして、最後は、屠殺場に移送され、喉を切り裂いて失血死で殺害され「フォアグラ」となった病的な肝臓だけが取り出される。

***ここまで

【185~186頁】西洋文明、というよりもキリスト教文化圏では、かつて人間と動物を極めて厳格に分けていた。家畜は神が人間の食べ物としてつくった動物とまで定義していた。しかし科学的な研究が進むにつれ、今度は極端に動物を人間と同じように扱い始めたようだ。日本に、こうした動きはまだないが、もともと人間と動物の境界線が曖昧だ。そして動物を擬人化して語りやすい。昔話や説話、伝説の中には動物（キツネやタヌキ、ときにはツル、ヘビなど）が人間に化けるだけでなく、人と結婚し子をもうける話まである。一方で多くの野生動物が神、もしくは神の使いとして祀られた。それらは怪異談にも笑い話にもなる。厄介な隣人だったとしても、嫌ってはいなかったのである。

【コメント】日本人にとっても獣は厄介な相手だが、その獣を祀ってきた。稲荷神社は狢狐（キツネ）を、諏訪神社は狢犬（オオカミ）を祀る。伏見稲荷大社が総本宮である稲荷神社は「稲成り」から由来している。江戸時代までは国民のほとんどが農業に従事してい

たことから一般庶民に支持され、国内で最も普及した神社となった。稲荷神社は 32000 社を数え、山野や路地の小祠まで入れると膨大な数になる。代表的なご利益は「五穀豊穡」だが、養蚕業など商業の神も司っていることや、信徒が農民から商人に拡大したことで、豊作のご利益が「商売繁盛」へと解釈されるようになった。長野県の諏訪大社を総本社とする諏訪神社は全国に約 25000 社あり、中世には狩猟神事を執り行っていたことから、狩猟、漁業を守護する神社としても崇拝を受けている。八幡神社はハトを祀っている。

栗やナラ枯れで韓国の研究者と交流することが多く、京都市内の社寺仏閣を案内することも多い。韓国の研究者は「日本人が獣を神として祀る」ことを不思議がっていた。天武天皇が奨励した仏教と、日本人の先祖崇拝とが合体したのだろう。死んであの世に還った靈魂が、この世に何度も生まれ変わるのが輪廻転生であるが、死んだ人の靈魂は、人として生まれ変わるには限らない。シカやイノシシ、サルなどとして生まれ変わる可能性がある。悪さをする獣でも、親の生まれ変わりかもしれないので、むやみに殺せなかった。先進国でサルと同居するのは、日本と南アフリカだけのようなのである。南アフリカでは、アパルトヘイトのように、マントヒヒを隔離しているが、日本のサルは自由である。サルは、人間に最も近く、知恵があるので、サルによる害を完全に防ぐには、サルを抹殺するしかない。キリスト教なら「サルは邪魔なので殺す」となるが、日本では、そうならなかった。栗園に目を付けたサルを追い払うために、栗園内に猟犬を放し飼いにするという涙ぐましい努力が払われている。欧米人から「クジラを殺すな！」と叱られるし、私も、クジラは殺すべきではないと思う。しかし、哺乳類を根絶してきた欧米人には言われたくない。

12000～5000 年前、南北アメリカ大陸に生息していたマンモス 4 種、マストドン 3 種、ラクダ 3 種、長角バイソン、ウマ、プロングホーン、ジャコウウシ、地上性オオナマケモノ（メガテリウム）、オオアルマジロ（グリプトドン）、剣歯虎など多くの大型動物が絶滅した。この絶滅は、ちょうどインディアンの南下と時を同じくしているので、人類が絶滅の原因だという専門家もいる。インディアンが用いた投槍器（アトラトゥル）が大型動物を絶滅に追いやった可能性がある。他に、北アメリカ大陸では、12900 年前の地層に存在する黒い層は彗星の衝突による大規模火災で生じたとしてされており、彗星の衝突も大型動物の絶滅に影響した可能性が指摘されている。

人類による野生動物の絶滅について、うまくまとめているサイトがあるので、以下に概要を書いておく。 <https://www.rui.jp/ruinet.html?i=200&c=400&m=92283>

***ここから

人類の進出の最前線ではたいがい動物の大量殺戮が起きている。通常、哺乳類の絶滅速度は 8000 年に 1 種、鳥類は 300 年に 1 種程度であるが、ここ数万年の間の絶滅種の増加は非常に早い。8～4 万年前、アフリカで新人が拡散しはじめた頃、エダツノキリン、オオイノシシ、ヒッパリオン（ウマの一種）、オオツノスイギュウ、オオヒツジなどアフリカの大型哺乳動物の 40%が絶滅した。3～1 万年前、ヨーロッパに新人が進出すると、マンモス、ケブカサイ、メルクサイ、ステップバイソン、オオツノジカ、ジャコウウシなど大型哺乳動物の 50%が絶滅した。ユーラシアでは、スミロドン（大剣歯虎）、日本では 1 万年前頃にはナウマンゾウ、オオツノジカが絶滅した。3.5～2.5 万年前、人類は北米に到達する。1.4～1 万年前からオオナマケモノ、マンモス、スミロドン、カストロイデス（巨大なビーバー）、カリフォルニアライオンなど 57 種が絶滅した。その後、2000～3000 年間に、ア

メリカラクダ、マストドンなどが絶滅するなど、体重 50kg を超える草食獣の 7 割が消えた。南米大陸では、マストドン、オオナマケモノ、ウマ類など大型動物の 8 割が消滅した。ペネズエラ、チリの殺戮跡（キルサイト）からは大量の絶滅種の骨が発掘されている。オーストラリアでは 2~1.3 万年前にジャイアントカンガルーなど大型獣の 30%が絶滅した。原因は移住してきたアボリジニによる狩猟が大きい。9 世紀、ニュージーランドにポリネシア人が移住して以降、走鳥類のモア 13 種が絶滅した。マダガスカルでは約 1000 年前、マレー系民族が移住して以降、大型キツネザルの 6 種、大型鳥、カバなど大型哺乳類が絶滅した。

多くの動物が、人類の娯楽のためにも絶滅している。エジプトでは耕地拡大、湿地干拓のため、古王朝時代（紀元前 2884~2258 年）にゾウ、サイ、キリンが消滅した。紀元前 200 年頃までに、ギリシャ、小アジアではライオン、ヒョウ、ビーバーが絶滅した。古代ローマ帝国では、娯楽のために多くの動物が競技場で闘わされて殺された。ローマのコロシウム完工式では、ライオン、ヒョウ、サイなど 900 頭、トラヤヌス帝がダキアを征服したときには 1 万 1000 頭の動物が殺された。ローマ帝国に動物を供給していた北アフリカでは、ゾウ、サイ、シマウマが、ナイル川ではカバが、ペルシャ北部・メソポタミアではトラが絶滅した。

17 世紀以降、ヨーロッパ世界が拡張し、その後の 300 年間で哺乳動物、鳥類はそれぞれ 100 種類以上が絶滅した。絶滅の速度はそれ以前の数千倍になった。かつて欧州全域にいたオオカミは、15 世紀以降のオオカミ狩りで、イングランドでは 1486 年、スコットランドでは 1743 年に絶滅した。中世まで広く分布していたヨーロッパバイソンは 18 世紀以降に殺され、1920 年に絶滅した。17~18 世紀、欧州の船乗りは世界中の島の動物達を食糧として殺した。この結果、スコットランドのオオウミガラスが 1844 年に、モーリシャス島のドーデーが 1681 年に絶滅した。北米では、バイソンが 6000 万頭以上いたが、1830 年代から肉と毛皮を目的に殺戮が始まり、1890 年代には絶滅寸前になった。また北米のリョコウバトは 50 億羽もいたようだが、1850 年代以降、大量殺戮が始まり、1914 年に絶滅した。

ヨーロッパでは、中世以降、地位の象徴として毛皮の需要が拡大した。リス、テン、オコジョ、キツネなどが流行。英国王室の記録によれば、14 世紀のリチャード 2 世は、1 年で 10 万 9000 枚の毛皮を購入している。16 世紀には南ヨーロッパのビーバーが絶滅した。シベリアでも 18 世紀末には毛皮獣が消滅、ホッキョクギツネがほぼ絶滅、1750~90 年の間に北太平洋では 25 万頭のラッコが殺された。その後、毛皮産業は北米に注目し、17 世紀にはカナダ、ニューヨークのビーバーが絶滅した。オーストラリアでは、カモノハシ、コアラ、オポッサムが大量に殺された。1919~21 年の 3 年間で、550 万枚のオポッサムと 20 万枚のコアラが輸出された。

海の哺乳動物も殺された。チリ沿岸では 1797 年からの 7 年間で 300 万頭のアザラシが、19 世紀の南インド洋では、20 年間で 600 万頭のアザラシが皆殺しにされた。北大西洋では白い毛皮をとるために、1850 年には年間 60 万頭の子供のタテゴトアザラシが殺された。1800~1915 年の間に約 4000 万頭のアザラシが殺されたと推定されている。クジラも、鯨油を燃料とするために狙われた。古代ローマ帝国は、地中海のクジラを絶滅させている。15 世紀にはスペインがビスケー湾のクジラを、16 世紀以降はオランダ、ドイツ、イギリスが北欧でクジラを絶滅させた。20 世紀にはヨーロッパのクジラは壊滅した。その後、世界

中でクジラを乱獲、クジラが激減することで1950年代には世界の捕鯨産業自体が崩壊してしまった。

以上の歴史から言える事は二つある。一つは「『自然環境は我々人間の手で保護しなければならない』という環境保護団体等の思想」の傲慢さだ。人類は多くの動物を絶滅させてきた。9月の動物愛護週間では、ペットの愛護キャンペーンよりも、この歴史を知る事と、これら絶滅させた動物への謝罪と感謝をしたほうがいい。二つ目は、欧米発の動物保護運動は欺瞞だということだ。有史以来、特に近代以降、全世界で、動物絶滅を加速させてきたのは、彼らと彼らが広めた市場原理だった。その事実を問わず、他民族に自然保護を主張する資格は無い。

***ここまで

【188頁】私は森林を構成する要素のなかでも、とくに野生動物に関心が強かった。私が野生動物を追いかけた日々は、森林ジャーナリストへ歩む道の出発点と言えるかもしれない。…略…一般に自然破壊の進行で野生動物は減っているという思い込みが強いなか、増えている動物がたくさんいること、そして人間や生態系に悪影響が出ていることを紹介するのは有意義だろうと思うに至った。

【コメント】人生をかけて野生動物を追いかけたにしては体験談が少な過ぎる。筆者は、ナラ枯れについても頻繁に情報発信しているが、多くが「思いつきのコメント」である。見聞きするだけでなく、現場で実際に体験すべきだ。

著者は、都会で暮らしながら、農山村に出かけて取材しているだけである。農山村で暮らす住民が語ることにしか把握していない。篤農家や猟師は、森林ジャーナリストのような都会で暮らす人とは本音は語らないことも多い。大学教授や学生達と複数の森林組合を対象に、聞き取り調査をしたことがあった。W森林組合では、聞き取り調査後、私だけが別室に呼ばれ、組合長が「いつからジャーナリストが林業するようになったんだ」と怒った。その組合長は、私が農山村で暮らし、農林業をしながら研究をしていることを知っていたので、私にだけに「森林組合は、本来、黒字を出すべき事業体ではない。黒字が出たければ、H森林組合のように、道の近くだけを伐採すればいいが、W森林組合は、森全体のことを考えている。黒字がでた場所の利益を、赤字が出た場所に使うことは組合員にも了解を得ている。森林組合が黒字を出すことを優先すれば、森は荒れる」と本音を語ってくれた。

【188～189頁】そこで動物に関する取材内容や自分の体験などを振り返りつつ、各種の文献や論文に目を通していたところに起きたのがコロナ禍だ。まったく想定外の出来事だったが、むしろ外出自粛（と言いつつ、毎日森に出かけていた）のなか、本書執筆に集中することができた。そして気付いたのは「コロナ禍も、獣害の一つではないか」ということだ。新たな感染症をもたらした新型コロナウイルスは、おそらく野生動物から人にうつることで全世界的に広まった。そして経済全般をストップさせ、人々の生活を根底から崩す危険を出現させたのだ。それは野生動物の恐ろしさを一般人が感じる機会となったのではないか。だから、都会で暮らしている人々が、獣害に悩まされる地方の農山村を他人事のように眺めているのは危険だ。いまや獣害は誰にでも襲いかかるのだ。

【コメント】筆者には「コロナ禍が想定外」だったのだろう。私は、ずいぶん前から、パンデミックを予想していた。2018年10月5日、Facebookに「日本の獣害は、もはや農山村だけの問題ではありません。今朝、NHKも指摘していました。獣は農作物を食い荒らすだけでなく、人命を奪う問題になっています。ここまで増えると感染症も問題になるでしょう。昨年、マダニにさされて亡くなった方が8人おられました。鹿が人命を奪うウィルスを持っていて、マダニが媒介しているのです。猪がブタインフルエンザで死亡するケースも増えています」と指摘している。

<https://www.facebook.com/masahidek2/posts/2024870904241241>

筆者は、毎日森に出かけているようだが、私は、毎日森の中で暮らしているようなものなので、何が起こるのかが予想しやすいのかもしれない。7世紀後半に実在した山岳修行者の役行者も、8世紀後半に活躍した空海も、森の中で暮らしていたので、知識が豊富だった。森に出かけているだけでは知識が増えないのだろう。

私は、丹波栗の研究者であるので、病虫獣害も研究してきた。樹木の伝染病であるマツ枯れやナラ枯れで、それなりの研究成果をあげた。マツ枯れでは、マツノマダラカミキリを成木に放してマツ枯れを再現することに成功し「大気汚染がマツ枯れの主因である」との主張を退けた。京都で大問題になった鳥インフルエンザにも対応したし、限界集落の区長も努め、獣害対策をしてきた。筆者のように見聞きしたのではなく、実践してきた。

実家は、薬草栽培をしながら町医者をしていたし、母の祖先は、上述したように、「かてもの」という救荒食物を記した本を残した荏戸善政である。親戚や近所にも、それなりに詳しい人がいて、多くのことを教えてくれた。

現場で実践している私には、本を書く暇がない。ただし、学会発表や論文発表は、公立林試の研究者としては多いほうで、FacebookやYoutubeでも情報発信している。テレビや新聞で扱われた量も森林分野では群を抜いているだろう。なぜ、私が発信している情報が筆者に伝わらないのだろう。筆者は、私が開発したナラ枯れ防除法について、いろいろと書いているが、私に質問してきたことはない。私のように多くを熟知している人間は、著者にとっては厄介な存在なのかもしれない。素人なのに専門家面する人は京都市にも多い。また、ボランティア活動の指導者にも同様の人がたまにいる。そういう人達は「認めて欲しい」という社会的欲求が強く、間違った対策をネットで披露している。放置できないものは指摘することがある。熱心に聞いてくれる場合が多いが、怒って電話を切る人もいる。ネットで情報発信している内容が、専門家から見て「間違っている」と指摘しているのだから、気分を害しても、最後まで聞くべきである。なぜなら、獣害やナラ枯れなどは、被害が周囲に伝染するため、間違ったことをすると周囲にも迷惑をかけることになる。間違った消火方法をしている人がいたら、消防署員は注意するし、注意された人は、専門家の話を最後まで聞くはずだ。

筆者は、ナラ枯れのシート被覆やカシナガトラップに疑問があるなら、私に質問すべきだ。プロと接することを避けたい気持ちは判らぬはないが、素人が思いつきのコメントをしていたのでは、森は荒れるし、獣害も減らない。世界中の森を見たら判る。京都市市街地周辺の森は、世界一荒れている。「船頭多くして船山に登る」は、指図する人が多すぎると目的とは違う方向に進んでしまうことだが、その船頭が素人だと結果は、さらに悲惨になる。森は人間行為の是非を映す鏡である。

新型コロナでも、ジャーナリストやコメンテーターが、わかったようなことを言っている。外野がうるさすぎるから、現場が前に進みにくくなっているように思える。ナラ枯れでも、現場に来るだけの人間は黙るべきだ。そうでないと、現場にいる人間からの貴重な情報が、情報を必要とする人に伝わらない。この本も、獣害の本質を見誤っており、具体策を提示していない。獣害に関わる役人が素人ばかりになっている現状では、このような本は無意味というよりは、ないほうがマシだ。本に対するコメントを書くのは癖であるが、この本のコメントを書き終わった 2022 年 2 月 1 日、Facebook に以下のことを書いたら反響があった。

***ここから

ジビエが日本で普及しないのは、天武天皇あたりからの施策のためだ。明治維新後、肉食を推奨したいと考えた為政者は、福沢諭吉に「欧米先進国は肉を食べている。滋養があるので食うべき」と新聞に書かせた。京都府では、1975 年、猟師は 9500 名ほどが登録されていたが、一気に 2800 人にまで減った。子供の頃、シカを見ることはなかったが、ジープのボンネットにシカを載せて由良川にやってきた猟師がいた。近くに小屋を借りて、そこでシカを解体していた。覗きに行った私に、その猟師は「食うか？生で食えるぞ」と言ったが、食わなかった。クマやシカの肉はもらっていたが、臭くて食べたものじゃなかった。血抜きの問題だったのだろう。

最近「獣害列島」という本を読んで「都会で生まれ育った人って、こんなにも知らんのか」と驚いた。限界集落で栗を栽培し、獣害を回避するため、いろんな物も開発してきた。獣のことを知るため、論文だけでなく古文書も読み、猟師さんの話を聞き、研究者とも議論してきた。見たり聞いたりするだけじゃなく、実践していると、だいたいわかってくる。オオカミを放したり、犬を放し飼いにすれば、少しは獣害が減るだろう。森にドングリの木を植え、里に獣の餌になるものを放置しなければ、少しは獣害が減るだろう。50 年前のように、集落周辺の見通しを良くし、大勢が集落周辺（山林）で労働すれば、少しは獣害が減るだろう。でも、里で起こった大変化が獣害の要因になっている。それは、燃料革命と 1997 年のダイオキシン問題に端を発した焚き火の禁止だ。ナラ枯れだって、いまだに、虫が運ぶ病原菌で枯れていると、大勢が思っているが、最初のナラの枯れは、虫とは無関係だ。温暖化が原因でナラ類が衰弱し、カシナガがいたらナラ枯れになるし、いなければ、ナラタケ病になる。「木を燃やさなくなったことはナラ枯れだけでなく、獣害も助長している。その影響は、オオカミや野良犬、猟師の減少よりも大きい」という考えは、私が溜め込んだデータを駆使して 3 時間かけて説明すれば、誰もが納得する。結局、現場にいないと、わからないのだと思う。一気に書くので不正確な部分があるが、「人が火を使わなくなったので、獣が里に近づいた」と考えた理由を書いてみる。

まず、歴史を振り返ってみる。ナラ枯れも点で考えるから間違える。歴史の線上で考えれば答えは見つかる。アフリカで広葉樹の森が発達し、樹上（林冠）で暮らす猿が、数百万年間も進化し続けた。インドがユーラシアに衝突、アフリカは乾燥して森が失われ、猿たちは草原に下ろされた。樹上で二足歩行していた類人猿は草原では有利であった。その種が進化し、800 万年前、類人猿から猿人になった。その頃の猿人は、主に「草の根」と「肉」を食べた。草の根を食うタイプはアゴが発達したが、脳は発達せずに絶滅した。肉を食うタイプは、足も遅く、爪も牙もなく、肉食動物と戦っても勝てない。シマウマのよ

うな草食動物でさえ倒せなかった。だから、ハイエナや猛禽類が食い残した肉を食った。骨についた肉を石で剥ぎ取ったり、骨を割って骨髓をすすった。肉を食べるタイプが、道具を使うようになり、脳が発達して道具を進化させ、棒の先に石をくくりつけた槍で獣にとどめを刺すことを覚えた。やがて石を擦って火を起こすこと覚えた。火を焚けば暖がとれるので体毛を減らした。体毛が薄いと汗をかくことで体温が下げられる。42.195kmをバテながらも走れる動物に進化した。この能力を活かし、弱った獣を長時間追跡して捕獲するようになった。火を使うことは、猿から人間への進化の中で最も画期的であった。かがり火を焚くことで獣に襲われる危険性が減った。現代人も、真っ暗よりも、かがり火の前のほうが熟睡できる。やがて飛び道具（アトラトル）も発明して狩りが効率的になり、食料が豊富になった。食料が豊富になると「心」が進化して「哀れむ」という感情も発達した。50万年ほど前、ホモエレクトスはアフリカから世界中に分散し、北京原人やジャワ原人になった。20万年前、アフリカではホモサピエンスが誕生した。誕生してすぐに危機的状況に陥ったが、海に出て貝や海藻を食うことで危機を脱し、アフリカから出た。6万年前、中東あたりでネアンデルタール人と交雑(三大宗教の聖地が出会いの場所なのかも)、日本列島には4万年前に到達した。ネアンデルタール人が数万年前に絶滅したのは、言葉の数が少なく、ホモサピエンスに比べて集団での狩りが苦手だったためとされている。ネアンデルタール人はホモサピエンスよりも体格が大きく、個人で獣が倒せたので、集団で狩りをしなかったのかもしれない。「強い者は生き残れない。変化する者が生き残る」というのは生態学の常識であり、ネアンデルタール人は強く変化しなかったが、ホモサピエンスは狩りでも改良を続け、オオカミと組むようになったことで、氷河期を乗り越えられたのかもしれない。ネアンデルタール人は、ホモサピエンスとの交雑によって純血が減り、アリー効果で絶滅した可能性も指摘されている。いずれにしても、日本列島にやってきたホモサピエンスはオオカミと組んでいたはず。オオカミには厳格な順位があり、順位下位の個体は、群れでは食えず、ホモサピエンスに近づき、その嗅覚と俊敏性でホモサピエンスの狩りに貢献して餌にありついた。そのオオカミが犬になった。オオカミと犬は同種である。

日本列島に住み着いたホモサピエンスは、氷河期だったので定住せず、マンモスやトナカイのような大型獣類を追いかけて暮らしていた。氷河期が終わりに近づくと、暖流に囲まれた日本列島は、世界に先駆けて落葉広葉樹林が拡大し、森には、ドングリ、栗、トチノミなどの木の実が溢れ、それを食うウサギやシカ、イノシンなどの小型獣類も増えた。河川や湖沼、海には魚が溢れた。縄文人は1万6千年前に定住生活を始めた。栗を栽培する農業は、メソポタミアの麦を栽培する農業よりも4千年も早く開始された。縄文人は、木の実や肉を煮炊きするための土器も発明したが、これも世界初の快挙である。縄文人は、森ではかがり火を焚いて夜を過ごし、日中に狩りをした。集落では常に火を燃やしていた。森と集落が同時に焼けたら暮らせないので、集落周辺に溝を掘った。弥生時代にも環濠集落は多かった。環濠は防火帯であった。また、環濠にはシシ垣と同じ役割も持たせた。すなわち、獣から村を守るだけでなく、獣を追い立てて捕獲する装置だった。縄文人や弥生人は犬をペットにするだけでなく、狩りにも利用した。縄文時代以降、人は、犬、火、環濠(シシ垣)で獣と対峙した。それは、明治期まで1万5千年以上も続いた。

種子島に伝来した銃は、獣害対策として農民にも普及したが、百姓一揆を恐れた秀吉は、

刀狩りの際に銃を没収した。徳川綱吉は、さらに厳しい銃規制をした。綱吉は、生類憐みの令も出したため、獣が増えて獣害が深刻化し、全国各地にシシ垣が建造された。銃規制は明治になっても続いたが、日清・日露戦争に農民が駆り出され、農民は銃の扱いに馴れた。その頃、軍隊で使わなくなった村田銃が民間人に安価に払い下げられ、全国に出回った。農民は、火、犬、シシ垣の他に銃（火縄銃よりも効率的な銃）を使って獣と対峙した。その結果、里に出る獣は、ほぼ絶滅した。すると、不要となったシシ垣は壊された。

江戸時代には、今よりも、イノシンやシカは多かったことを現代人は忘れてしまった。先人達が、犬、火、シシ垣、銃で獣に恐怖を与えていたことを現代人は忘れてしまった。シシ垣は、防護柵ではなく捕獲装置であったことを現代人は忘れてしまった。だから現代人は「餌が増えたから獣が増えた」と考える。江戸時代の人が見たら「里が獣にとって安全になったから獣が増えた」ことを見抜くだろう。

1960年代になると、一般家庭にプロパンガスや電気が普及した。オクドサンや五右衛門風呂は姿を消し、農作業後の焚き火だけが煙の源となった。シシ垣もないので獣が出てくるようになった。そこで、タイヤを燃やしたり、蝋燭を灯して獣を避けた。1975年頃、野良犬が排除され、獣が一気に里に出てくるようになった。そこで、漁網網のような柵で対抗したが不十分で、電気柵も用いた。1997年、ダイオキシン問題が浮上、焚き火が禁止された。獣が最も怖がる煙の匂いが里から消え去った。就農者も減り、獣を追い払う行為も減り、野山で遊ぶ子供もいなくなり、日本中が奈良公園のように獣にとって安全な場所になった。動物は「食うため」「繁殖するため」「逃げるため」に動く。シカは千種類以上の植物が食えるので、食うために動く必要は少ない。雌シカは生後18ヶ月で100%妊娠する。雌雄が交尾相手を慎重に選んでいるはずはなく、繁殖に使うコストも少ない。シカはタヌキがいると餌に近寄らないほど臆病者であり、シカの動機は「逃げるため」で占められている。里が安全になれば、逃げる必要が減り「食うため」と「繁殖するため」に専念できるので、獣は増えた。また、里が安全だから、里に出て獣害を起こすようになった。原発事故で、人が入らない場所は、イノシンやシカが日中に闊歩している。獣にとって、人（とくに人が燃やす火）は恐怖なのだ。

ホモサピエンスは、誕生した20万年前から火を使って獣を追い払った。縄文人は犬も使ったし、シシ垣も使った。江戸時代にはシシ垣も頑丈になり、獣が増えた時は「庄屋狩り」と称して、女や子供もセコとして参加し、数百～数十匹ものシカやイノシンを、シシ垣に落として槍で突いて仕留めた。その際、数人だけが銃を持ち、獣が人を襲うのを防いだ。今は、火、犬、シシ垣がない。あるのは「柵」と「猟師の銃と罠」だけだ。今さら、オオカミを放ったところで、焼け石に水である。私が暮らす集落だけで、オオカミより優しいはずの犬に咬まれた事故は多い。母はシェパードに咬まれて重傷を負った。「オオカミを放獣すべき」と言う人もいるが、それは堪忍して欲しい。

私が開発した鳥獣撃退器は、恐さしらずのウリボウには効果がないようである。ある寺から「鳥獣撃退器を設置したが、ウリボウは苔を荒らす」と連絡があり、「カプサイシンよりも木酢液が効くかも」と伝えた。数日後に「小林先生は天才だ」と連絡があった。煙の匂いがする木酢液は効いたようである。

学者や役人は都会で暮らしてきた人達ばかりで、焚き火が獣害対策になっていた事実を知らない。だから、日本では、焚き火が犯罪行為になってしまった。都会の人は「煙たい」

「喘息が悪化する」「洗濯物に煤がつく」と焚き火を敵視しながら、火力発電所でおこした電気を平気で使っている。薪ストーブを敵視する人までいる。

子供の頃、大きな蝋燭を作って水田の畔に等間隔に立てていた。そんな経験がない人ばかりで獣害について議論していたのでは、獣害は減らない。ナラ枯れは、温暖化で弱った木を利用してカシナガが増え、周囲の健全木にも加害して広がる被害である。無知な現代人は、無被害地で皆伐したり、無被害地の健全木に穴を開けて殺菌剤を樹幹注入したり、フェロモン剤を無被害地に設置している。これらは、ガソリンの池に火の粉を撒き散らす愚行である。だから、名古屋、大阪、神戸、東京のような大都会でナラ枯れが深刻化する。
***ここまで